学び:変化の喜びとしての質―実行委員会からのご挨拶―

人間の生活の質を問うことは、何よりも固定しないもの、動くものに着目することから始まるといえます。質的心理学は、変化するプロセスへの着目から始まり、変異や多様性との接触を通して、人の生活関係そのものをかえるような実践へと発展するといえます。つまり、学びです。日本質的心理学会第5回大会では、学びから質的心理学を考えます。

学びをテーマとして会員の皆様から会員企画シンポジウムならびに個人ポスターをつのりましたところ、たくさんの学びと変化の喜びに関する企画が寄せられました。おかげさまで11の会員企画シンポジウムと64のポスター発表が実現しました。

準備委員会企画記念講演では、長く質的方法の重要性を指摘されてこられた吉田章宏氏(淑徳大学)にお話しいただきます。私たちの進めている質的心理学の運動について忌憚のない評価をお聞かせいただけるものと期待しています。また、記念シンポジウムとしては、現代アートの旗手の一人であり、アートワークショップ等の実践を通じて、物作りや表現教育についても発言されている、土佐信道氏(明和電機代表取締役社長)をお招きしてセッションを持つことができました。

その他にも、2つの学会研究交流委員会企画のシンポジウム、4つの大会企画のシンポジウム、2つのチュートリアルを用意することができました。みなさま、本当にありがとうございます。このようなたくさんの対話を基礎にして、大会の両日を始まりにして、さらにたくさんの喜びにつながる新しい質が開かれていくものと確信します。

ところで変化と喜びというテーマは、ヴィゴツキーとスピノザに由来します。質的研究の重要な源流の一つに数えることができるヴィゴツキーですが、生涯熱心なスピノザの読者であったそうです。ヴィゴツキーのアイディアの血肉となっている、スピノザの思想とすべての論証は、どうしたら人間の能動的活動力が発揮され喜びを実現できるかに集中しています。

喜びとは人間がより小なる完全性からより大なる完全性へ移行することである。

(『エチカ』第3部 諸感情の定義2)

浅野俊哉氏は『スピノザ―共同性のポリティクス 洛北出版 (2006)』の中で、スピノザの喜びが達成感情の瞬間的ピークではなく、むしろより大きな完全性への移行に伴う持続感情だとされていました。大きな完全性への移行、つまり学びは、喜びの感情の持続プロセスなのです。

会員から寄せられた多数の企画に助けられて、筑波における2日間の討論が、より広大にひろがる地平に目を開かれる、あるいはわれわれが異空間に連れ去られるような、深い喜びの出来事となることを願ってやみません。

日本質的心理学会第5回大会実行委員会を代表して 茂呂雄二(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

大会参加者へのご案内

大会会場

筑波大学総合交流会館にて開催いたします。

詳しくは会場案内図をご参照ください。

受付

- ◆ 大会期間中は受付でお渡しする参加章(氏名、所属を記入したもの)をお付けください。
- ◆ 受付場所は総合交流会館入口ホールです。受付時間は以下の通りです。

第1日(11月29日(土)):8:30~15:15

第2日(11月30日(日)):8:30~15:45

◆ 大会参加費は以下の通りです。

当日参加(会員) 一般 6,000 円 学生 3,000 円

(非会員) 一般 9,000 円 学生 4,000 円

※「学生」とは正規に学籍を有する者であり、聴講生や研究生等は「一般」とします。

※事前申し込みをされた方は、予約参加章を提示ください。

- ◆ クロークはご用意いたしませんので、お荷物、貴重品の管理は各自でお願いいたします。
- ◆ 当日大会開始前後、受付が混雑することが予想されます。時間にゆとりをもってお越 し下さるようお願いします。

個人研究発表

第1日、第2日の両午前にポスター形式で個人研究発表を実施いたします。

発表会場は総合交流会館多目的ホールです。

発表者は発表開始時刻 10 分前までに指定された掲示用ボードにポスター等資料を掲示ください。掲示されました資料は、終日掲示されたままで結構です。

掲示用ボードの一人分のスペースは幅 90 cm×高さ 180 cmです。画鋲、テープを会場にご用意いたします。発表時間は両日とも 9 時 30 分から 11 時 30 分です。

休憩室・打ち合わせ室

総合交流会館ホール横にございますラウンジをご利用ください。

会場の都合上、打ち合わせ室は設けておりません。休憩室と同様、ラウンジをご利用くだ

さるようお願いいたします。

昼食

大学構内の飲食店は土日のため閉店しておりますので、昼食をご自分でご用意いただくか、 ランチマップをご参照の上、近隣の飲食店等をご利用ください。

大会ホームページにもランチマップを掲載しております。そちらをご確認の上、ご利用ください。



喫煙・飲食に関するご注意

会場内はすべて禁煙です。

一部カーペット敷の会場および通路がございます。そこでの飲食はご遠慮願います。 ご協力をお願いいたします。

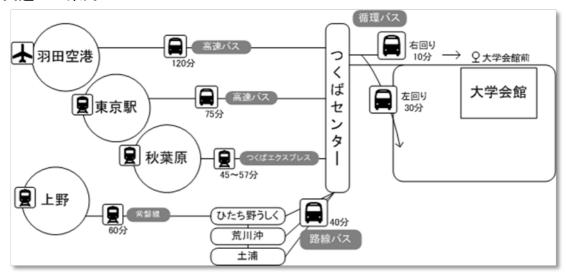
展示・販売

会場である総合交流会館入口、ラウンジ傍にて、書籍・分析機器等の展示・販売を行います。

大会本部および総合案内

パントリーおよび受付(会場入口ホール)にございます。

交通のご案内



つくば駅(つくばセンター)まで

- **つくばエクスプレス** 秋葉原からつくば駅(つくばセンター)まで(快速 45 分)
- 高速バス 羽田空港からつくばセンターまで(約 120 分)東京駅からつくばセンターまで(約 75 分)
- JR 常磐線 上野駅からひたち野うしく駅・荒川沖駅・土浦駅まで(約 60 分) + 関東バス・筑波大学中央行き(約 40~50 分)

つくば駅(つくばセンター)から会場(総合交流会館)まで

- 大学循環バス (C10 系統) 左回り 大学会館前バス停まで(約 10 分)
- 大学循環バス (C10 系統) 右回り 大学会館前バス停まで(約 30 分)
- **筑波大学中央行き** 大学会館前バス停まで(約 10 分)
 - ※ いずれも 260 円、後乗り前降り・料金後払いです。

2つくばセンター ←→ ♀大学会館前 (C10系統、所要時間 10分)			♀つくばセンター ←→ ♀ 大学会館前 (C10系統、所要時間 30分)				
つくばセンターから 右回り 土日祝		大学会館前から 左回り 土日祝		つくばセンターから 左回り 土日祝		大学会館前から 右回り 土日祝	
9時	20	9時	18 58	9時	00 40	9時	27
10時	00 40	10時	38	10時	20	10時	07 47
1189	20	118時	18 58	1186	00 40	118時	27
12時	00 40	12時	38	12時	20	12時	07 47
13時	20	13時	18 58	13時	00 40	13時	27
14時	00 40	14時	38	14時	20	14時	07 47
15時	20	15時	18 58	15時	00 40	15時	27
16時	00 40	16時	38	16時	20	16時	07 47
17時	20	17時	18 58	17時	00 40	17時	27
18時	00 40	18時	38	18時	20	18時	07 47
19時	20	19時	18 58	19時	00 40	19時	27
20日季	00 40	20時	38	20時	20	20時	07 47

懇親会

大会第1日(11月29日(土)) 18時30分より、オークラフロンティアホテルつくば本館(つくば駅・つくばセンター近く)にて懇親会を開催いたします。受付は懇親会会場にて18時より承ります。場所につきましては、折り込み頁および大会ホームページでご確認ください。

なお、当日参加は以下の参加費として8,000円を申し受けます。

大会参加者へのご案内

大会会場

筑波大学総合交流会館にて開催いたします。

詳しくは会場案内図をご参照ください。

受付

- ◆ 大会期間中は受付でお渡しする参加章(氏名、所属を記入したもの)をお付けください。
- ◆ 受付場所は総合交流会館入口ホールです。受付時間は以下の通りです。

第1日(11月29日(土)):8:30~15:15

第2日(11月30日(日)):8:30~15:45

◆ 大会参加費は以下の通りです。

当日参加(会員) 一般 6,000 円 学生 3,000 円

(非会員) 一般 9,000 円 学生 4,000 円

※「学生」とは正規に学籍を有する者であり、聴講生や研究生等は「一般」とします。

※事前申し込みをされた方は、予約参加章を提示ください。

- ◆ クロークはご用意いたしませんので、お荷物、貴重品の管理は各自でお願いいたします。
- ◆ 当日大会開始前後、受付が混雑することが予想されます。時間にゆとりをもってお越 し下さるようお願いします。

個人研究発表

第1日、第2日の両午前にポスター形式で個人研究発表を実施いたします。

発表会場は総合交流会館多目的ホールです。

発表者は発表開始時刻 10 分前までに指定された掲示用ボードにポスター等資料を掲示ください。掲示されました資料は、終日掲示されたままで結構です。

掲示用ボードの一人分のスペースは幅 90 cm×高さ 180 cmです。画鋲、テープを会場にご用意いたします。発表時間は両日とも 9 時 30 分から 11 時 30 分です。

コピーサービスについて

学内にコピーサービスはございません。セッション等研究発表で使用されます資料は、事前にご準備くださるようお願いいたします。

休憩室・打ち合わせ室

総合交流会館ホール横にございますラウンジをご利用ください。

会場の都合上、打ち合わせ室は設けておりません。休憩室と同様、ラウンジをご利用くだ さるようお願いいたします。

昼食

大学構内の飲食店は土日のため閉店しておりますので、昼食をご自分でご用意いただくか、 ランチマップをご参照の上、近隣の飲食店等をご利用ください。

大会ホームページにもランチマップを掲載しております。そちらをご確認の上、ご利用く ださい。



喫煙・飲食に関するご注意

会場内はすべて禁煙です。

一部カーペット敷の会場および通路がございます。そこでの飲食はご遠慮願います。 ご協力をお願いいたします。

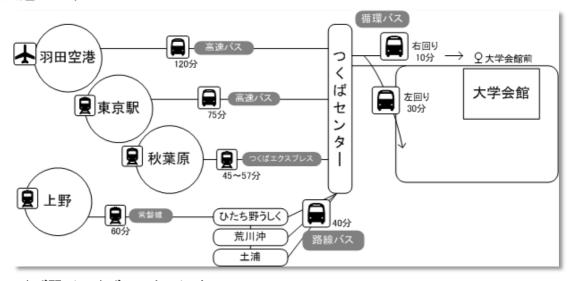
展示・販売

会場である総合交流会館入口、ラウンジ傍にて、書籍・分析機器等の展示・販売を行います。

大会本部および総合案内

パントリーおよび受付(会場入口ホール)にございます。

交通のご案内



つくば駅(つくばセンター)まで

- **つくばエクスプレス** 秋葉原からつくば駅(つくばセンター)まで(快速 45 分)
- **高速バス** 羽田空港からつくばセンターまで(約 120 分) 東京駅からつくばセンターまで(約 75 分)
- JR 常磐線 上野駅からひたち野うしく駅・荒川沖駅・土浦駅まで(約 60 分) + 関東バス・筑波大学中央行き(約 40~50 分)

つくば駅(つくばセンター)から会場(総合交流会館)まで

- 大学循環バス (C10 系統) 左回り 大学会館前バス停まで(約 10 分)
- 大学循環バス (C10 系統) 右回り 大学会館前バス停まで(約 30 分)
- 筑波大学中央行き 大学会館前バス停まで(約 10 分)※ いずれも 260 円、後乗り前降り・料金後払いです。

大学会館前から 大学会館前から 大学会館前から 大学会館前から 大学会館前から 大田収 大田収	Qつくばセンター ← (C10系統、所		Qつくばセンター ←→ Q 大学会館前 (C10系統、所要時間 30分)			
10時 00 40 10時 38 10時 20 10時 07 47 11時 20 11時 18 58 11時 00 40 11時 27 12時 00 40 12時 38 12時 20 12時 07 47 13時 20 13時 18 58 13時 00 40 13時 27 14時 00 40 14時 38 14時 20 14時 07 47 15時 20 15時 18 58 15時 00 40 15時 27 16時 00 40 16時 38 16時 20 16時 07 47 17時 20 17時 18 58 17時 00 40 17時 27 18時 00 40 18時 38 18時 20 18時 07 47 19時 20 19時 18 58 19時 00 40 19時 27						
2009 00 40	10時 00 40 11時 20 12時 00 40 13時 20 14時 00 40 15時 20 16時 00 40 17時 20 18時 00 40	10時 38 11時 18 58 12時 38 13時 18 58 14時 38 15時 18 58 16時 38 17時 18 58 18時 38	10時 20 11時 00 40 12時 20 13時 00 40 14時 20 15時 20 17時 20 18時 20	10時 07 47 11時 27 12時 07 47 13時 27 14時 07 47 15時 27 16時 07 47 17時 27 18時 07 47		

懇親会

大会第1日(11月29日(土)) 18時30分より、オークラフロンティアホテルつくば本館(つくば駅・つくばセンター近く)にて懇親会を開催いたします。受付は懇親会会場にて18時より承ります。場所につきましては、折り込み頁および大会ホームページでご確認ください。

なお、当日参加は以下の参加費として8,000円を申し受けます。



▶ 11月29日(土) 9:30 ~ 11:30

大会シンポジウム 「学びに再生する看護研究―実践の可視化と質的研究―」

ホール 企画・司会・話題提供: 櫻井利江 (筑波大学)

話題提供: 杉万俊夫 (京都大学)

西阪 仰 (明治学院大学) 佐居由美 (聖路加看護大学) 中山久子 (聖路加看護大学)

会員企画シンポジウム 「イアン・パーカーの"ラディカル質的心理学"

―変化を生み出すアクションリサーチの理論と方法―」

国際会議室 企画・話題提供: 八ッ塚一郎 (熊本大学)

話題提供: 永田素彦 (京都大学)

東村知子 (奈良女子大学) 矢守克也 (京都大学)

会員企画シンポジウム 「教育実践場面の分析におけるバフチン理論の可能性

―具体的なデータ分析をもとに―」

特別会議室 企画·話題提供: 田島充士 (高知工科大学)

話題提供: 西口光一 (大阪大学)

鈴木栄幸 (茨城大学)

指定討論: 茂呂雄二 (筑波大学)

朴 東燮 (釜山大学)

会員企画シンポジウム 「若手フィールド情報学者、質的研究への挑戦」

企画·話題提供: 辻 高明 (京都大学)

マルチメディアルーム 話題提供: 高崎俊之 (京都大学)

本吉達郎(京都大学)

水町衣里 (京都大学)

指定討論: やまだようこ(京都大学)

会員企画シンポジウム 「社会文化的アプローチからの道徳性研究の提案」

企画·話題提供: 吉國陽一 (東京大学)

第3会議室 臼井 東 (筑波大学)

話題提供: 湯浅周子 (愛育養護学校)

山下俊幸 (関東学院大学)

指定討論: 當眞千賀子 (茨城大学)

▶ 11月29日(土) 13:00 ~ 15:00

大会シンポジウム 「ライフとケアのデザイン―新しい医療モデルと質的研究の可能性―」

企画・司会: やまだようこ(京都大学大学院)

ホール 話題提供: サトウタツヤ (立命館大学)

山崎浩司 (東京大学)

行岡哲男 (東京医科大学)

斉藤清二 (富山大学)

指定討論: 下山晴彦 (東京大学)

大会シンポジウム 「テクノロジーと質的研究」

企画: 山崎敬一 (埼玉大学)

国際会議室 茂呂雄二 (筑波大学)

司 会: 岩木 穣 (筑波大学) 話題提供: 葛岡英明 (筑波大学)

久野義徳 (埼玉大学)

綿貫啓一 (埼玉大学)

指定討論: 上野直樹 (武蔵工業大学)

佐伯 胖 (青山学院大学)

会員企画シンポジウム 「**教育フィールドにおける観察者の省察**

―観察者の実践経験の投影としてのフィールド理解―」

特別会議室 企画: 上渕 寿 (東京学芸大学)

企画·話題提供: 本山方子 (奈良女子大学)

話題提供: 松本健義 (上越教育大学)

若山育代 (広島大学)

指定討論: 野坂祐子 (大阪教育大学)

チュートリアル② 「分析からデザインへ―学習科学に質的研究をどう生かすか―」

講師: 白水 始 (中京大学)

マルチメディアルーム

▶11月29日(土) 15:15 ~ 17:15

大会記念シンポジウム 「アートな学び―アートを介して生の質を転回する―」

企画: 山口(中上) 悦子 (大阪市立大学)

ホール 茂呂雄二 (筑波大学)

企画・司会: 伊藤 崇 (北海道大学)

話題提供者: 土佐信道 (明和電機)

宮崎清孝 (早稲田大学)

山口(中上)悦子 (大阪市立大学)

▶11月30日(日) 9:30 ~ 11:30

研究交流委員会企画 「ナラティブ・アプローチの向こう側―質的研究の豊饒化に向けて―」

企画・司会: 永田素彦 (京都大学)

ホール 登壇者: 上野直樹 (武蔵工業大学)

辻本昌弘 (東北大学)作道信介 (弘前大学)

指定討論: やまだようこ(京都大学)

会員企画シンポジウム 「インターローカリティについて考える―複数の現場を架橋する質的研究―」

企画: 矢守克也 (京都大学)

国際会議室 伊藤哲司 (茨城大学)

話題提供: 伊藤哲司 (茨城大学)

矢守克也 (京都大学

渥美公秀 (大阪大学)

指定討論: 南 博文 (九州大学)

会員企画シンポジウム 「ワークショップで人は何を学ぶのか」

企画: 佐伯 胖 (青山学院大学)

特別会議室 話題提供: 苅宿俊文 (青山学院大学)

茂木一司 (群馬大学)

植村朋弘 (多摩美術大学)

指定討論: 高木光太郎 (青山学院大学)

刑部育子 (お茶の水女子大学)

会員企画シンポジウム 「ライフエスノグラフィとサービスラーニングの出会い

―難病患者のライフとそれを支える多層システムに注目して―」

マルチメディアルーム 企画: 日高友郎 (立命館大学大学院文学研究科)

水月昭道 (立命館大学衣笠総合研究機構)

サトウタツヤ (立命館大学文学部)

話題提供者: 竹内 聡 (日本ALS協会茨城県支部)

日高友郎 (立命館大学大学院文学研究科)

市山雅美 (湘南工科大学総合文化教育センター)

海野幸太郎 (日本ALS協会茨城県支部)

福田茉莉 (岡山大学, 国立病院機構新潟病院)

指定討論者: 田坂さつき (立正大学)

韓 星民 (立命館大学)"

▶11月30日(日) 9:30 ~ 11:30

会員企画シンポジウム 「質的心理学と会話分析の接点を探る―母子相互行為の事例分析を通して―」

企画: 野村侑加 (筑波大学)

第3会議室 司会: 太田礼穂 (筑波大学)

話題提供: 野村侑加 (筑波大学)

高木智世 (筑波大学)

指定討論: 高梨克也 (京都大学)

鬼界彰夫 (筑波大学) "

▶11月30日(日) 13:40 ~ 15:00

大会記念企画講演 「質的心理学者への祈り、そして、願い―<学び>の意味と構造を考えつつ、

心理学研究者としての彷徨の跡を省みて―」

ホール

講演: 吉田章宏 (淑徳大学)

№ 11月30日(日) 15:15 ~ 17:15

大会シンポジウム 「学習・発達論の最前線―質的研究はいかに学習・発達を捉えるべきか―」

企画・司会: 香川秀太 (筑波大学)

ホール 話題提供: 鯨岡 峻 (中京大学)

能智正博 (東京大学)

森 直久 (札幌学院大学)

指定討論: 三宅なほみ (中京大学)

無藤隆 (白梅学園大学)"

会員企画シンポジウム 「変化を問う質とは何か—モデル化できる質、できない質—」

企画: 大倉得史 (九州国際大学)

国際会議室 有田 恵 (京都大学)

話題提供: 大倉得史 (九州国際大学)

有田 恵 (京都大学)

勝浦眞仁 (京都大学)

指定討論: サトウタツヤ(立命館大学)

西平 直 (京都大学)

▶11月30日(日) 15:15 ~ 17:15

会員企画シンポジウム 「主体性のデザイン」

企画: 有元典文 (横浜国立大学)

話題提供: 文野 洋 (首都大学東京)

青山征彦 (駿河台大学)

藤田悟郎(科学警察研究所)

高木光太郎 (青山学院大学)

指定討論: 有元典文 (横浜国立大学)

鈴木栄幸 (茨城大学)

研究交流委員会企画 「映像データの質的研究の技法と実践―身振りの分析を例に―」

企画·司会: 荒川 歩 (名古屋大学)

マルチメディアルーム 話題提供: 細馬宏通 (滋賀県立大学)・

指定討論: 古山宣洋 (国立情報学研究所)

砂上史子 (千葉大学)

チュートリアル① 「質的研究の"質"を問い直す」

講師: 好井裕明 (筑波大学)

第3会議室

質的心理学者への祈り、そして、願い

<学び>の意味と構造を考えつつ、心理学研究者としての彷徨の跡を省みて

吉田 章宏

淑徳大学 総合福祉学部 実践心理学科

日本質的心理学会の第五回大会にお招きをいただき、大会記念企画講演の機会を与えられたことを、光栄なこととも喜ばしいこととも思い、まず、企画者の大会委員長はじめ関係者の方々に、感謝の意を表します。

質的心理学の代表的な専門研究者の方々の集いにおいて、記念講演として、いま何を語ることが相応しいか、いろいろ考えてみました。(1)本大会のテーマが〈学び〉に関わること、(2)省みれば、心理学研究者としての私の生涯の歩みは、人間の〈学び〉を〈学ぶ〉私の彷徨の旅であったこと、(3)その〈学び〉の彷徨の跡から、私にも、心理学の将来を担う方々に、お伝えすべき何事かがあるに違いないこと、(4)与えられた短時間の中でも、ご一緒に考え〈学びあう〉ことに将来に向けた意味を見出しうるであろうこと、以上の4点を考え合わせました。そして、この記念講演を意義深いものとすべく、私なりの努力を傾け、凝縮された時をご一緒に楽しみたい、と考えました。

第一に(A)、お話する中身で、欠かすことが出来ないのは、私の研究上の個人的経験史です。これは、そもそも、 私が、ここにお招きくださることになったきっかけが、18 年前、私が書いた文章(吉田章宏、1990)を読んでくださっ たことであったということ、そして、そのような中身の話をぜひとも含めよ、と望んでくださったからです。実は、あの文 章の執筆は、あの頃、諸事情から、孤独感を深めていた私が、親友の現象学的心理学者Amedeo Giorgiを日本 に招き、諸大学の訪問に同行しながら、私の思いを語ったところ、その思いを率直に書く機会を持てばよいではな いか、との挑戦と激励を受けたことが、一つのきっかけともなっています。その個人的背景には、1980年から一年間 を過ごしたPittsburgh のDuquesne 大学の心理学科での親交がありました。私の思いつめた気負いにも関わら ず、発表した当時、読者からの反響は何もありませんでした。いや、そもそも読者が居なかったのかもしれません。 その後、5 年して、先輩の伊藤隆二さんが、暖かい共感と励ましの文章(伊藤隆二、1996a)を書いてくださいました。 しかし、それからまた、12年を経て今日に至っています。単純化して言えば、18年を経て、あの文章が、今回のこの 出来事を招いているのです。そのことに私は驚いています。日本では語ることの少なかったDuquesne大学での経 験なども、お話したいことです。それから、私が現在の私にたどり着くまでの経緯として、波多野完治、斎藤喜博、武 田常夫、林竹二、西郷竹彦、蘆田恵之助、竹田青嗣、等の先人と友人、また、神谷美恵子、荻野恒一、ベルク、安永 浩等の精神病理学の方々、また、キーン、Manen, Polkinghorne、Halling, Smith, Kunz などの友人たちとの出会に ついても、語りたく思います。さらにまた、その研究上の前史には、数量化理論、因子分析、ピアジェ、オースベル、 ルビンシュテイン、サイバネのアシュビー、情報理論、システム理論、など、まさに彷徨の歴史があります。しかし、個 人の彷徨の物語だけを、老いさらばえた老人の愚痴や繰言としてお聞きいただくだけでは、やはり、記念講演として は相応しくないでしょう。人間の物語は、常に、現在の視点から語られ、将来に向けて語られるべきものです。その ためには、過去の物語から学んで、現在を語り、将来への展望を積極的に開くことを目指さなくては、とも思います。 「質的心理学」。 私自身は、自らの<学び>の研究を、質的心理学としてよりは、 むしろ、1975 年頃からは、「教育実 践の、とりわけ、授業実践の現象学的心理学」という自己理解をしています。それも恐らく、「質的心理学」の一隅を 占めるでしょう。そこに至る途上では、末尾の文献表に含めたものも幾つか書いてきました。そこで、敢えて、現在に 至るまでの私の「主観的」な彷徨の物語を語らせて頂きます。想像上、彷徨の旅を同行し、共感的にお聴き頂けれ ば幸いです。

第二に(B)、より一層「客観的」なお話もしたいと思います。友人たちが寄稿している Smith(2003)の『質的心理学』の中にも、「現象学的心理学」が含まれています。しかし、現在の「質的心理学」全般の動向について語ることは、無知な私の任ではありません。で、少なくとも、その一部としての現象学的心理学について、私の知る限りの範囲で、お話しすることで、「客観的」であることを期待されている記念講演者の役割の一部を果したい、と思います。筑波大学には、日本心理学会(1990 秋)の際、早坂泰次郎教授と共に、Amedeo Giorgi 教授の講演の機会を設けていただいたというご縁があります。ジオルジ教授については、Giorgi,A.

(1971).(1985)などがあります。現在も読むに値する著作です。また、ジオルジ.(1990),(2004ab)のような私による翻訳・紹介もあります。で、いわば客観的に、ご関心をお持ちの方々に向けて研究事情なども、多少は、ご紹介すべきかな、と思ってもいます。例えば、人間科学研究国際会議(International Human Science Research Conference)のことなど(http://www.himolde.no/conf/ihsrc/2009)。私は、この会議の比較的活発なメンバーの一人です。2001年には、大正大学カウンセリングセンターのご好意により、東京会議を開くことが出来ました。そこで、精神医学者の安永浩博士のご講演(www.yas73.jp/index.htm)をいただく機会にさえ恵まれました。また、国内では、東京大学の中田基昭教授が持続してくださっている地味な研究論集『学ぶと教えるの現象学研究』の13号の刊行が来年春に予定されており、古書市場では「洛陽の紙価」を高めている様子です。日本の「質的心理学」の勃興と隆盛に通底しているのかもしれません。

こうして見てきますと、Wauchope/安永浩の「パターン」(A/B) の考えが、私の心の中では、自ずと浮かび上がってきます。「ひとつのパターンとは、諸部分をもつひとつの全体、その全体と等価なる諸部分」と安永博士は訳し、この言葉は、体験性質の二つの側面を例示して、「パターン」という用語を「わからせるため、のみこませるため」の概念である、といいます。パターンは、「模様、という訳でまず正しい」とされ、「A/B」と記号化されます。「結局、すべての体験はパターンなのである。それらはそのつど、適宜適用しうる対のカテゴリーで成り立っている」(安永浩、1987、14)。その例としては、「全体/部分」、「質/量」、「自/他」、「主観/客観」、「無合理/合理」、「精神/物質」、「意識/実在」あるいは、「生/死」のように、後者は前者を「論理的必然的先行者」とし、後者はそれに対して「条件的偶然的」である、非対称の関係にある、とされます。以上のような背景を踏まえて、客観的条件の要請にも応えて、以下のような内容を構想してみました。当日までには、何とか40枚ほどの文章にまとめて、会場で配布することが出来れば、と願っています。さて?参加くださる皆様の、これからの実践と研究の深化と発展に少しでもご参考になることがお話し出来ればと願い、私なりの努力を尽くします。当日参加くださる皆様との「出会い」を心から楽しみにしています。

- 1. 説明のパターン(A/B) (Wauchope /安永浩) について:「主観/客観」、「自/他」ついで、「質/量」
- 2. (A):パターン「主観/客観」の(A) 「主観」:

質的心理学の一隅へ到った私の道:私の彷徨の跡を辿って現在の視点から眺望する「主観像」

3. (B):パターン「主観/客観」の(B)「客観」:

「質的心理学」の一部分としての「現象学的心理学」の、私の現在の「主観的」視点からの、「客観像」

- 4. (A/B) 「質的心理学」の現状について無知なる私の視点から想像あるいは妄想し空想する「質的心理学」 A. パターン「質/量」の「質」:説明と理解、記述的心理学:意味と構造、「比喩としての数学」
 - B. パターン「質/量」の「量」:数量的心理学と数学的心理学:数量化と構造化
- 5.「質的心理学」の将来とその展望: **統合的心理学(A/B)への道** 質的心理学者に贈る、私の祈り (Prayer) と願い (Request)。 ("A monologue But also a dialogue" "A/B")

文献表

蘆田恵之助(1988)『蘆田恵之助 国語教育全集』、全25巻、明治図書

伊藤隆二(1996a)「教育心理学の思想と方法の視座:『人間の本質と教育』の心理学を求めて」、 『1995 年度 教育心理学年報』第35集、127-136

伊藤隆二 (1996b)「人間性心理学の主題と方法について:神谷美恵子の『生きがい』研究を中心に」、 畠瀬稔編、『人間性心理学とはなにか』、65-97、大日本図書

荻野恒一(1973)『現象学的精神病理学』医学書院

神谷美恵子(1966)『生きがいについて』みすず書房

キーン、E.(1989)『現象学的心理学』、吉田章宏・宮崎清孝 訳、東京大学出版会

西郷竹彦(1996-) 『西郷竹彦文芸・教育全集』全36巻 別巻3、恒文社

齋藤喜博全集、第一期、第二期、国土社

ジオルジ、A(1990) 「現象学的心理学の今日的諸問題」、

『人間性心理学研究』編集・翻訳 吉田章宏 第8号3-15

ジオルジ、A.(2004a)「看護研究への現象学的方法の適用可能性」、訳・構成 吉田章宏、 『看護研究』第37巻、第5号、49-57、医学書院

ジオルジ、A.(2004b)「経験記述資料分析の実際:現象学的心理学の『理論と実践』」、訳・構成 吉田章宏『看護研究』第37巻、第7号、63-75、医学書院

武田常夫(1990/1971)『真の授業者をめざして』国土社

中田基昭編(1987・2008)『学ぶと教えるの現象学研究』全12巻、

東京大学大学院教育学研究科教育創発学コース

ベルク,V. d. (1976)『人間ひとりひとり:現象学的精神病理学』早坂泰次郎/田中一彦 訳、現代社

安永浩 (1987) 『精神の幾何学』 岩波書店

安永浩(1992)「安永浩著作集」全4巻、金剛出版

吉田章宏(1987)『学ぶと教える:授業の現象学への道』海鳴社

吉田章宏 (1990)「『教育心理学』に期待する一つの遠未来像:僻地にある『迷える小羊』からみたその眺望」 『教育心理学年報』、第二九集 別冊、142-153

吉田章宏(1995)『教育の心理:多と一の交響』放送大学教育振興会

吉田章宏(1996)『子どもと出会う』岩波書店

吉田章宏(1999)『ゆりかごに学ぶ 教育の方法』一茎書房

吉田章宏(2004)「発問の芸術にみる開放性:ある達人教師による実践の現象学的解明」、 『淑徳大学院社会学研究科研究紀要』第11号、1-34

吉田章宏(2005)「『説明』を誘う発問と『理解』を誘う発問:ある達人教師の授業実践における発問芸術の現象学的解明」、『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第12号、39-82

吉田章宏 (2007) 「統合的な臨床実践学をめざして:臨床実践体験と臨床実践理論について」、 『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第14号、1-43

ルビンシュテイン著 (1960/1961) 『存在と意識』上/下 寺沢恒信訳 唯物論叢書 青木書店

ルビンシュテイン,S.L. (1981~1986) 『一般心理学の基礎』全四巻、秋元春朝、秋山道彦、足立自朗、 天野清、佐藤芳男、松野豊、吉田章宏 共訳 明治図書

Arnheim, Rudolf (1969) Visual Thinking, Univ. of California Press

Flavell, John H. (1963) The Developmental Psychology of Jean Piaget, D.van Nostrand

Giorgi, Amedeo (1971) Psychology as a Human Science, Harper & Row

Giorgi, Amedeo ed. (1985) Phenomenology and Psychological Research, Duquesne U

Kunz, George (1998) the paradox of power and weakness. SUNY Press

Manen, Max van (1990) Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy. SUNY Press

Smith, Jonathan A. ed. (2003) Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods, Sage P.

Spiegelberg, Herbert. (1972) Phenomenology in Psychology and Psychiatry, Northwestern UP

Spiegelberg, H. (1971) Phenomenological Movement: A Historical Introduction, II vols. Martinus Nijhoff

Strasser, Stephan. (1985) Explanation and Understanding: Basic Ideas Concerning the Humanity of the Human Sciences, Duquesne UP

Yoshida, Akihiro (1992) On the Why-What Phenomenon. A Phenomenological Explication of the art of asking questions. *Human Studies*, 15. 35-46

Yoshida, Akihiro (2001) My Life in Psychology: Making a Place for Fiction in a World of Science, The Journal of Phenomenological Psychology, vol. 32. No. 2. 188-202

Yoshida, Akihiro (2006) On Tamamushi-iro Expression: A Phenomenological Explication of Tamamushi-iro-no (Intendedly Ambiguous) Expressive Acts. Essais de psychologie phenomenologique- existentielle, Cirp: Cercle interdisciplinaire de recherches phenomenologique, vol. 1. 300-335

文献表は、仮に、当日の「出会い」の機会が失われた場合にも、「手掛かり」を残そうと願い、作りました。

アートな学び ―アートを介して生の質を転回する―

企 画:山口(中上)悦子(大阪市立大学医学研究科)

茂呂雄二(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

企画·司会:伊藤崇(北海道大学大学院教育学研究院)

話題提供者:土佐信道(明和電機代表取締役社長)

宮崎清孝(早稲田大学人間科学学術院)

山口(中上)悦子(大阪市立大学医学研究科)

【企画趣旨】

本シンポジウムは、アーティストと心理学者にとって共通の言語を模索する試みとなるだろう。 そのために今回は、学び(learning)という現象を出発点とした。

言うまでもなく学びは心理学にとって伝統的な研究対象である。そこでの学びとは、具体的には、 人間の行動や知識、人格、そして社会的な関係性といった点での変容を指していた。そういう意味 であれば、アートもまた、独自の仕方で、常に学びを包摂していたと言っていい。

たとえば近世ヨーロッパには、精神と肉体に分断された人間の統一性を回復するための「美の技術」としてのアートという考え方があった。あるいは、前世紀初頭のヨーロッパ各地に起こったアヴァンギャルドはどうか。それらは言いかえれば、人格的な変容を目指したものであったし、突き詰めれば社会的秩序の変容をねらったものでもあっただろう。

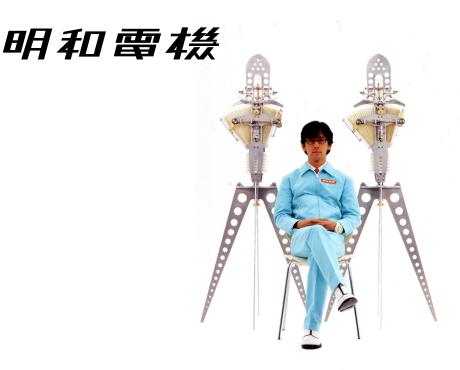
このような試みは、歴史的社会的文脈は異なるものの、同じねらいをもって現代にも引き継がれている。同じねらいとは、おおざっぱに言えば「対抗」を現実化することとなろう。アートによる対抗と言っても、何も物騒なことをするのではない。個々人の感性を前面に出し、「私にとって面白い」ものごとを享受することである。

対抗を現実化する実践に、ワークショップがある。一般にワークショップとは、人々が共通のテーマのもと、フラットな関係において参加し、なんらかのプロダクトを作る活動である。私たちはつい「面白い」の基準を他者あるいは社会の規範的な価値にゆだねてしまう。ワークショップは、外の社会のしがらみから切り離された空間として設定されている。したがってそこでは、個人が自らの感じるところに自身をゆだねるという体験が必然的に起こる。アーティストとは、そのような体験を日常的にするために訓練を受けた人々であろう。そしてワークショップとは、訓練を受けていない人々がそのような体験をするための方法なのであろう。

この辺りに、アートと心理学との共通の言語を模索する手がかりがありそうである。ただし、ここまでいくぶん素朴な説明に終始してしまったように思われる。やはりアート活動の現場で、実際に手を動かしながら頭を使う中でつむがれた言葉に耳を傾けたい。

本シンポジウムでは、本大会の開催される筑波大学にゆかりの深いアートユニット「明和電機」の土佐信道氏をお迎えし、アートと心理学のインターフェイスとしての学びについて考えていきたい。土佐氏はこれまでに数々のアート・ワークショップを企画・実施されてきた。たとえば、ガラクタをたたいて音を出す楽器をつくる「Knock!音楽ワークショップ」、ナンセンスなアイディアをアルゴリズム的に導き出して具体的な製品にするプロセスを楽しむ「ナンセンス・オモチャ研究所」などがある。そこでのご経験について、実際の例に基づきながら土佐氏にご発表いただく予定である。そこに、教育の場におけるアート・ワークショップについて長年ご研究されてきた宮崎清孝氏、そして医療の場にアート・ワークショップを仕掛けてこられた山口悦子氏に入っていただき、活発な議論を通して検討していきたい。

【登壇者紹介】



■明和電機(メイワデンキ、MAYWA DENKI)

土佐信道 (代表取締役社長)

1967年4月14日 兵庫県生まれ

1992年3月 筑波大学大学院芸術研究科修士課程修了

1993年5月 兄・正道とともに明和電機結成 代表取締役副社長就任

2001年4月 前社長・正道の定年退職にともない代表取締役社長就任、現在に至る。

2003年より、文化庁メディア芸術祭・アート部門の審査員をつとめる。(2005年まで)

■明和電機プロフィール

1993年に実兄・正道とアートユニット「明和電機」を結成。ユニット名は彼らの父親が過去に経営していた会社名からとったもの。

青い作業服を着用し作品を「製品」、ライブを「製品デモンストレーション」と呼ぶなど、日本の高度経済成長を支えた中小企業のスタイルで活動。魚をモチーフにしたナンセンスマシーン「魚器」シリーズ、オリジナル楽器「ツクバ」シリーズを制作し、その製品のすばらしさをアピールしている。プロモーション展開は既成の芸術の枠にとらわれることなく多岐にわたり、展覧会やライブパフォーマンスはもちろんのこと、CDやビデオの制作、本の執筆、作品をおもちゃや電気製品に落とし込んでの大量流通など、たえず新しい方法論を模索している。

2007 年は、岡山市デジタルミュージアムにおいて、個展「ナンセンス=マシーンズ展 2007」を 7月 13日~8月 19日の期間開催。1ヶ月で 3万 2千人を動員し、好評を博す。また、谷川俊太郎さんとの共作絵本の発売や、全国各地でのワークショップの開催など、多岐にわたる活動を展開中。また、笑えるロボットのコンテスト「バカロボ 2007」をプロデュースし、ルミネ the よしもとの舞台でイベントを開催した。2008年 1月には初の監督作品として、映画「バカロボ」が公開された。海外では、フランス、シンガポール、台湾、韓国、ワシントンでのコンサートを行う。2008年は、明和電機の活動のコンセプトを落とし込んだ、さまざまなワークショップの開催や、「バカロボ」の

書籍の制作なども行う。

海外では、6月にフランス公演を行い、タイ、シンガポール、イギリスなどでの公演も予定しており、ワールドワイドに活動している。

■展覧会歴・パフォーマンス

1994年 新製品発表会「今度の土日は明和デー」東京・大阪他計 4ヶ所にて

1996年 「ツクバ展」渋谷西武、四条河原町阪急他4ヵ所にて

1999年 「明和電機百貨展」新宿小田急、神戸大丸にて

2001年3月 パリ Galerie Du Jour agnes b.にて展覧会、ミニライブ

2001年5月 ロンドン「Selfridges」にて展覧会、ミニライブ

2002 年 8 月~10 月「ROMANCE*ENGINEERING 展」東京・名古屋にて

2003年10月~04年1月パリ「人とロボット展」にて、展覧会、ライブ

2004年7月~12月「ナンセンス=マシーンズ」展

広島市現代美術館、NTTインターコミュニケーション・センター

2005年7月 「パリ カルティエデテ フェスティバル」にてライブ

2005年10月~11月 オレゴン大学にて展覧会、ライブ

2006年6月 スイスのチューリッヒ、フリブールにてライブ

2006年7月~9月 「ナンセンス=マシーンズ展」 鹿児島県霧島アートの森

2006 年 9 月 香港 agnes b.'s LIBRARIE GALERIE にて展覧会

2006 年 10 月 香港にてライブ 「HONG KONG LIVE 2006 【MECHATRONICA】」

2007年2月 明和電機ライブ 2007「六本木メカトロニカ」 国立新美術館

2007年4月 フランスのニームにてライブ

2007年6月 シンガポールにてライブ

2007年7月~8月 「ナンセンス=マシーンズ展」 岡山市デジタルミュージアム

2007年10月~11月 台湾・Eslite Sinyi store 内ロビー、agnes b.店舗にて展覧会

2007年11月 韓国にてライブ

2008年2月 アメリカのワシントン DC にてライブ

■主なライブツアー歴

1995年 「祝・新商品発売記念デモ[日本公演]」全国 6ヵ所 8回公演

1998年 「第2回日本公演ドライブド・ライブ」全国6ヵ所8回公演

1999 年 「明和電機ライブ ホール in ラブ'99」東京、大阪 大ホール 5 会場

2000 年 明和電機ライブツアー2000「フォービューティフルヒューマンライブ」 東京、名古屋、 大阪 3 ヶ所 5 回公演

2002 年 おかげさまで 10 周年ライブツアー2002 「明和電機ジャンボリー」 東京、大阪、名古屋、 広島 4ヶ所公演

2004年 明和電機ライブ2004「メカトロニカ」東京、大阪、2ヵ所3回公演

2005 年 「Switched On Kappa 2005」東京、名古屋、大阪、福岡、台湾(5 箇所 6 回公演)

■主な受賞歴

1993 年 ソニー・ミュージックエンタテインメント第2回アート・アーティストオーディション大 賞受賞

1995~1997年 ウオノメ、魚コード、グラスカープ意匠登録認可

1996年 ゴムベース実用新案認可

1996年 魚骨型電源用延長コード「魚コード」がモノマガジン・スーパーグッズ・オブ・ザ・イヤー編集部特別賞受賞

2000 年 文化庁第3回メディア芸術祭 デジタルアート・インタラクティブ部門優秀賞受賞

明和電機公式HP:http://www.maywadenki.com

アートと教育はやはり違う、か? 宮崎清孝(早稲田大学人間科学学術院)

常識的には、アートと「教育(保育)」は対立的なものではないか。感覚でいうと一方は柔らかく、他方は堅い、といったように。さてアートを教育(保育)の場面で、特にアーティストのワークショップなどを研究している私にしてみると、実のところこの常識は誤りであり、両者の間には大きな類似点が見える。どちらも古い発想(自分)を否定していく。新しい問いを探し、ぶつけ合い、試していく。そして新しい自己を創り出す。だがそれもいっときのことで、すぐにまた探求が始まる。そんな過程だ。むろん、こう考える私にとって先の常識の問題点は明らかだ。学習を、何らかの知の蓄積の過程としてしかみていない。だがアート作品が蓄積ではなく苦闘の残骸であるのと同様に、学習もまた苦闘の跡なのだ。といいつつ、実は私自身、アーティストと関わり合う研究の中で、アートと教育はやはり大きく違うのではないか、という感覚が常にわき出てくるのを感じている。たとえばアートにとっての「作品」性ということの重さ、逆に教育(保育)にとっての「子ども」ということの重さ、に違いへの鍵があるような感を持つ。土佐氏のお話を伺う中で、そんな問題への手がかりに少しでも近づければ、と考えている。

再考『アートもクスリ』〜組織の集合性の質的転回〜

山口 (中上) 悦子 1)2) · 諏訪晃一 3)

- 1) 大阪市立大学医学研究科発達小児医学·病院講師
- 2) 大阪市立大学都市研究プラザ・特別研究員
- 3) 大阪市立大学都市研究プラザ・博士研究員

当院では、芸術家と患者の共同制作支援事業「アートプロジェクト」を推進している。当院にワークショップ(以下 WS)を基礎とする本格的な長期アートプログラムが導入されたのは 2003 年。ワークショップ・プランナーのゴウヤスノリ氏と美術家・飯田紀子氏プロデュースによる『アートもクスリ』である。このプログラムは 2 週間毎の WS と半年毎の院内美術展とで構成された 1 年間のプログラムであった。実施期間が長く、展示では広く病院施設を利用したため、院長以下、多彩な部署の職員が関与した最初のプログラムであった。さて、患者個々人が抱える疾病罹患と闘病生活という〈ネガティブな日常〉は、〈ポジティブな非日常〉ともいえる創作活動への主体的な参加を通じて、〈ポジティブな日常〉へと質的に転回を遂げる。一方で芸術の介入は、病院組織の集合性が質的転回を図る、契機の一つでもあった。芸術活動支援はそれまでの医療活動や病院経営とは異なる。業務遂行にあたってはセクショナリズムに固着した組織を横断的に再構築し、協働的にノウハウを創出する必要があった。結果、業務を通じて新しい人間関係が育まれ、職員は各々病院の新しい在りようについて語り始めた。芸術活動支援を媒介に芽生えた協働という資本は〈学び合う、病院改革〉を促し、「医療サービスの向上」、「療養環境改善」、「安全管理対策」へと繋がっている。『アート』は病院組織にとっても『クスリ』であった。

学びに再生する看護研究 ―実践の可視化と質的研究―

企画・司会: 櫻井利江 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 話題提供 : 杉万俊夫 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

西阪 仰(明治学院大学社会学部)

佐居由美(聖路加看護大学) 中山久子(聖路加看護大学)

櫻井利江 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

【企画主旨】

これまで看護研究は、対象の理解や介入方法の妥当性の検証に努めてきた。それは、そのまま「知識」として看護教育の中で活用されているが、ひとつ記述できていないまま取り残されているものがある。それは、実践の核とも言うべき「相互作用」である。インタラクションなしの看護実践は存在しない。頭の中で考えていることが看護実践を産みだすのではない。対象に接し、相手の応答によってアセスメントし、さらにそれを確かる「一手」を打つことの繰り返しである。しかしまた、相手もわれわれの「出方」によって応答を変化させているのである。看護研究は、これらの実践活動を可視化して、後進に、あるいは同僚に提示してきたであろうか。看護教育が「教える」ことのみに囚われ、真の意味で、自らが学び、習得していることを把捉してきているのだろうか。本セッションでは、すでに、これらの実践を可視化する研究の第一人者である状況論者の先生方とともに、看護界では研究ベースにのせにくい、けれども興味深い活動の実践報告をしてもらい、学びに再生される成果を提示できる「質的な看護研究」のあり方について議論していく。

「臨床看護実践能力の獲得プロセスに及ぼす基礎教育課程の影響」(櫻井利江)

基礎教育課程で身につけるべき能力とは何か。看護教育は職業教育からスタートしている歴史性からみても、現在、この問いかけは重要な意味を持つ。専門職教育への転換が図られてから久しいが、卒後に実践する際に、何をどのように咀嚼して、現場で、その能力を伸ばしているのか、等しく同じ実践など出来ないのはなぜか。「教えればできる」「教えなければできない」という言説がまかりとおる一方で、ケアリングの重要性が叫ばれているのはなぜなのか。あらためて、この問いを設定し、学生時代から始まる看護実践の中で、看護師として「一皮剥ける」ときは、どのような事象が起こっているのかを探索している研究の途上を提示する。

「学生主体による看護ボランティア」(佐居由美)

「105 (いちご) フレンド」、これは、聖路加看護大学の学生による病院での看護ボランティア団体の名称である。一昨年の10月に発足した当団体は、看護学生の「「看護学生だけど病棟ってどんなところか知らない。もっと知りたい」、「患者さんと直接ふれあいたい」という素朴で純粋な気持ちからスタートした。その気持ちに応えてくれた病棟の協力を得て、当初、十数人だったメンバーは、いまや30人を超えている。学生たちは、自ら病棟の看護スタッフと打ち合わせをし、自分たちがやりた

いこと、やらせていただけること、活動時間帯、連絡方法など、ボランティア活動に必要な様々な調整をし、団体を組織し運営している。その活動は認められ、他病棟からも活動の要請が来るまでになった。学生たちは、組織を二つに分け喜んでその要請に応じた。

病院でのボランティア活動を通して学生は、大学の机上で学んだことを客観的に捉え認識し、実際に患者にふれあうことで将来ナースになることに対するモチベーションをあげ、とても充実した経験を得ている。文字通り、ボランティア活動によって、彼らの「学びが再生」されているのである。当セッションでは、この看護学生による豊かな看護活動の実践の可視化を試み、看護における質的研究の意義を改めて問い直したと考えている。

「質的研究の言説空間」(杉万俊夫)

日本語では、すでに(定量的に 対する)定性的研究というカテゴ リーがあるにもかかわらず、質的 研究を標榜する理由はどこにあ るのか。筆者の見るところ、その 理由は、研究成果として産出され る言説の「主観性」と「ローカリ ティ(局所性)」への希求にある。 つまり、従来の「客観性とユニバ ーサリティ(普遍性)」一本の研 究スタイルに対する強い不満が 根底にある。ところで、従来から、 主観性とローカリティにこだわ

自然科学

	指示 述 表出 喚起	人称的 的 <	非人称	指示 述定
概念的言説				
事象的言説				

人間科学

	指示 述定 表出 喚起	人称的 的 <	 非人称	指示 述定
概念的言説				
事象的言説				

り続けてきた(と言うより、主観性とローカリティにこだわらなくては存立しえなかった)のがアクションリサーチである。筆者には、質的研究は、広義のアクションリサーチとしてしか存立しえないように思われる。

そもそも科学とは、対象とする現象に関する言説空間を豊かにする営みである。では、その言説空間は、いかなる構制になっているのだろうか。以下の図は、廣松「存在と意味」の判断論に登場する用語を借りて、言説空間の構制を示したものである。主観性とローカリティを重視する科学(人間科学)の言説は、言語の4機能のうち、指示・述定に加えて表出・喚起機能を有する言説(人称的な言説)と、歴史・文化的な制約を有する(と後になって判明する)当事者的には非人称的な言説から成る。

「問題を抱える看護学生の見極めと支援」(中山久子)

看護大学の健康管理室における日常は、看護師を目指して学習する過程で問題を抱えた学生に対する支援に忙殺されている。その問題は、若者であれば誰でも直面する可能性のある個人的事件から、看護師という職業に特有な環境がもたらす悩み、戸惑いに起因する心身の不調まで、実に様々である。持ち込まれる問題

は、看護師の教育現場が抱える問題を反映した極めて有用な情報源である。そこでメンタルケアの充実のために学生を評価しない専任保健師として、1990年4月より看護学生を支援している初代専任保健師である私の学生への関わりを可視化することによって、実践の共有が図られるのではないかと考えた。18年間、健康管理室としての場も血圧計や絆創膏、湿布薬などの道具としての媒介も同じでありながら、言葉で語られる、健診で引っかかる、自己申告でやってくる学生だけでない「気にかかる」学生に関する予測性が飛躍的に高くなる事は何からくるのかを学生との関わりの中から探っていく。

「問題提示のジレンマ: 定期健診における相互行為の一側面」(西阪仰)

この報告では、定期健診に訪れた妊婦の問題提示について、その組み立ておよび産出位置という二つの観点から考察したい、妊婦が病院や助産院を訪れるのは、たいてい定期健診のためだ。これは、いわゆる一次医療における患者の来院が、もっぱら問題を抱えているがゆえのものであるのと、根本的に異なる。つまり、妊婦の来院にとって、問題はその理由そのものではない。それでも、妊婦は様々な問題を抱えているにちがいない。この問題を、妊婦はどのように(医師なり助産師なりに)提示するのか。もちろん、医師や助産師は、なにか心配なことはないかと、必ず聞く。にもかかわらず、妊婦は、しばしば、そのような質問がないところで自らの問題を提示する。このような(自ら進んで行なう)問題提示は、いわば「防御的」と言うべき、非常に独特の組み立てを持つ。また、それは測定・検査開始の近傍という独特の位置で、しばしば産出される。そして、この(組み立てと位置に関する)二つの特徴が、その後の相互行為の展開に、特定の影響を持つように見える。とりわけ、以降の相互行為が、ある種の悪循環のなかに導かれることもあるように見える。実際の相互行為の分析をとおして、妊婦の問題提示が開始する発話の連鎖を、丹念に検討していきたい。

ライフとケアのデザイン

一新しい医療モデルと質的研究の可能性—

企画・司会: やまだようこ(京都大学大学院教育学研究科)

話題提供:サトウタツヤ(立命館大学文学部)

山崎浩司(東京大学大学院人文社会系研究科) 行岡哲男(東京医科大学医学部救急医学講座)

斎藤清二 (富山大学保健管理センター)

指定討論:下山晴彦(東京大学大学院教育学研究科)

【企画主旨】

超高齢化社会がやってくる現代において、今後の医療はどのようにあるべきかという問題は、誰に とっても切実なテーマである。自分自身の問題であれ、家族や近親者の問題であれ、広い意味での「病 い」や「ケア」と関わることは、誰にとっても避けることができないからである。

これからの社会では、「患者」の「疾患」を、「特定の場所(病院・施設など)」で、「特定の専門家 (医師・看護師など)」が「短期」で「治療」することをめざす、従来の医療モデルだけでは不十分に なるだろう。たとえば「病い」や「ケア」を抱えながら長い人生を生きていく長期ライフの医療モデル、医療専門家だけではなく多様な役割をもつ人々が日常生活のなかで支え合い連携しながら支援するモデルなどが必要になるだろう。医療を狭い意味の病院臨床や医療の専門家や患者の問題にとどめ ないで、人びとが相互支援しながら生活の質を高める未来社会をどのように築いていくかという広い 視野から、具体的なモデルを提案していくことが必要になるだろう。

本シンポジウムは、ライフ(いのち、人生、生活)とケアをむすびつけた新しい医療モデルをデザインしていこうとする試みの第一歩である。まずは、医学、看護学、心理学、社会学、社会福祉学など学際的な視点から、病いの当事者や予防者をむすび、従来の短期治療型の医療モデルを超えた生涯ライフモデルのデザインを、次の2つの観点から考えてみたい。

- 1) ライフ(生活者)の視点から、ケアや医療のサポートをデザインするには?
- 2) ケア (医療者) の視点から、ライフを生かす病院システムや医療教育をデザインするには?

「厚生心理学:文化心理学と医療現場心理学のクロスロード」(サトウタツヤ)

現在、医療の領域では、慢性疾患や根治不可能な疾病をもつ人たちのライフが関心を集めている。 医療はこれまで治療をゴールとしたデザインを基盤としてきたが、こうした疾病にはそぐわない。治療生活を基盤におきつつも、生活そのものをデザインすることが必要となるのである。私たちは、ALS(筋萎縮性側索硬化症)患者や筋ジストロフィーといった神経難病の方々に質的調査を行ってきた。 そこで悩んだのが名称である。私たちは臨床心理学をしているわけではない。医療現場の心理学だから医療心理学と言いたいところだが、現況ではそれもそぐわない。そこで厚生心理学という名称をた てることにして、方法論としてライフ・エスノグラフィを提唱する。出来合いの検査で測定するのではなく、ライフとケアの現場の記述をとおしてよりよいデザインを見通すのである。検査が三人称的視点から結果を弾き出すのに対して、二人称的な視点からライフとケアのデザインに肉薄して貢献するためのあり方についていくつかの例をもとに考えていきたい。

「ライフスタイルとしてのケアラー体験とサポートモデル」(山崎浩司)

昨今、日常生活の中で様々な人びとがケアに関わるようになってきた。いまだ医療福祉専門職によるケア提供は健在とはいえ、家族やコミュニティ成員といった非専門職主導による「身内」のケアも、核家族化やセルフヘルプ/ボランティア・グループ活動の拡大にともなって増えているように思われる。こうしたインフォーマル・ケアの担い手(ケアラー: carers)は、日常的なケア享受者とのかかわりを介して、ケアがライフスタイルの一部として深く根づいている。このケアラーの具体的な体験に着目することで、ケアが広範に組み込まれた生活の中で、彼らの認識や行動の質的な変化をみてゆくことができる。こうした研究の蓄積により、ライフスタイルとしてのケアをサポートする応用性の高いモデルが産み出されうる。ライフスタイルとしてのケアラー体験という視点は、インフォーマル・ケアにおけるケアラー体験をジェンダー役割や規範の観点から分析する、といった従来見られたアプローチの限界を超えてゆく可能性を秘めている。

「医療における量的研究と質的研究のあり様について」(行岡哲男)

自然科学では、仮説一実験一検証、というプロセスを経て仮説(命題)の実証が目指される。では、全ての仮説はこの基本枠組みで実証が可能であろうか? ①自分の直接的な体験により検証し得る事態は存在する。例えば、人の死の場合、「この人は死んでいる。」という自分自身に疑いよう無い体験が底板となり、自然科学の基本枠組みとする実証が可能である。しかし、例えば「薬剤 A は、この疾病 a の 70%の患者で有効である。」という命題は、①の場合とはことなり、間接的な推論により検証される仮説である。すなわち、多施設比較臨床試験の結果として間接的に検証され、エビデンスとして示され、これは医療現場で利用可能な資源の一つと見なされる。このように、エビデンスは②合理的で(専門家を含む)多くの人が納得する推論により支持される知見と言える。③さらに時間の経過の中で、多くの人々の経験や知見が重積し、共同的な確証として(仮説が)検証されることもある。例えば、太陽と地球の距離などが例としてあげることができる。そして、④「仮説―実験―検証」という枠組みでは、検証不可能な仮説も存在する。例えば、神は存在する、と言う命題がこの類型に属する。しかし、この検証不可能な仮説であっても、(限定、広範の別はともかく)人々が共通了解として社会で活きることはあり得る。

医学とは②、③のような検証方法により得られた知識を体系化したものであり、現代医療では知的 資源の一つとしてこれが活用される。現代医療は、この②、③のみでなく、①、④に類型化される事 柄も活用しつつ展開する、社会的な相互行為と見なすべきと思われる。医療をこのように理解するな らば、量的な研究手法と質的な研究手法は排他的ではなく補完的関係にあると思われる。

「アクション・リサーチとしての医療学教育:ナラティヴ・臨床の知・フロネーシス」 (斎藤清二)

医療/医学の教育という実践において、「その実践の中にある者が、その実践を対象として研究を行 う」とはどういうことなのか? このような問いは、医療における質的研究のあり方を考える上で重要 である。演者は、医療学教育における質的研究とは、「より良い医療の実践者を育てるための医療学教 育をより良いものにするための、医療学教育実践者による研究」であるという立場を選択したい。そ のような目的論的立場を明示化することによって、医療学教育の研究において、どのような方法論が 選択可能であるのか、それらの得失は何かということが明らかになるだろう。今回の発表では、「ナラ ティヴ」「アクション・リサーチ」「臨床の知」「フロネーシス」「知識創造」といったキーワードを参 照しながら、医療学教育における質的研究の意義を考察する。フロネーシスは、アリストテレスのニ コマコス倫理学において詳述されるいわゆる実践知であって、「ことわりを備えて真を失わない実践可 能の状態」と定義される。医療とは、一般的真理を希求するエピステーメーと、現実場面においてな にものかを作り出すテクネーのいずれにも直接還元されない「不確実性」と「複雑性」を兼ね備えた実践 であり、常に「今ここでの文脈に対応した善い判断と行為の選択を行う」ことが要求されるような実践 である。そこで、医療学教育の目標は、善い医療実践を行うことのできる「フロネティックな医療者」 を養成することであるという暫定的な仮説のもとに、教育法の開発と改善のための研究を行うことを 提案したい。そのためには、「偶有性」「関係性」「主観と客観の弁証法的同一性」「創発性」などのテー マを扱える方法論が必要となるが、ナラティヴ・アプローチ、アクション・リサーチ、知識創造研究 などが、少なくともその一部を提供するものと思われる。

テクノロジーと質的研究

企 画:山崎敬一(埼玉大学大学院文化科学研究科)

茂呂雄二(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

登 壇 者:葛岡英明(筑波大学大学院システム情報工学研究科)

久野義徳 (埼玉大学大学院理工学研究科)

綿貫啓一(埼玉大学大学院理工学研究科)

指定討論者:上野直樹(武蔵工業大学)

佐伯 胖(青山学院大学)

司 会:岩木 穣(筑波大学)

【企画主旨】

従来の質的研究の多くは、ケアや教育などのヒューマンサービス活動をテーマにして、いわゆる人文系の諸学問において議論されることがほとんどであった。しかし、質的方法論の適用範囲はそこに限定されるのではなく、より広い応用の可能性を持っている。とくにテクノロジーの開発と利用にも強みを発揮するといえる。本シンポジウムでは、いち早く質的な方法論に着目されて研究されてこられた3人の工学研究者をお招きして討論する。システム開発における理論的枠組みとしての質的方法の利用価値、質的方法と量的な指標の相補的利用、知識継承等インタラクションを通したシステムデザインにおける質的方法の位置付け等をめぐって議論することを通して、質的研究のさらなる拡張の可能性を探る。

「コミュニケーション支援技術と質的研究」(葛岡英明)

テクノロジーを利用して人々の協同作業を支援することを目的とした CSCW (Computer Supported Cooperative Work) と呼ばれる分野では、システム開発だけではなく、人々による「協同」を分析し、理解することが重視される。日本国内では CSCW は主に計算機科学や工学分野の研究者によって研究されているため、システム開発が主たる研究目的である。また、その評価には量的な評価方法が用いられることが多く、質的な分析はほとんど用いられない。これに対して欧米では、CSCWという分野が生まれた当初から社会学、心理学、認知科学分野の研究者がコミュニティに参加し、学際的な共同研究がおこなわれてきた。したがって、欧米における会議ではシステム開発よりもむしろ分析を主とした研究が多く、質的分析に基づいた研究も多く見られる。

我々は工学の研究者と、エスノメソドロジーを専門とする社会学者が共同することによって、システム開発と分析を両立させた研究をおこなっている。特に、日本国内において研究成果が受入れられることを意識して、量的分析と質的分析を併用した成果を報告してきた。質的な分析から得られた知見は研究を動機づける理論的な枠組みとなっていると同時に、実験結果を詳細に記述することによって、自分自身が人々の協調のメカニズムを理解したり、その結果を臨場感を持って他者に示したりする手段となっている。

本発表では、発表者の研究において、量的な分析と質的な分析をどのように併用してきたかを具体

「ヒューマンロボットインタラクションと質的研究」(久野義徳)

人間と共生し、人間を助けるロボットの実現への期待が高まっている。このような生活の場で一般の人が使うロボットについては、人間とのインタラクションが重要になってくる。そこで、HRI(Human-Robot Interaction)の研究が盛んになってきている。我々は、質的研究により人間同士がどのようにして円滑にインタラクションを行っているかを分析し、その結果に基づいてロボットを開発し、そして、そのロボットと人間のインタラクションを質的研究により分析してロボットの評価を行うというアプローチで研究を進めている。具体的には、ミュージアムでガイドがどのように非言語的行動を用いて説明をしているかを分析し、それをもとにガイドロボットを開発した。倉敷の大原美術館で実際に絵画をこのロボットに説明させたところ、人間のガイドに対するのと同様の反応が見られた。また、高齢者介護施設で高齢者から介護士への依頼がどのように始まるかを分析し、目を合わせる等の非言語的行動でコミュニケーションを開始できるロボットを開発した。このロボットについては実験室での実験では人間に親しみやすい感じを与えることが示された。このようにロボットの開発・評価に質的研究を利用している。しかし、質的研究による分析結果はロボット開発の指針を与えてくれるが、ロボットを実現する際には量的なデータが必要な場合も多い。また、評価にあたっても、性能を数値で示すことが求められることが多い。本発表では、実際のロボットを紹介するとともに、HRI 研究における質的な分析と量的な分析の統合的利用について考えていきたい。

「ものづくり基盤技術・技能伝承と質的研究」(綿貫啓一)

日本の製造業においては、生産拠点の海外移転による産業の空洞化、熟練技能者の大量退職による2007年問題、若者の製造業離れの社会現象により、技能伝承や人材育成が困難な状況となり、これまでものづくりを支えてきた基盤産業において「匠の技」の衰退が懸念されている。ものづくりにおける技能の修得には、視覚的な情報だけでなく、工具や製品の重量感や触り心地、音などの五感による体験、設計者や技能者間でのコミュニケーションも重要な要素である。そこで、ものづくり基盤産業における設計・製造知識の獲得過程や0JT(0n-the-Job Training:職場内訓練)による技能伝承過程をインタビュー、参与観察、会話分析などの質的研究をもとに、さらにものづくり技術固有の量的なデータを用いて、マルチメディア技術・バーチャルリアリティ技術による形式知・暗黙知の視覚・聴覚情報呈示、およびロボット技術・ハプティック技術による力触覚情報呈示を融合した没入型仮想共有環境システムを開発した。そのシステムを用いて、場の共有による設計・製造知識や技能の獲得のための新たなバーチャルトレーニングを提案し、人とロボットの協働による技能伝承の実践を行ってきている。鋳造現場における作業などをバーチャルトレーニングと0JTを融合した身体知の効果的な獲得、設計者一技能者間でのコミュニケーションの促進効果などについて述べる。さらに、高齢労働者や女性労働者にとっても安全・安心・快適な職場環境を確保するために、バーチャルトレーニングシステムを用いた評価・改善の試みについても述べる。

学習・発達論の最前線:

質的研究はいかに発達・学習を捉えるべきか

企画 • 司会: 香川秀太(筑波大学)

話題提供:鯨岡峻(中京大学)

能智正博 (東京大学)

森直久(札幌学院大学)

指定討論:三宅なほみ(中京大学)

無藤隆(白梅学園大学)

【企画趣旨】

学習・発達研究の新しい時代 現在,学習・発達研究は,新しい時代に突入し,その真っ只中にある。古くは、エビングハウスの記憶研究や行動主義の学習論から始まり,認知主義の教授学習研究を経,現在,ナラティブ論、状況的学習論、活動理論、関係論的発達論が大きな展開を見せている。また,質的方法の急速な発展とも並行して,従来の実験や質問紙による人工場面での調査から,学校の教室や医療現場など,生きたローカルな場での学習・発達研究が盛んに行われてきている。

しかし、新しい時代は、乗り越えるべき新たな問題も同時に抱えている。例えば第一に、新時代は、ローカリティを重視するゆえに、フィールドや領域が個別化、多様化し、その良さがある一方で、「異なる研究の結果を結ぶ議論」がいっそう重要になってきてもいる。そのためには、多様な場面に通低する、「学習・発達とは何か」のより適切な答えとなりうる「根源的な原理・理論」を、互いにフィールドやアプローチが違えども、意見交換し、共同で言い当てていく努力がより必要ではないだろうか。

第二は、「解釈とリアリティ」の間のジレンマである。多くの質的研究者は、質的な分析・結果とは 客観的現実の写しではなく「一つの現実構成であり解釈過程」だとする一方で、質的研究は「リアリ ティを追求する方法」だと言う。解釈といえども、勝手な解釈ではリアリティを損なうが、一歩間違 えれば、従来の客観主義に退行しかねない。ここでは、新しい形でのリアリティの表現方法が求めら れている。

第三は、「理念」と「方法手続きないし実際の研究結果」との間の乖離である。新しい時代は、新しい学習・発達の理念を抽出、提示してきた一方で、現実の方法論や調査研究では忠実に表現しきれていないという問題も抱えている(例えば、アイデンティティの多様性を主張しながら、実際には多様性を捉えきれていないなど)。ここでは、理念と実践の乖離をうめる具体的な提案が必要とされている。

本企画では、関係論的発達論、物語論、記憶研究、学習科学、発達心理学といった、フィールドや アプローチは異なるが、同じく学習・発達研究を、最前線で牽引してこられている代表的な先生方に お集まりいただいた。まさに最前線の議論の場となるべく、多様な声をぶつけあいながら、上記の点 を踏まえ、新しい時代の質的学習・発達研究の課題や、新しいビジョンについてご議論いただく。

「質的発達研究と研究者の位置」(鯨岡峻)

企画者は新時代の学習・発達研究が取り組むべき課題として3つの問題を提起している。だが、第1の「ローカリティ」の問題は、単にローカルな研究をどのように結び合わせるかという発想で越えられるものではない。外部にローカルに見える研究がいかにその「ローカリティ」を越えるグランド・セオリーを志向しているかが問題である。第2の「解釈とリアリティ」の問題も、「リアリティを忠実に再現しようとすれば客観主義に退行する」という発想自体が古めかしい感じがする。何が「リアリティ」なのかを巡る白熱した議論が必要なのではないか。第3の「理念と方法論との乖離」というのも、理念と方法を既存のものとするからこそ「乖離」が語られるわけで、新しい理念の追求と新しい方法論とは本来、内在的に結びついていなければならないはずである。鍵を握るのは研究者の「私」が理論と方法論にどう位置づけられるかである。このアングルから話題を提供してみたい。

「ナラティヴと学習・発達論」(能智正博)

"ナラティヴ (語り)"は質的研究のキーワードの1つだが、それは単に語られた内容であるばかりではなく、社会や文化・歴史のなかで形づくられる認識や行為の様式でもある。この視点はまず、対象者個人において観察される学習や発達の現象を解読し実践的な示唆を得るのに役立つ。しかしそればかりではなく、「学習」や「発達」という概念自体を、社会のなかで構築された一種のナラティヴとみなすこともできる。それらのナラティヴは研究対象の見え方を規定し、一種の言語行為として研究を方向づける。たとえば、「学習」を大人が用意した材料の習得と考えるのと、大人との相互作用を通じて共同体へ参入する過程ととらえるのとでは、そこで見えてくる「学習」のありようはずいぶん異なってくるだろう。今回の話題提供では、学習や発達の現場と切り結ぶ質的研究において、近年のナラティヴ的な視点がどのような意味をもっているのかを考えてみたい。

「想起研究二度目の転回と学習論のこれから」(森直久)

Ebbinghaus 以来の記憶研究は、個人内に貯蔵された痕跡を追求してきた。このような研究では一見個人が研究されているようで、実はされていない。個人は集団の中の誤差に過ぎない。さらに外界と接触する行為の重要性が認識されていない。また主体性がことごとく剥奪されている。80年代から始まる想起研究は、想起を対人・社会的状況での多様な過去語りとしてとらえなおし、体験の再現から個人を解放、行為と社会的環境を取り戻した。この社会学的転回はしかし、個人を社会の媒体とみなすきらいがあり、個別の体験者にはいまだ接近していないと思われる。想起の社会性を認めながら、個別の体験者を想起の中に見出す方法論を、筆者らはこの 10年来探求してきた。名義的個人→社会的個人→社会的かつ主体的個人という個人観の変遷は、同様に学習研究にも該当するのではないか。当日は我々の想起研究を紹介しながら、学習研究への示唆が提示できればと思う。

ナラティブ・アプローチの向こう側:質的研究の豊饒化に向けて

企画·司会: 永田素彦(京都大学大学院人間·環境学研究科)

話題提供者: 上野直樹(武蔵工業大学)

辻本昌弘(東北大学大学院文学研究科)

作道信介(弘前大学人文学部)

指定討論者: やまだようこ(京都大学大学院教育学研究科)

【企画主旨】

ナラティブ・ターンという言葉が端的に示すように、ナラティブ・アプローチは質的心理学の中核をなすにいたっている。ナラティブを収集し分析するためのさまざまな方法が整備され、ナラティブの理論もますます精緻になりつつある。さらに、非言語的ナラティブ、映像ナラティブのように、ナラティブの概念を拡張し、ナラティブ・アプローチの守備範囲を拡大する動きもある。このような中で、ナラティブを冠した研究の中には、ナラティブそれ自体を対象化し、その特徴を定型的な方法論で解釈しようとする研究も少なからず見受けられる。

しかしナラティブは実践であり、制度、文化、慣習、テクノロジー、原身体的コミュニケーション・・・ に埋め込まれてはじめて存立する。このシンポジウムでは、3名の話題提供者に、それぞれの豊富なフィールド研究にもとづいて、従来のナラティブ・アプローチではあまり光を当てられてこなかったこうした側面を積極的に論じていただく。そして、ナラティブ・アプローチの第一人者である指定討論者との対話を通じて、質的研究の豊饒化への方向性を考えていきたい。

「語りにおけるテクノロジーのデザイン」(上野直樹)

語ることは、それ自体としてなされるのではなく、常に、マテリアルなリソースに依拠しながら行われている。このことが典型的に現れているのは、ネット上における語りであろう。当然のことながら、こうしたものは、ICT(Information and Communication Technologies)抜きには存在しえないものである。しかも、語りの場の形成のあり方は、テクノロジーの設計に応じて、様々である。さらに、例えば、ウェブ上のライフログや SNS システムは、ネット上に閉じたものではなく、ある場にいて、あるコミュニティの人々の気配やざわめきを感じさせるものである。あるいは、ブログやウェブ上の地図システムは、誰がどこにいて、何をやっているか、あるいは、今現在、ある場所や街がどのような状態かを可視化している。こうした様々なウェブシステムは、人々が日常的な協同的な活動やコミュニケーションを行う際のコンテクストになるし、逆に、日常の協同的な活動やコミュニケーションがコンテスクトになって、ウェブで様々なことが表現されている。

当日の発表では、現代 GP プロジェクト、「ICT によるニュータウンの街作拠点構築-web2.0 技術の活用による地域情報の集約と地域活動の促進」の実践と web システムのデザインの事例をベースにして、ある実践における語りの場のデザインとしての ICT のデザインのあり方を議論する。

「ナラティブと生活実践」(辻本昌弘)

ナラティブ・アプローチは、さまざまな分野で活用され、ひろく深い射程をもつ。多様なナラティブ・アプローチをふまえた総合的な議論はできないので、ここでは話題提供者の社会調査を題材に、ふたつの

点を論じることにしたい。

第一に、地域社会の人々がいとなむ相互協力に関する調査から、語られることと生活実践との乖離について考える。インタビューなどで語られる内容と現実の日常生活が異なることは、従来からくり返し指摘されてきた。語られることと生活実践の乖離をうみだす研究者の技法や理論の問題、このような乖離をどう解決すべきか考察する。第二に、地域社会に貢献しながら調査を行おうとした試みから、当事者と研究者の対話について考える。地域社会の歴史や生活の解釈をめぐって当事者と研究者のあいだに生じる対立と対話について考察する。

以上から、当事者が明確に気づいていないことを研究者が主張することの意義を指摘し、それをもとに ナラティブ・アプローチの重要性を議論したい。

「出来事に巻き込まれる楽しさについて―語り理解をおぎなう身体」(作道信介)

ぼくはアフリカの牧畜民や地元津軽を中心に調査を続けている。そこで痛感するのは、あたりまえのことだけど、「いま、ここで、いっしょにいること」の意義だ。現在をともにして現場にまきこまれていく。いきいきとしたスリリングな現在がぼくを魅了する。フィールドワークでは現場にあわせてさまざまな方法を用いる。もちろん、言葉は相手の経験を理解するための重要な方法だ。それは自分が緑葉からの落下をためらう滴(しずく)のような「いま、ここに」いることを忘れさせてしまわないか。「出来事の現場に身をおく」ことでわかること。その重要性を考えたい。また、出来事に巻き込まれるということは出来事がその後 どうなったかを見届けることでもある。それにも限度はあるけれど、何が起こってどうなったのか。リアルタイムで知ることができる。質的心理学の範囲は広いから一概に言うことはできない。「巻き込まれる」ことでわかることの意義はどこにあるのか。それを事例から考えたい。題材は「牧畜民トゥルカナの占い場面でおこった暴力事件」「占いが真実になるとき」(あるいは)「津軽のカミサマによる山上のホトケオロシ」をとりあげる予定です。いずれにせよビデオ映像をおみせします。

映像データの質的研究の技法と実践 一身振りの分析を例に

企 画:日本質的心理学会研究交流委員会

企画·司会: 荒川 歩(名古屋大学大学院法学研究科) 話題提供者: 細馬宏通(滋賀県立大学人間文化学部)

指定討論者:古山宣洋(国立情報学研究所)

砂上史子(千葉大学教育学部)

【企画主旨】

小型のハードディスクカメラの普及や、大量の映像データの処理に耐えうるコンピュータの普及により、 ビデオデータの収集は、簡便になり、いつか分析しようと思いながら、データをもっている研究者も多い と思われる。しかし、実際に質的心理学研究に掲載されている論文の多くは、語りやフィールドノートを 元にしたものが中心であり、行為を詳細に分析した研究の数は決して多くないと思われる。

その理由には、技術的な問題と妥当性の問題の2種の問題があると思われる。第1の技術的な問題とは、 テキストによる情報の要約と参照が容易な言語データに比して、行為をはじめとした非言語は、情報の縮 約化が困難であるという問題である。第2の妥当性の問題とは、ビデオを分析することで、何が見えるの か、それを現場で起きていることとどのように関連づけ、そして意味づけるのか、というリアリティに関 連する問題である。

本企画では、第1に、荒川が、映像データの使用を巡る諸問題を整理し、映像を分析するためのソフトウェアをいくつか紹介する。第2に、QuickTime ムービーを用いた映像の分析ツールを開発し、会話分析や身振りの研究に生かしてきた細馬氏が自らのデータをもとに、分析方法を紹介する。第3に、古山氏が、身振りや行為の分析の立場から、前述の分析の射程や可能性を議論し、砂上氏が質的研究・フィールドワークの立場から、映像の分析が実践との切り結ぶ射程と可能性を議論する。本企画が、皆さんの撮りためたビデオからあらたな発見を得るきっかけになって、質的研究の可能性が広がれば幸いである。

「マルチモーダルな時間構造を捉えるための簡単な方法」(細馬宏通)

身体動作研究のおもしろさは、何よりも、複数の時系列の比較にある、と言っていいだろう。参与者 A のジェスチャーと参与者 B のジェスチャーのタイミングを 比較する。あるいは、参与者 A のジェスチャーと発語のタイミングを比較する。これらの微細な前後関係を観察していくことによって、なぜ行動 X が行動 Y の前 にくるのか、だとしたら行動 X はどのような予測を未来に投げかけ、どのように行動 Y を生みだすことに関わっているのかが明らかになる。このような分析を行 うには、複数の映像どうしのタイミング比較、そして、音声と映像間でのタイミング比較を行うツールが役に立つ。もっとも簡便な方法は、各行動の開始時刻・終了時刻・アノテーションの三セットを一つのデータとして記述し、この記述と音声・映像を結びつける環境を整えることだろう。今回は、Macintosh 上で QuickTime ムービーを制御するツールを用いながら、実際に身体動作を分析する過程を紹介する。

分析からデザインへ

― 学習科学に質的研究をどう生かすか ―

話題提供者:白水 始(中京大学情報理工学部)

質的データを不断に扱う学習科学では、量的研究と質的研究間の対立が議論になることは少なく、むしろ両者をどう組み合わせて社会的に意義のある解釈を導くかが焦点になりやすい(三宅, 2004)。学習科学の代表的学術雑誌 *The Journal of the Learning Sciences* でも、質的データを扱う方法論の論文ではタイトルに「実用的 practical」という語が含まれることが多く(Chi, 1997; Hall, 2001)、質的分析をいかに役に立つ手段とするかが関心の対象であることがわかる。それでは学習科学は何のために質的分析を役立てたいのか? 一つの答えがデザイン実験である。学習科学では、新しくデザインした学習環境が従来のバージョンに比べ、どこがどのようにどの程度良いのかをつねに確認し続けていると言える。この「分析からデザインへ」というサイクルに質的分析は必須の役割を担う。そこで本チュートリアルではさまざまな知恵を集めて、その具体的な活用法を検討したい。

最近の学習科学的支援の特徴は、協調学習をほぼ常態として用いることと支援の長期化の二点にあろう。 それにより、データがますます大量化かつ長期化してゆく問題にほぼすべての学習科学者は直面している。 具体的には、以下のような問題が列挙できる。

- ・ 日々の授業実践の質を向上させる短期的な「分析/デザイン」サイクルと、特定の実践の学習プロセスを取り出し時間をかけて分析し学習理論を作る長期的なサイクルの両輪をいかにうまく回すか
- ・ 授業や単元・学期直後の質的・直感的な判断をどう行って後の分析用のインデックスをつけておくか
- ・ 大量データから理論的に意味のある比較を行うデータセットをどう見出すか
- ・ 大量データから自身の理論に都合のよい証拠ばかりを集める "Cherry Picking" に堕さず、反証データも悉皆で分析するための「サンプリング」をどの時点でどう行うか
- ・ 比較対象とした実践が置かれた文脈や背景要因をどの程度広く考慮するか
- ・ 一定の質的なパタンが学習プロセスに見えてきた際、そのコーディングや数量化に移るか、それとも パタンをより強化する実践を行って新たなデータを得てから詳細な分析に入るかの判断をどう行うか これらの問題は、本質的には、日々自らの質的な学習モデルに基づいて実践を行っている学習研究者が、 どの時点で有限な研究資源を投入して、厳密なデータ分析を行い、量的な結果も加味して自らのモデルを 更改するか、という問題である。モデルをうまく改善できれば、長期にわたるインパクトは極めて大きな ものになる。当日は、教師が「協調学習のモデル」を作り変えることで長期的に見て大きな学習の様相の 変化につながった事例など、分析からデザインへのサイクルを具体的に検討する。
- Chi, M.T.H. (1997). Quantifying qualitative analyses of verbal data: A practical guide. *The Journal of the Learning Sciences*, 6, 271-315.
- Hall, R. (2001). Schedules of practical work for the analysis of case studies of learning and development. *The Journal of the Learning Sciences*, 10, 203-222.
- 三宅なほみ (2004),「質的データを柔軟に分析する(能智正博「質的データの分析」コメント)」,日本児 童研究所(編),『児童心理学の進歩 第 43 巻』,金子書房,294-298.

質的研究の"質"を問い直す

好井裕明 (筑波大学)

近年、社会学、心理学、教育学、社会福祉、看護、医療の領域において、質的研究への要請は非常に高まってきています。なぜ質的研究が必要なのでしょうか。おそらくは様々な理由が考えられるでしょう。現代社会に固有(と感じられる)様々な問題現象が生起し、従来の仮説検証型の実証主義的な数量的なアプローチでは、それらを的確に把握し、さらに対応などを考える資料を得るには十分でないという認識があるでしょう。また、これまで実証主義的な前提に、ある意味で守られていた研究者、調査者としての居場所が、けっして安定したものではないことがわかり、調べるという営み自体が客観主義的な装いを保っているとしても、それは基本において相互行為的でありリフレクシヴなものであるという認識もあるでしょう。さらに多様な現実を生きている人々、社会問題や抑圧された状況を生きている人々は、彼ら自身の「社会学的」な実践を生きているのであり、研究者は彼らの現実を一般的普遍的な言葉を用い因果論的に説明すること目的としながらも、まずはそうした「人々の社会学」といかに出会うことができるのかを模索すべきではないか、という認識もあるでしょう。他にもいろいろな理由があげられると思います。

ただ、こうした理由の背後には、一定のある問題認識があると思っています。それは端的に言えば、自らの存在を含めての「他者」の不透明性であり、「他者」認識をめぐる自明性の流動化なのです。そのために研究する者にとって、対象となる人々や現実を理解しようとするときに、なかば自明なものとして用いてしまっている他者認識、問題認識がいかなるものであり、はたしてそれが適切で妥当なものであるのかを、調べるという営みのなかで同時に問い直していくことがとても重要な部分となるのです。そして対象となる人々そのものや彼らが生きている現実にできるかぎり近づき、あるテーマのもとで調査するという営みのなかで、というか並行しながら、調査する当事者が、自らの基本的な人間認識やテーマとなっている問題をめぐる基本的な考えを反芻し、「人々の社会学」と出会うなかで、自らの認識それ自体も変容させていこうとするのです。いわば調査する者にとって、どこにも安全を確保できるような居場所などなく、彼/彼女は、常にその調査自体が変容していく危険性(可能性ともいえますが)と対峙し、自分自身をも様々な意味で変容させ、"鍛え上げて"いかざるをえないのだということなのです。

最近、質的研究の「マニュアル化」が進んでいるようです。たとえばグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)では、自らが扱う領域や質的データのありよう、データから立ち上げる理論の意味などをより鮮明にして「実践的質的研究法」をめざしているようです。もちろん、質的データをどのように限定し、そのうえでどのように扱えば分析が可能になるのかについて、一定の「マニュアル」は必要かもしれません。また一言で「質的研究」と括られている多様なアプローチを、同じように論じるのは無理があるでしょう。GTAに関しては、いわば茶道やお花の流派のように「マニュアル」を確定し、それを伝道していく意味は十分にあるでしょう。ただ、そうした「方法的な手続き」がより洗練化され、それを学習することから、ある流派の「質的」データ分析が可能になることが、優れた質的研究を実践していく道であるとだけ錯覚してしまうとすれば、おそらくは「質的研究」は確実におもしろくなくなってしまうでしょう。

なぜ、私たちが「質的研究」を渇望するのでしょうか。その根底に流れているものをいま一度考えてみたいと思っています。それは「方法的手続き」の洗練などではなく、より素朴でよりバーバルな「他者」への関心であり、「他者」を理解したいとする根源的な欲望ではないでしょうか。

質的研究の根源にある欲望とは何でしょうか。当日は、最近たてつづけに刊行されている質的調査研究のテキストに何が語られているのかを検討するとともに、この問いをめぐりながら私自身のこれまでの調査での経験などをふまえながら自由に語ってみたいと思っています。

イアン・パーカーの「ラディカル質的心理学」 ~変化を生み出すアクションリサーチの理論と方法

企画・司会:ハッ塚一郎(熊本大学) 話題提供者:ハッ塚一郎(熊本大学)

永田素彦(京都大学)

東村知子(奈良女子大学)

指定討論者:矢守克也(京都大学)

【企画主旨】

本シンポジウムでは、イアン・パーカーの主著『ラディカル質的心理学~アクションリサーチ入門』(ナカニシヤ出版)に即して、理論に裏付けられた実践的な質的研究の方法を具体的に紹介し、フィールドに変化を呼ぶアクションリサーチの可能性を展望する。

イアン・パーカーは、自らも治療的実践に従事する精神分析家であり、質的心理学のムーブメントを巻き起こす発端となった、言説心理学の研究者でもある。そして何より、現代心理学の本質を怜悧に分析し、建設的なオルタナティブを絶えず提起してきた、批判的心理学の第一人者である。

パーカーの観点からすれば、心理学における研究の営みを理論的に考察することなく個別の方法や技術を云々してもまったく意味がない。それどころか、考えることを欠いたまま機械的に活用される「質的方法」は、同書で繰り返し批判されるように、人々に危害を及ぼす有害な存在ですらある。

研究とは何をすることなのか。研究者はどのようにして研究者として作り上げられ、研究の対象との間にいかなる関係を築いていくのか。これらの問題を真面目に反省するなら、心理学は質的心理学にしかなりようがないし、その目的は必ずアクションリサーチへと帰結する。そして、理論的考察はそのまま具体的な方法を導き出す。フィールドのどこに着目し何を書けばよいのか。インタビューではどんな問いを発すればよいのか。ナラティヴを分析する際の糸口はどこにあるか。福祉施設のエスノグラフィ、学校におけるグループインタビューなどの豊富な事例を通して、パーカーは調査と分析のための具体的なカテゴリーや概念、発問や一挙手一投足を、理論の帰結として提示する。

シンポジウムでは、パーカーの議論から、「エスノグラフィ」「インタビュー」「ナラティヴ」の各方法について、理論に基づく方法と、その具体的な適用事例を報告する。あわせて、障害者の親と支援者に対するグループインタビューの事例をもとに、研究者とインフォーマントの間で思いもかけぬ対話が展開し新たな実践が切り開かれる局面について検討する。さらに、ラディカルな質的心理学の可能性とそのための方法を討論する。フロアより積極的なご質問と対話を喚起いただければ幸いである。

ラディカルであるとはどういうことか――エスノグラフィに即して(八ッ塚一郎)

パーカーの挙げる質的心理学の理論的リソースは「フェミニズム」「フーコー」「マルクス主義」「精神分析」である。これらはいずれも、研究者という存在が、その置かれた立場や背負ってきた歴史的背景、言説の編み目に深く規定されてはじめて成立していることを教える。そして研究とは、同様のことどもを背負って形を取った研究対象者という人々との遭遇のプロセスにほかならない。それゆえ研究活動では人々の間に必ず「矛盾」や「了解不能点」が発生するし、これらの矛盾こそが研究を導いていく。人々がどのような背景や経緯、権力関係や政

治的力学のもと、そのアイデンティティや心的活動を構成するに至ったのかを分析し、その理解と刷新を絶え間なく進める営み=アクションリサーチが、質的心理学である。エスノグラフィの場合はコミュニティの創生と変質に着目する。まず(1)当該のコミュニティが対外的に表明している自己像を聴取・記録する。続いて(2)コミュニティ内の相容れないサブグループに着目し、そこに内在する矛盾をコミュニティ総体がいかに隠蔽しているかを分析する。その具体的な方法、記録のつけかたや項目、「葛藤のポイント」「幻想空間」などの分析概念について、事例をもとに詳述する。

インタビューとナラティヴの先鋭化のために(永田素彦)

ラディカルなインタビュー、ナラティヴ・アプローチとはどのようなものか。イアン・パーカーによれば、インタビュー、ナラティヴ・アプローチの先鋭化は、アクションリサーチにつながる。まず、インタビューについて。インタビューは、インタビュアーがインタビュイーから一貫した発言を引き出す手法ではなく、インタビュアー(研究者)とインタビュイー(共同研究者)とがぶつかりあう「対話」である。インタビュアーとインタビュイーは、あらかじめ既成の(相異なる)権力作用に織り込まれている。したがって、インタビューは、両者の関心事の矛盾を解き明かし、両者が織り込まれている権力作用を相対化し、研究者が決めた当初の「目的」には収まらない何かを共同で創り出す場となる可能性をもつ。次に、ナラティヴについて。(自己についての)ナラティヴは、語り手の既存のアイデンティティの表出ではなく、自己を演じる「遂行」である。どのようなアイデンティティの物語が遂行されるかは、文化における権力作用が反映している。ナラティヴ・アプローチは、語り手と聞き手が協力してナラティヴを分析することを通じて、アイデンティティという遂行を変容させる可能性をもつ。本報告では、イアン・パーカーの主張に依拠しつつ、インタビューとナラティヴ・アプローチを先鋭化するにはどうすればよいかを論じたい。

共同研究としてのインタビューー "その後"に焦点をあてて(東村知子)

パーカーの質的心理学における「ラディカルさ」、すなわち従来の心理学との違いは、研究に関与した人々と研究者との間で展開する相互作用をどうとらえるか、にあるように思われる。確かに、参与観察・フィールドワーク・インタビューなどのいわゆる「質的方法」において、研究者が人々に与える影響を無視できないということは、これまでにも指摘されてきた。ただし、そこでいう相互作用は多くの場合、あくまで良好な協力関係として描かれるにとどまり、研究のプロセスで生じる齟齬や葛藤についても、フィールドでの体験談として研究の枠外で語られてきた。

一方、パーカーのいう相互作用、すなわち研究者と人々との「対話」は、予想もしなかったもの、葛藤や対立さえ生み出しうるものである。たとえば、インタビューは、異なる関心事をもつ二者(インタビュイーとインタビュアー)がぶつかりあう場であり、両者の矛盾を解き明かすプロセスとそこから何が生み出されるかが重視される。インタビューをこのように「カーニバル化」するためのヒントをパーカーはいくつか挙げているが、インタビューの後、とくに結果を協力者に対して「フィードバック」する過程にも、その手がかりがあるのではないかと筆者は考えている。今回の話題提供では、筆者が行ったインタビュー研究を例として、この点について論じてみたい。

文献

イアン・パーカー『ラディカル質的心理学~アクションリサーチ入門』(2008、ナカニシヤ出版)

教育実践場面の分析におけるバフチン理論の可能性 —具体的なデータ分析をもとに—

企画・司会:田島充士(高知工科大学共通教育教室)

話題提供者:西口光一(大阪大学留学生センター/言語文化研究科)

鈴木栄幸 (茨城大学人文学部)

田島充士(高知工科大学共通教育教室)

指定討論者:茂呂雄二(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

朴 東燮(釜山大学大学院教育学科)

【企画主旨】

昨今,バフチン理論を視点に据え、教育実践場面の分析を行う研究が多くみられるようになった。例えば、今年発刊された学会誌「質的心理学研究」第7号の「特集:バフチンの対話理論と質的研究」に掲載された論文においても、バフチンが提案した諸概念によって、様々な教育場面における対話が分析され、新たな知見が提案されている。本理論は、もはや抽象的なメタ分析の水準に止まらず、教育現場における事象の具体的な分析を行う上でも有用な枠組みとしての地位を確立したかのように思われる。

一方で、このバフチン理論を活用しようとする研究者の多くが、その分析において困難さをおぼえることもまた、事実だろう。その要因として、本理論で展開される諸概念の多くに、未だ多様な解釈の余地が残され、それらの意味について研究者間の統一的見解が見いだされていないという実態をあげることができるかもしれない。しかしバフチンの論に従えば、概念の「統一的見解」なるものは存在し得ないのだともいえる。そもそもバフチンは、ことばの意味とは、対話を行う話者間の交渉の中で相互に立ち現れるもの、と論じている。このような論を展開する彼の諸概念に関し、研究者が何らかの見解を見出すためには、それぞれの研究者自身の観点との対話が必要不可欠になると思われるのである。

本シンポジウムでは、実際にバフチン理論を活用して、教育実践場面の分析に取り組む研究者が、それぞれの 立場から本理論の諸概念について、具体的なデータ分析に沿って論じる。これらの発表では、教育現場の諸事象 と理論との間で対話を重ねることを通して紡ぎ出された、おのおのの挑戦的な見解が展開されることで、様々な バフチン論が立ち現れてくるだろう。これらの見解と対峙することで、本シンポジウム参加者が今後、自らの分 析枠組みとしてのバフチン論を見出すための対話を進めていくきっかけになればと願う。

「接触場面における第二言語話者の経験」(西口光一)

日本語教育において接触場面という概念が提示され(ネウストプニー,1981),その概念の下にさまざまな研究が行われている(尾崎,1981;宮崎・マリオット,2003など)。しかしいずれの研究も実行された相互行為の特徴を記述したものであり,接触場面相互行為実践の只中で第二言語話者がどのような経験をしているか,また接触場面で「ことば行為の困難」に直面している第二言語話者を前にして対話者である対象言語話者がどのような経験をし,どのような行為をしているかなどについて心理言語学的にアプローチした研究はない。

主観的な心理あるいは内的心理についてバフチンは次のように論じている。「**内的心理の現実とは**, **まさし〈記号の現実です**。記号という実体をのぞいては、心理はありません。……主観的心理は、その存在の場を、いわば、生体と外部世界とのはざまのごとき場所、この2つの現実領域の境界線上にもつものです。その境界線上で、生

体と外部世界とが出会うわけです。……心的経験なるものは、生体と外部世界との接触の、記号による表現にほかなりません。従って、内的心理をものとして〔自然科学的な方法によって〕分析することはできないことです。それは、ただ、〔記号論において〕記号として解読し解釈しうるだけです。(『マルクス主義と言語哲学』、p.53-p.54)」本発表では内的心理をこのように捉えて、いくつかの場面について、接触場面相互行為実践における第二言語話者の複言語的な経験の様態に迫る試みを紹介したい。

「多声的対話過程としてのプレゼンテーション」(鈴木栄幸)

バフチン, ワーチの対話理論とラトゥールらのアクターネットワーク理論の視点から, 大学生や大学院生によるプレゼンテーション準備場面の観察をおこなった。その結果, 以下のことが明らかになった。第一に, プレゼンテーションの構成過程において, 聴き手との仮想対話がなされていたこと, そして, その仮想対話は対話のシミュレーションとでも呼ぶべき, 動的で柔軟な対話の組み替え作業をとおして構成・再構成されていたこと。第二に, その対話のシミュレーションは, 関連する人々の社会的関係の把握と不可分な形でなされていたこと。第三に, その対話の組み替えは, アクターネットワーク理論が指摘するような社会的, 政治的調整をとおして関係する人々の社会的関係を繋ぎ替えることでなされていたこと, である。

本発表においては、分析の詳細について論じるとともに、分析から得た知見に基づいて提案したプレゼンテーション教育手法「マンガ表現法」の概要とその効果検証の結果についても述べる。

「理解とは何かーバフチン理論の解題ー」(田島充士)

ことばの「理解」とは、定義困難な現象である。ある社会の中で成立したかのように見える「理解」も、その 社会から一歩外に出ると成立しなくなる「分かったつもり」と呼ばれる現象が生じるからである。本発表では発 表者がこれまでに出会った、「分かったつもり」や「理解」に関わる様々な事例・データを紹介する。そして、 これらの多様な現象に対して発表者が行ってきた考察の履歴を示し、「理解」という現象を統合的に説明できる 分析枠組みとしてバフチン理論の諸概念の解釈を行う。

具体的には「社会的言語」「権威的なことば・内的説得力のあることば」「専有」などの概念を使用して、対話としての理解というバフチンの主張を、発表者の視点から検討する。その上で、対話の彼岸としてバフチンが設定した「カーニバル」概念の意味について考察し、その教育実践分析への応用可能性について示唆を行う。

若手フィールド情報学者. 質的研究への挑戦

企 画 辻 高明(京都大学大学院情報学研究科)

話題提供者 辻 高明(京都大学大学院情報学研究科)

高崎俊之(京都大学大学院情報学研究科)

水町衣里(京都大学大学院情報学研究科)

本吉達郎(京都大学大学院情報学研究科)

指定討論者 やまだようこ (京都大学大学院教育学研究科)

【企画主旨】

元来社会科学の領域で生まれ発展してきた質的研究だが、近年は、工学、情報学など理工系の分野でもそのニーズが高まっている。とりわけ、社会における"フィールド"との協働を通した情報システムの開発研究が求められている情報学分野ではそのニーズは極めて高い。しかし、工学的方法論を中心的な研究パラダイムに持つ情報学分野において、質的研究を確かな方法論として確立させるには課題も少なくない。

本シンポジウムは、京都大学大学院情報学研究科のグローバル COE プログラムにおける「フィールド情報学コア」に所属する若手研究者が、現在推進中のプロジェクトに基づきながら、上記の点について話題提供をする. 具体的には、「利用者参加のもの作り」、「インクルーシブデザイン」、「異文化コラボレーション」などのプロジェクトにおける実践研究の経過報告を通して、フィールド情報学の方法論としての質的研究の具体的な姿を紹介する. また、質的研究について学びたい情報学分野の大学院生に、それをどのように教えたらよいのかについても議論する.

「フィールド情報学における質的研究」(辻 高明)

フィールド情報学とは、フィールドで生起する現象を情報学の立場から明らかにするため様々な分野の方法論の融合を目指す新しい学問領域である。情報学は伝統的に工学的方法論を背景に持ってきたが、それがフィールドを研究対象とするようになって、フィールド研究の蓄積が豊富な社会科学分野の方法論が必要になった。質的研究法もその典型的な方法論のひとつである。

フィールド情報学は、フィールドの面でも方法論の面でも、工学分野と社会科学分野が交錯する学際的領域となることが見込まれる。しかし、課題がないわけではない。昨今、情報技術が社会において様々なフィールドを矢継ぎ早に創出しているが、そうした新しいフィールドに質的研究を適用する場合には、様々な方法論上の工夫が必要である。また、質的研究のプロセスを情報技術を用いて支援することも研究トピックのひとつといえるが、工学的方法論では、大量のデータを取得、蓄積し、それを効率的に分析することが重視され、教育学や心理学が大切にしている、意味や価値の解釈などに必ずしも重きが置かれていない。すなわち、学際的領域の方法論として質的研究は、今後、分野間の相互検証を通して拡張的に統合・発展させられることが必要である。

ここでは、そうした相互検証が可能な研究コミュニティ作りを念頭に置き、「フィールド情報学の方法論としての質的研究」について言及したい.

「ICT を活用した異文化間交流活動における質的研究へのニーズ ーシステム開発者の立場から」(高崎俊之)

NPO 法人パンゲアでは、9歳から 15歳までの児童・子どもが地域の児童館や学校などの拠点に集まり、それら拠点間を情報技術によって繋げることで、オンラインの遊びや創作を行う活動を実施している。そこでは、相手の国や地域のことを学びとり、文化的多様性を認め合いながら、参加者間の「つながり」を育むことが目指されている。話題提供者は本実践においてシステム開発を担当している。

本実践には、参加者間のコミュニケーションのモードが多数混在する。まず、参加者はビデオ会議システムを介して同期的にコミュニケーションをしたり、専用 SNS を用いた非同期コミュニケーションを図る。また、言葉だけでなく絵文字によって交流したり、音を使って遊んだりと、ノンバーバルな交流も行っている。また、参加者を取り巻くドメインのスペクトラム(範囲幅)への意識を促している。すなわち、自分ひとりという個人ドメイン、Face-to-Face(FtF)の交流ができる地元である拠点ドメイン、FtF の交流ができないが同じ国であるという国ドメイン、そして国が違うがネットで一緒に遊べる地球ドメインである。それぞれのドメインを意識した遊びメニューを用意している。

より良いシステム開発のためには、開発したシステムを実践において評価することが重要である.しかし、上述したような多様なコミュニケーション・モードとドメイン・スペクトラムの中で様々な出来事が生起する本実践において、参加者間のつながりが効果的に促されているかどうかを評価するには、従来の工学的手法では不十分である.ここでは「状況に埋め込まれた評価」が重要なのであり、そのために質的研究が求められる.

「インクルーシブデザインの"もの作りワークショップ"を学び多き場にするために」(水町衣里)

インクルーシブデザインとは、障害のある人や高齢者、子どもなど、これまでデザインのメインターゲットからエクスクルード(除外)されてきた人々を積極的にデザインプロセスにインクルード(包括、巻き込む)するという手法である。市民団体やNPO、学校、病院などの地域貢献組織と、企業とを巻き込んだ「参加型ものづくりワークショップの場」を提供している。普段の生活の中では、共に作業をすることのない人々(例えば、実際のユーザとものづくりに関わるデザイナやエンジニア)が、ワークショップを通じて、出会い、ともにフィールドワークを行い、対話をしながら、気づきを共有する。参加者みなでたどり着いたアイディアを元に、実際に手を動かしてデザインの提案までを行う。参加者が、より多くの気づきや学びを持ち帰ることができる場を作り上げるのが、ファシリテーターの役割であるが、ファシリテーションのためには、参加者一人一人の学びや気づきを適切に把握することが必要である。しかし、ニーズの異なるユーザ、異分野の人々、または専門家と非専門家が集い、様々な相互作用が起こる場においては、参加者の学びや気づきを拙速に定量化することは、かえってその場の価値を矮小化してしまう。もともとは工学的な研究対象であるものづくりの場であるが、そこで起こる個々人の学びを深く微細に記述・評価する手法としての質的研究にかかる期待について整理する。

「定性的情報理論と質的研究との融合を目指して」(本吉達郎)

人と人のコミュニケーションにおいて用いられる伝達表現は、冗長性があり、またその解釈も多様性に富んでおり、合目的的な言語表現や行為のみで成り立っているわけではない。例えば、熟練技術者から見習い技術者への技能継承過程においても、比喩などによる感性的言語表現が多く用いることで、受け手に直感的理解を促進し、さらに解釈の自由度をある程度確保することなどにより、コミュニケーションにおける親和性が生成されていると考えられる。このようなコミュニケーションの親和性を支える潜在的情報の流れを記述するためには、過不足なく正確に伝えられる情報の量的側面を記述するのもでは十分とは言えない。そこで情報の内容的側面を記述し、人の概念構造を直感的理解に近い形で可視化する手法として「定性的情報理論」を用いた枠組みの構築を考えることが重要である。

ここでは、分析対象として比喩的表現を用いた楽器演奏法の伝達過程を取り上げ、伝達者と受け手との間に存在する概念構造の伝達過程を表現する方法として、バーワイズ、セリグマンの提唱するチャネル理論を用いた理論的考察について紹介する。コミュニケーションの親和性を支える潜在的要素をこのような定性的情報理論を用いた枠組みに記述するためには、コミュニケーションに関わる人の解釈や概念構造の可視化が必要不可欠である。しかしながら、従来の実験などによる科学的データの取得のみに頼っていては、親和性を共有する場に依存するような人の潜在的な概念構造を捉えることは難しい。このためには、コミュニケーションに関わる人の語りを捉える質的研究法との融合が大いに有効であると考えられる。

社会文化的アプローチからの道徳性研究の提案

企 画:臼井東(筑波大学人間総合科学研究科)

企画・司会:吉國陽一(東京大学教育学研究科)

話題提供者:吉國陽一(東京大学教育学研究科)

臼井東(筑波大学人間総合科学研究科) 山下俊幸(関東学院大学人間環境学部)

湯浅周子 (愛育養護学校)

指定討論者:當眞千賀子(茨城大学人文学部)

【企画主旨】

日本の道徳教育研究においては、教材開発や教育プログラムの開発を主題とした研究が盛んにおこなわれてきた。しかし、「道徳を教える」ことや「道徳を学ぶ」ということがいかなる営みなのかについて、教育現場の事実に基づいた実証的な研究は現在ほとんど蓄積がない。本シンポジウムは道徳の学習についての実証的な研究への可能性を開くための理論的枠組みとして、社会文化的アプローチを用いることの意義について提案を試みるものである。現在道徳教育研究においては、認知発達理論が支配的なパラダイムとして定着しているが、学習を分析するための枠組みとしては充分な要件を備えていない。シンポジウムでは教師の道徳についての語りや、授業における道徳の学習についての質的な分析を紹介することで、社会文化的アプローチによる道徳性研究の可能性を示すことを試みる。また道徳教育という営みが教育現場においていかに捉えられているかを、道徳教育に取り組む実践者の報告に基づいて浮き彫りにするとともに、研究における今後の課題についても検討していきたい。

「道徳の授業における子どもの学習過程」(吉國陽一)

道徳教育がいかにあるべきかという問いについては、研究、実践を問わず、教育のフィールドにおいて盛んに 議論が成されてきた。この問いに対して教育学の立場からアプローチするためには、現実に子どもがいかに道徳 を学んでいるかについて、教育実践の事実に基づく研究の蓄積が必須であろう。

本発表では、社会文化的アプローチを分析枠組みとすることで、道徳の授業における学びを子どもたちが教師とともに文化的道具を共有し、再構成する中で道徳的な意味を交渉していくプロセスとして描き出すことを試みる。こうした道徳の学習過程の分析は、道徳という言葉の意味や、道徳を学ぶという行為の意味について、社会文化的アプローチの観点からの問い直しを含むものである。社会文化的アプローチの観点に立つならば、道徳とは人間の実践に先立って普遍的に存在するものではなく、社会的活動の一つの属性として人々が実践をともにする共同体において社会的に構成されるものである。また、道徳を学ぶということは共同体において構成された道徳を表現する文化的道具(ヴァナキュラーな道徳的言語)を、それぞれの共同体の成員がアプロプリエートすること、つまり自らのアイデンティティを構成する道具として獲得していくことを意味する。

「教師が語る道徳」(臼井東)

道徳教育に関する研究は今日まで非常に多く蓄積されてきているが、その非常に重要な位置にある教師については、実際に彼らが「道徳」というものをどのように捉えており、どのように道徳教育を実践しているのかに関してはほとんど考察されてはこなかった。

そこで本発表では、まず小学校におけるフィールドワークから、実際の教育現場において教師はどのように

道徳教育を実践しているのかを報告し、道徳教育の実践の特徴について検討する。続いて小学校および中学校の教師たちを対象にしたインタビュー調査の結果から、具体的に教師たちがどのように道徳というものを捉え、日々、道徳教育を実践しているのかという点を検討する。また同時に、これまで道徳性研究においてその役割が軽視されてきた言語に注目し、道徳性と言語の関係についても再考してみたい。

「「道徳教育」への状況論的アプローチの試み」(山下俊幸)

今春、現職に就くまで 29 年間、私は公立小学校の教師だった。その 29 年間を振り返る。「道徳」を教えることに違和感を覚え、模索した道徳の授業。けれども、私は何よりも「道徳の時間」を大切にした。評定のない時間を子ども達と楽しんだ。子ども達に自分の思いや願いをストレートにぶつけたこともあった。子ども達も本音で返してくれた。「道徳の時間」が多声的な場となっていった。子ども自身が気づき、疑い、納得しながら、価値づけたり問い直したりする。そして、学級というコミュニティが創られていった。「道徳の時間」は、学級経営や児童理解の大切なリソースでもある。

道徳教育を学校生活、学級に埋め込まれた学習としてデザインしてみよう。教科の学習や授業以外の活動の中で。 さらに、子ども達への日々の声かけが子ども達の道徳的な学びのリソースとなる。本発表では、上記の視点から行った 実践、「道徳教育」への状況論的アプローチの試みについて紹介したい。

「子どもの姿から見出す道徳的学び」(湯浅周子)

本発表では保育者の目線から一人の子どもの事例を語る中で、子どもの道徳的な学びのあり方を浮き彫りにすることを試みる。

発表者の勤務する愛育養護学校には時間割と教科で区切られるカリキュラムはなく、教育の場では、子どもたちひとりひとりが生活の中で、自分の興味関心について追求し、他者との関係を形成していく。それを可能にするのは、どのような行為についてもその意味に気づき、考え、子どもに寄り添い支える保育者の姿勢であると考える。人間同士が本気で向き合うことでしか、本質的な意味での人間関係を築いていくことはできず、またそれは決して容易な道ではない。大きなエネルギーを費やして一緒にいようとする人がいる、そのことが子どもの力になり、長いスパンで見たときの変容につながる。保育者は、この変容の中に子どもの成長を見出すことができる。

このように考えるならば、愛育養護学校における教育そのものに道徳の時間というカリキュラム上の規定はないが、他者と共に生きる中での人の成長という意味での道徳的な学びがあると言うことができると考える。

教育フィールドにおける観察者の省察 ―観察者の実践経験の投影としてのフィールド理解―

企 画 ・ 司 会 上 淵 寿(東京学芸大学教育学部)

企画·話題提供者 本山方子(奈良女子大学文学部)

話 題 提 供 者 松 本 健 義 (上越教育大学学校教育研究科)

話 題 提 供 者 若 山 育 代 (広島大学教育学研究科) (非会員)

指 定 討 論 者 野 坂 祐 子 (大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター)

【企画主旨】

教育現場等の研究において、観察者の立ち位置や現象理解は、しばしば観察者自身の経験の影響をうける。たとえば、自らの教職経験や生活指導経験、子育て経験等は、同じフィールドでの現象自体の見え方をまったく異にする可能性がある。ゆえに、観察者の人生経験自体が研究に投影され、そこから見出される社会的局所性としての実践(本山他, 2005)が、観察者自身を枠づけていくという相互反映性(reflexivity)が想定される。だが、多くのフィールド研究は、そのような観察者自身の個人的な経験と結びつけて十分には語られてこなかった。では、上記のフィールドに対する暗黙の意味づけの背景を、私たちはどう考えていけばよいのだろうか。本企画では、敢えて観察者自身が自らの経験や立ち位置を省察し、それがフィールド理解にどのように投影されるかを探りたい。

観察者の省察――〈世界〉の衝突を媒介にしたふるまい生成

松本健義

現在まで、①家庭内での子どもとの造形活動の参与観察(1994、1996、2004a)、②幼稚園での他者との相互行為をとおした子どもの遊びの生成過程(2000、2004b)、③小中学校での生活や学習場面での子どもの学びの生成過程と成りたち(2004、2005、2008)、について参与的・周辺的な観察調査を行っている。フィールドに共通するものは、観察者にとって他者であり活動の当事者でもある子どもたちが、他者との相互行為により世界(遊び、学び)をどのように新たに生成していくかということであり、同時に、子どもが自分や他者のふるまいを相互につくり変え、新たな生を互いに成りたたせていくその過程を明らかにすることである。報告者は、観察者としてつねに子どもたちの相互行為により世界が生成される実践過程の周辺または内部にいた。このため、現在進行形のフィールドで観察者が行う"省察"とは、観察する自分のふるまいのつくり変えであり、子どもたち(被観察者)との実践内の関係をつくり変える"行為"として在る。

そこで、フィールド(世界)内での子どもが世界をつくる方法との出合い(知覚の衝突、世界の衝突)により、 観察者自らが自明として行っていた行為のあり方(意味)におのずとズレや差異が生じ、経験や立ち位置等がつ くり変わってフィールドへの参加の在り方をその場で生成する過程を、「活動システム全体の変容」という観点 より事例をもとに報告する。

実践を見る目の背景と発達——他者とのかかわりの中で形成するフレームに着目して 若山育代

現在、筆者は、「造形教育中の保育者の言葉かけが幼児の想像力を育む」という信念のもと、研究を進めている。筆者のこのような信念は、筆者の保育をみる視点を保育者の言葉かけに定めさせ、さらに、幼児の想像力の育成へ与える言葉かけの効果を検討する動機づけとなっている。このような環境内の情報を選択的に知覚することと、個人の信念との間の関係性は、専門家のものの見方に関する言説において、「フレーム」という概念で説明される。すなわち、個人の持つフレームは、個人が現象を眺める際の注意の方法を決定し、その方法によって

状況を変える方向性と、実践を形成する価値を決めるのである。そして、フレームは、個人を取り巻く環境との相互作用の中で変化する性質を持つ。

ところで、研究者が実践をみる際に働かせるフレームがどのようなものか、またそれがどのようなプロセスを経て変化を遂げてきたか、そして、どのようなきっかけがそれを変化させたのかについての検討は、ほとんど行われていない。だが、これらのことを明らかにすることは、研究者の実践の見方の背景が何であるのか、いつ研究者が自身の現在のフレームを発展させようと自己省察を行い、新たな領域へと踏み出すのか、といった研究者のキャリア発達を導く要因を明らかにすることにつながらないか。さらにいえば、フレームの問い直しである自己省察の姿勢は、幼児が造形活動をとおして世界を知覚し、豊かな感性や表現力を身につける過程の姿勢と類似している。そのため、研究者がどのような時に何をきっかけとしてフレームを変化させるのかを明らかにすることによって、造形教育における幼児の想像力の育成についての何らかの教育的示唆を得ることも可能なように思われる。

そこで、本発表では、学部時代、大学院修士時代、現在、の筆者のフレーム形成にとって重要な3時期を取り上げ、各々の時期で筆者のフレームが何であり、そして、どのようなできごとの中でそれが変化を遂げたのかを報告する。最後に、3時期に共通する「何」が筆者のフレーム変化を引き起こしたかを、他者とのかかわりでの自身のフレームへの「問い」をキーワードとして用い、考察したい。

観察や解釈において自己の経験と向き合うこと――二重化する「風景」を例に 本山方子

「教育困難校」とよばれた高校でフィールド調査を行った。そこでは、過去と現在、初任者と熟達者、高校と 大学など、差異のある景色が重なり、教育現場の一つの「風景」としてみえていた。

筆者は、かつて短い期間、「底辺校」の高校教師であった。当時、教師として最初の赴任校での経験は、良くも悪くも困惑と発見の連続であった。それから十数年経って実施した調査では、次のような省察を何度も行っていた。一つには、教育システムや教育環境の点である。当時を追体験し、改めて指導力不足の教員であったことを思い知らされた。調査校の教育システムを俯瞰的にみることで、当時はシステム全体の理解が浅く、指導のオルタナティブなあり方に気づかなかったことを反省した。二つには、教師の熟達の点である。筆者と同世代の教師がベテランとなり、授業や生活場面の指導が熟達している。困難校での経験を自らの指導力向上の契機としているようにもみえる。彼らから、この間の高校教育の現場をめぐる変化や、自らの生活に応じた教師観の変化を聞き、自分があのまま教師を続けていたら、彼らのような熟達に至ったのか、と自問自答した。三つには、同時代に生きる教育者として、今日の教育課題に向かい合う点である。高校と大学というように学校段階の違いがあっても、双方とも教育改革という課題に直面している。制度的な変化への困惑と対応、これまでの教育の反省と意義確認など、変化に伴い表出する事象は共通していることに気づかされた。

以上の省察には、実践者ー観察者という立場の違いや青年期後期一成人期という発達段階の差異、職場におけるポジショニングの差異などが反映されているだろう。ただし、調査における解釈や意味づけは、何かしらの経験をもつ「今の私」によることでしか可能とはならない。「私」にとってはそれが「私が見た」という現実である。この意味で、事実と解釈の二分化は不可能である。だとすれば、解釈においては、経験の省察を通して、いかに公共性がもたらされるかが課題となるだろう。

インターローカリティについて考える —複数の現場を架橋する質的研究—

企画・司会:矢守克也(京都大学防災研究所)

伊藤哲司(茨城大学人文学部)

話題提供者:伊藤哲司(茨城大学人文学部)

渥美公秀(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)

矢守克也 (京都大学防災研究所)

指定討論者:南博文(九州大学大学院人間環境学研究院)

【企画主旨】

特定の現場・フィールドへの密着は、質的研究の特徴の一つである。インターローカリティとは、質的研究が着目する現場(ローカリティ)の一つ一つを複数繋ぐことによって、普遍性(ユニバーサリティ)への志向とは異なる形で、特定の、しかも多くの場合、少数のローカリティに関与することが多い質的研究が抱えるとされる弱点を克服しようとする方向性を指す。つまり、ローカリティがもつ固有性や具体性を、それらを保持したままそこから離脱させ、別のローカリティへと適用すること、言いかえれば、インターローカルな伝播性や移植性を模索する研究アプローチも必要ではないか。本シンポジウムでは、「円卓シネマの実践とインターローカリティ」(伊藤)、「被災地間交流:塩谷からの手紙」(渥美)、「アクションリサーチにおけるインターローカリティの意味」(矢守)、以上3つの話題提供と、それらに対するコメント(南)をもとに、質的研究におけるインターローカリティの意義と可能性について探る。

「円卓シネマの実践とインターローカリティ」(伊藤哲司)

「円卓シネマ」とは、社会的・文化的背景が異なる人たちが一緒に同じ映画を見て、鑑賞後にその内容をめぐって対話を交わすという方法であり実践である。私はこれまで、山本登志哉さん(早稲田大学)らとともに、この円卓シネマの展開を、機会あるごとに図ってきた。これを行うと、お互いのことがよく解りあえるというように単純に事は進まず、むしろお互いの何が解りあえないのかということがあぶり出されてくる場合も少なくない。しかしそれもまた、「異文化理解」のための重要な一側面である。

今回の発表では、この円卓シネマの実践例を具体的に取り上げて、それをインターローカリティという観点からどのように捉えられるのかを話したい。ここでいう「ローカリティ」とは、たとえば「日本人」「韓国人」という国籍ないしは民族単位でもありうるし、究極的には私たち一人ひとりの個人が、それぞれの「ローカリティ」でもありうる。いずれにしても、特定のローカリティに埋没した状況はいかに打破できるのか、そしてその結果何が私たちにもたらされうるのか、そうした点について考えてみたい。

「被災地間交流: 塩谷からの手紙」(渥美公秀)

中越地震で被災した小千谷市塩谷集落の区長(当時)から、中越沖地震で被災した刈羽村の人々への手紙を素材として、インターローカリティを考える。分析は、手紙から始まる。手紙の奥に塩谷が見える。その先には多様な集落の声が聞こえる。振り向けば、手紙の先に刈羽が見える。その向こうに様々な集落の風景が広がっている。言葉が響き、復興が少し変わる。

ローカリティAとローカリティBがあって、Aでの出来事を(固有性の保持に注意して)一歩抽象化すれば、Bとの間でインターローカリティが形成され、Aから Bへの伝播、移植が成立するように見える。研究者は、ローカリティAに沈潜する。Bとの間でインターローカリティを形成し、何が伝播・移植されたかと問うてみる。しかし、いったい誰のための抽象化、インターローカリティだろうか?

ここでは、インターローカルな広義の言説があって、同時に、その先にローカリティ A が立ち現れることがあり、またローカリティ B が浮かび上がることもあると考える。インターローカリティに気づくことができるか。それは何なのか。その先にローカリティ A が浮かび上がるか。振り返れば何が立ち現れてくるか。何より、フィールドの当事者にとって意味があるか。ここにインターローカリティ研究の妙味と可能性があるのではなかろうか。

「アクションリサーチにおけるインターローカリティの意味」(矢守克也)

アクションリサーチでは、どのような現場にも、また、いつの時点でも普遍的に妥当する真理(「正解」)を研究者が同定することが目標とされているわけではない。むしろ、アクションリサーチは、特定の現場(ローカリティ)において、当面、成立可能で受容可能な解 — 「成解」(socially viable solution) — を、研究当事者(研究者と研究対象者)が共同で社会的に構成することを目標としている。

「成解」は、「正解」とは異なり、ユニヴァーサル(普遍的)ではなく、常に、空間限定的(local)で、かつ、時間限定的(temporary)な性質をもつ。言いかえれば、アクションリサーチがもたらす「成解」は、常に、修正と更新に向けて開かれていることになる。「成解」は、今この現場(フィールド)では「成解」かもしれないが、他の現場では「成解」たりえない可能性はあるし、同時に、同じ現場においても、過去あるいは将来においては、それぞれ別の「成解」が成立した(成立する)かもしれない。

以上から重要な帰結が導かれる。すなわち、「正解」を追究する仮説・検証型の研究パラダイムにおいては、「正解」でないことは、単純明解に「正解」の否定であるが、アクションリサーチにおいては、そうではない。今この現場において受容されない解も、他の現場における「成解」、過去にはありえたかもしれない「成解」、または、将来ありうるかもしれない「成解」として位置づけられる。逆に言えば、他の現場における「成解」や、過去における「成解」は、今この現場における「成解」の候補として位置づけうる。今この現場で「成解」でないことは、「成解」の完全な否定ではなく、むしろ、そこにおいて、将来における「成解」が、一まさに「否定」という形式で一潜在的に保存されているとすら言える。

以上から、アクションリサーチにおけるインターローカリティ、すなわち、複数の現場間の比較・対照作業、および、インタージェネレーショナリティ、すなわち、同じ現場の複数時点間の比較・対照作業、以上2つの重要性がわかる。すなわち、他の現場や過去の現場における「成解」は、一今この現場においては、とても「成解」たりえるとは思えないようなものも含めて一未来の「成解」の潜在的ストックと見なすことができるのである。

この意味で、アクションリサーチでは、当面の焦点である単一の現場がまずあって、しかる後に、複数の現場間の比較や同じ現場の時間的変化に対する関心が芽生えるというよりも、複数の現場を横断するインターローカルで、かつインタージェネレーショナルな視線 — 他者による「否定」の視線 — が、最初からその営みに組み込まれていると考えるべきであろう。また、そうだとすれば、アクションリサーチにおいては、「正解」へと至ることを前提に可能な限り多くのローカリティについて知ろうとすること(多数のデータを収集しようとすること)そのものには大きな意味はない。むしろ、どのローカリティとどのローカリティが出会うことが、効果的な「否定」 — つまり、あッと驚くような「成解」の発見 — を生むのか、言いかえれば、ローカリティの数ではなく、その間のコンビネーションこそが重視されねばならない。

ワークショップで人は何を学ぶのか

企画 佐伯 胖(青山学院大学社会情報学部社会情報学科)

登壇者 話題提供者 苅宿 俊文 (青山学院大学社会情報学部社会情報学科)

茂木 一司 (群馬大学教育学部美術教育講座)

植村 朋弘(多摩美術大学造形表現学部デザイン学科)

指定討論者。高木 光太郎(青山学院大学社会情報学部社会情報学科)

刑部 育子(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

司会 佐伯 肸 (青山学院大学社会情報学部社会情報学科)

【企画主旨】

近年、企業、学校、地域社会でワークショップが盛んである。当然、ワークショップ活動が拡がると共に、ワークショップを組織し、リードする専門家が必要になってくる。その場合、ワークショップに関する「専門家」にはどのような専門的知識と技能が必要であろうかが問われることになる。

ワークショップを実践する上で注意したいことは、どこかに参加者の「知らない」知識を「教える」という、いわば「教え主義」が忍び込む傾向があったり、ワークショップの意味を知らずに、強引に「公式手順通り」にメンバーに働きかけ、見かけ上の「盛り上がり」を作ろうとしてしまったりする問題が出てきている。このような状況を踏まえて、ワークショップで学べることについて、提案していきたい。

話題提供としては、子どもたちのワークショップの実践の立場から、美術教育の立場からのワークショップについて、そして、ワークショップを分析するためのツール開発の立場からの3本である。この企画は、本年度から3年間実施する科研費基盤研究Bの「アンラーニング・ワークショップの開発研究」に基づいている。

「ワークショップという学習環境」(苅宿俊文)

子どもたちのワークショップを企画運営している NPO 等を約 10 年やってきている中で、取り組んできた次の 3 点を紹介する。(1)子どもたちのワークショップの実践として、身体表現とメディア表現を参加体験する「逆転時間ワークショップ」を紹介する。「逆転時間」とは、参加者の身体表現を映像に撮り、逆再生で見るという単純なものであるが、逆再生でみると、「動きのイントネーション」のようなものがわかり、さまざまな試行錯誤を促している。(2) ワークショップは、コミュニケーションの広がりや深まりが重要なテーマになっているが、このコミュニケーションのきっかけを作り出すリアルコミュニケーションツール「ビタハピ」の仕組みを紹介する。(3) ワークショップスタッフの育成として機能している「入れ子型ワークショップ」の事例を紹介する。「入れ子型ワークショップ」とは、参加者がファシリテータに、ファシリテータがリーダーへ、リーダーが企画者へと外延的に広がることを内包しているワークショップの方法の一つである。

「障害を乗り越える(造形)ワークショップと身体・メディアの可能性」(茂木一司)

美術教育とは何を学ぶ教育なのか?造形の世界を感覚的に探求し、美的質的に高めるだけの学習なのか?今アートが社会性を強め、コミュニケーションを問題にし、コミュニティづくりそのものを作品化する、双方向で参加型の作品が一般化している。美術をアートの学び/アートな学び(佐藤学)にしたい。私たちが今まで4回(あさひ de アート 2003・2004, 盲学校 de アート 2005・2007) に渡ってやろうとしてきたことは、「障害があってもなくてもアートの前では皆自由で平等だ」ということの実践だった。メディア的な視点の流行や導入は好都合だった。メディアは余分なアウラを捨てさせ、世界をいい意味でフラットにしてくれる。私たちは皆、メディアとなって、逆に生身の身体同士でコミュニケートしながらアートを享受し、アート化して楽しんだ。また、ワークショップの学びは美術教育=ものづくりという呪縛から私たちを解放し、関係性や思考を中心とした表現の学びに誘いだしてくれた。

「アンラーニング・ワークショップの基本概念を探るためのツール開発研究」(植村朋弘)

ツール開発研究は、ワークショップ実践者の育成を支えることを目標に、「組織におけるコーディネーションの立場」「道具・空間などの設えと人の活動との因果関係を捉える立場」「理論・研究的意味を捉える立場」の3つの観点に着目している。またワークショップの録画記録を振り返ることから、「実践者が自ら意味を探る」ことを支援するソフトウェアの開発をめざしている。それは、実践の中で使った「言葉」を記録の中から省みられること、実践の中で何を考えていたのかを振り返られることなどが上げられる。また以上のことは、視覚的情報による分析が可能となる。特にワークショップの中で子供がどのように変わっていくのか、その瞬間までのプロセスを記録することが重要である。子供の表情の変化を捉えたり、その場がどのような経緯で立ち現れてきたのか、人との関わりについてどのような過程を経たのか、またワークショップの場面変化や文脈のつながりなどを捉え、「子供自身が、新しい自分や作品と出会う瞬間」を記録できることが必要である。開発ツールは、グループで共有することを想定し、ワークショップのプランニングから実践、ワークショップ後のリフレクションとそれに基づいた理論の形成、次の実践へのつながりという流れ全体を支えるものを検討している。

ライフエスノグラフィとサービスラーニングの出会い ―難病患者のライフとそれを支える多層システムに注目して

企 画:日高友郎(立命館大学大学院文学研究科)

水月昭道(立命館大学衣笠総合研究機構)

サトウタツヤ(立命館大学文学部)

話題提供者:竹内聡(日本ALS協会茨城県支部)

日高友郎(立命館大学大学院文学研究科)

市山雅美(湘南工科大学総合文化教育センター)

海野幸太郎(日本ALS協会茨城県支部)

指定討論者:福田茉莉(岡山大学大学院社会文化科学研究科.

国立病院機構新潟病院臨床研究部)

田坂さつき(立正大学文学部)

韓星民(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

【企画主旨】

難病患者の生活を高い水準で保つためには、様々な人的・制度的支援が重要となる。特に筋萎縮性側索硬化症 (ALS) は、全身の筋肉の機能が冒される可能性のある進行性の病いであること、根治療法が確立されていないこと、患者ごとの個別性が大きいこと、などの特徴を持っているために、患者の生のあり方そのものを包括的に理解し捉えていくことが求められる。

このような背景から、患者を支えるための活動は様々なアクターによって担われている。本シンポジウムにおいては ALS 患者本人による疾病そのものとの付き合い方、患者の生活を支える様々な人たちの活動、「サービスラーニング」(SL)の一環としてその人たちと出会った学生や院生の学び、制度改変までを視野に入れた活動のあり方、など、関連する様々な視点からの話題提供を通じ、患者の「生」の全容を理解するための方法論として「ライフエスノグラフィ」の可能性を提示したい。

ALS という病い、患者が学ぶこと―患者の視点から (竹内聡)

告知を受けた時何を考えたかご披露するには、私の家族構成をお話しなくてはなりません。

父:数回の脳卒中の発作で自分の事しか考えられなくなっています。

母:家計を切り盛りしていますが、75歳と高齢で私の身の回りまでは手が回りません。

伴侶: 当時2年前に乳ガンで亡くしています。

本人: 当時43歳で会社勤めをしていました。

長男:中学3年生、受験生でした。

次男:小学6年生、毎日遊び回ってるのが、お仕事でした。

長女:小学2年生、かわいい盛りでしたねえ。

伴侶を亡くして直ぐの頃でしたので、家事と家計の把握と請求書の東を抱えて精一杯の時期でした。当時二輪車で通勤していましたので、左手の握力の低下に直ぐに気づきました。神経内科であちこちをコンコンたたかれた末、検査入院となりALSであることを告げられました。進行性で治療方法が無いこと、ETC・・・

私の考えたことは、母への家事、家計の引き継ぎとローンの整理です。自分が動けなくなる前に最低限の生活を確保しておかなければいけませんからね。病気の内容や色々な制度はインターネットで調べて、近々訪れるであろう歩行困難への対処、車椅子の確保や住宅ローンや生命保険の整理等々、身の回りの事ばかり行っていました。これは伴侶がいないため自分自身しか頼る人がいなかったのです。今後出てくるであろうALSの症状に合わせた準備が肝要です。

長男と次男は自衛隊生徒という、授業料無し、給与が貰えしかも高校卒業の資格の取れる身分は海上自衛官と

いう制度を利用して、旅立っていきました。これで、後は娘と自分だけとなりました。この頃は家の中のつたえ歩きに、胃瘻の増設で経管栄養になっており、訪問看護週3回に往診が週1回でした。

住宅ローンの整理も終わり、生命保険も手当てできて現在は日常の経費が掛かるだけです。病気の進行を見据えて身の回りの準備を早めに手当てすることが重要だと思います。ALSを怖がったり、進行を気にしていられる人は幸せです。だって生活の為の雑多なしかも面倒な事柄を考えなくて良いのですから・・・私にはそんな暇はありません。

患者の生活現場を支える人々と生活知の実相 (日高友郎)

ALS は進行性の病いであり、症状の個別性も大きい。患者のコミュニケーション支援においては様々な機器が製作されているものの、身体の可動部位は患者ごとに異なっており、かつ症状の進行とともにこうした部位にも変化が生じるため、生活現場では常に患者の状態を理解し、患者にとって適切と感じられるようなサポートのあり方を検討する必要がある。

一方で、こうしたサポートにあたっては、日々変化していく患者の症状の理解だけでなく機器についての専門知も必要となるため、サポートの担い手が問題となる。近畿地区において「ピア・サポート」の形で実際に他の患者宅に臨み患者の支援にあたっている久住純司氏は、このような人材として稀有な存在である。本報告においては、フィールドワークとして久住氏の活動に同行して得られた結果から、症状の進行にともなって患者一ピア・サポーター―患者家族がどのように対応しているか、という点について論じる。

夏のALS合宿のSL分析、SLからALSに対して言えること (市山雅美)

平成20年8月に行なわれたITP-SL合宿では、ALS 患者との出会いや意思伝達装置体験等をふりかえるワークショップ及び「ふりかえりシート」の記入を毎日行なった。参加したのは、3大学から、工学、哲学、心理学・社会福祉を専攻する学生15名である。サービスラーニングでは、活動についてふりかえりを行なうことが重要となるが、本報告では「ふりかえりシート」の記述の分析について報告する。

各活動のふりかえりについて、専攻分野その他による観点や感じ方の違いを明らかにしたい。特に、自分の専門分野についての意識が、どの活動よって、どのように変化したか分析する。さらに、異なる分野の学生との交流による自他の専門分野についての考え方の変化について検討する。

また、学生一人ひとりについて、活動ごと、一日ごとの、課題意識や気づきなど認識の変化を追っていき、それとともに、事前・事後アンケートの記述から、合宿参加前と参加後の認識の変化を論じる。

制度を変えるためにやること・まなぶこと―患者アドボケイトの視点から (海野幸太郎)

自分らしくあるために「できること」「すべきこと」は何であろうか。疾患・障害違わず、自分らしくあろうとした時に解決すべき課題が沢山ある。つまり、私たちが利用する社会保障制度は、改善すべき事が沢山ある。自分らしくあるためにという目的に対して、その達成手段には「発信」が重要である。誰が何を発信すべきか。利用主体者からみて、自分らしくあるために改善必要と判断できることを、利用主体者が発信することが重要である。制度設計者、提供者、利用者、それぞれに利害関係は実在するが、利用主体者が発信しなければ、本質は見えてこない。

その過程において、当事者が学ぶことは沢山ある。問題点を見つけ、その解決方法を模索し、発信すること。 それは、社会をより良くしていくために、疾患・障害に関係なく、社会の一員として必要なことである。社会と 繋がる大切さがそこにある。

指定討論

以上の発表を受けて、難病患者のQOL研究の立場から福田茉莉、サービスラーニング実施の立場から田坂さつき、障害者支援研究の立場から韓星民、がそれぞれの立場から議論を行う。司会は水月昭道が務める。

質的心理学と会話分析の接点を探る —母子相互行為の事例分析を通して—

企 画:野村 侑加(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

司会:太田 礼穂 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

話題提供者:野村 侑加(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

高木 智世 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

指定討論者:高梨 克也(京都大学学術情報メディアセンター)

鬼界 彰夫 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

【企画主旨】

現在,多くの分野で相互行為における言語使用の研究が行われている。言語を研究する分野である言語学や言語哲学だけではなく,心理学や社会学においても多くの研究が積み上げられてきた。それぞれの分野により,相互行為を分析する目的は異なる。例えば,言語学であれば相互行為を可能にする言語構造の仕組み,哲学では言語の構造・意味・使用法・レトリック等について哲学的に考察し,心理学では相互行為が成り立つ上で必要な人間の認知機能,社会学(特にエスノメソドロジーや会話分析)では人々が相互行為を組織する方法が研究テーマとなろう。

このように、それぞれの分野において、そのテーマにより異なる方法論を用いて研究が進められている。それぞれが新たに導き出した知見は、少なからず、分野間の関係に影響を与えていよう。しかしながら、個々の具体的な分析において、複数の分野の手法や知見を有効に取り入れた研究は少ない。そもそも異なる目的のために彫琢された道具立ては、容易には併用できないのであろうか。

本シンポジウムでは、同一のデータ断片について、異なる学問背景・方法論を持つ話題提供者が、それぞれの手法を用いて分析する。それぞれのアプローチの仕方がどのように異なり、どのように交差するかを確認し、それぞれの分析や考察を深めるために互いの視点から何を学べるのかを検討する。このシンポジウムは、異なる手法の安易な混用を提言するものでは決してない。むしろ、それぞれの手法の違いを確認した上で、その違いを超えて、人間の相互行為の本質についてより深い洞察へたどりつく道筋を探る試みの第一歩として企図したものである。

分析で用いられるデータは東京在住の男児(K)とその母親による絵本読み場面である。撮影時の月齢は25.5 ヵ月であった。このデータは男児が19.5 ヵ月から27ヵ月間に行った縦断観察の一部であった。観察は半月ごとに参加児宅を訪問し、観察は18回行い、この回は13回目の観察であった。

「注意を管理する実践のストラテジー」(野村 侑加)

野村は、子どもの注意に関する認知機能の発達が、実際の相互作用場面を通してどのように現れるかを検討する。「誤った信念課題」に通過できない4歳児以前の子どもたちが、全く他者の心が理解できないわけではない。これまでに「心の理論」獲得以前の心の理解の指標となるものに、共同注意の成立、振り遊びなどがあげられてきており、これらの行動はおよそ2歳までには観察された。

一方で、2歳代で最も大きな発達上の特徴は言語を用いた相互行為の発達といえるだろう。その中でも、本シンポジウムでは共同注意の機構がどのように言語実践に反映されているのかを検討する。Baron-Cohen(1995)

で示された「心の理論」成立以前の心の理解の発達過程を示す一連の研究の中では、共有注意の機構に注目している。ここでは共同注意の機構の中でも特に「宣言的指さし」は相互行為の中で、他者の注意を管理する戦略が用いられている。この「宣言的指さし」では自己、他者、モノの3者の関係の理解が必要である。ここでは共同注意の機構がどのように言語を用いた相互行為の中に反映されるのか、K児とその母親の相互行為を分析することで示していきたい。

「心の理論」の獲得の指標となるものに「誤った信念」課題の通過があげられる。「誤った信念」についての研究が積み重ねられる中で、多くの子どもは4歳代で課題を通過できるようになる。しかし、2歳児でもことばの実践の中では他者の「誤った信念」の理解の萌芽を示す事例が数多くある。つまり、共同注意の成立の指標のひとつである宣言的指差しの構造と類似した相互行為が行われている。特に K 児の「あぁ、お水にいんの」という発話が、「誤った信念」についての理解の発達研究の文脈と相互行為の長期観察の中でどのように解釈できるかについて分析を示し、上記の点を議論していきたい。

(髙木 智世)

高木は、同じデータ断片について、この母子の相互行為がどのように組織されているかを会話分析的視点から 詳細に記述することを通して次のことを示す。一見、母と子の間で互いの発言の理解に齟齬が生じ、相互行為の 進展が阻まれているように思われるやりとりにおいても、間主観性の揺らぎを整序する手だてが、相互行為を組 織する基幹である発言順番交替の組織や、行為連鎖組織、修復の組織によって確保され、極めて合理的に各会話 者の行為が産出されているのである。具体的には、次の2点が焦点となる。1)上に述べたような相互行為の基 幹的組織は、相手の行為に対して敏速かつ敏感に、また、柔軟に感応して自らの行為を産出し、相手の行為をそ のように産出されたものとして理解すること、そして、何らかの問題が生じた場合に迅速に対処することを可能 にしている。このことは、すなわち、状況依存性や協同性、間主観性の問題に対処しつつ相互行為を細緻に組織 していくことを可能にしている。2) 相互行為の組織は、1)の意味において精密であるだけでない。身体の動き や道具、共有された知識などが資源として利用され、極めて多様で複雑な相互行為が刻一刻生み出されている。 重要なのは、今述べたことが、母親のみならず、25ヶ月児のふるまいについても同様に言えるということで ある。本シンポジウムでは、子どものふるまいを中心に上記2点について丹念に見ていく。とりわけ、子どもが、 「かばさんでてこない」という発言を用いて母親の(「かばさん」の探索活動に対する)援助を引き出し、その 後にくり返される母親の「指示」的発言に敏感に感応して自分のふるまいを整序する過程、および、最終的に誤 解が公然化された時点で極めて合理的にその誤解の修復を試みていることについて詳細に分析する。この作業を 踏まえて,2 歳児が,相互行為の基幹的組織と対面相互行為における多様な(多モードの)身体的・環境的資源 をすでに駆使していることが、「心の理論」や人間の相互行為能力の研究に対してどのような示唆を与えうるか、 ということについて検討する。

参考文献

Baron-Cohen, S. (1995). Mindblindness: An essay on autism and theory of mind. The MIT Press.

変化を問う質とは何か―モデル化できる質、できない質―

企画・司会:大倉得史(九州国際大学)

有田恵(京都大学こころの未来研究センター)

話題提供者:大倉得史(九州国際大学)

有田恵(京都大学こころの未来研究センター)

勝浦眞仁(京都大学大学院人間・環境学研究科)

指定討論者: サトウタツヤ(立命館大学文学部人文学科)

西平直(京都大学大学院教育学研究科)

【企画主旨】

これまで質的研究の分野では、ナラティブ・アプローチやグラウンデッド・セオリー・アプローチ、TEMなど、モデルを構成することを目的とする手法が主流となってきた。モデルを作り、一般化することは、現象を予測し、説明するために確かに有効な方向性であり、現場での実践場面においても、そのモデルが人々の生きる体験世界を了解したり、次なる対応を導くのに役立つということもあるだろう。しかし、その一方で、モデルを持っているがゆえに人々の体験そのものへのまなざしが曇ってしまう場合や、そのモデルでは説明できないような〈変化〉が起こる場合もある。いや、むしろある人の〈変化〉の本質とは、実践者がその人について持っていた固定的なモデル(イメージ)を裏切られ、生命の動きそのものから何らかの衝撃を受けるということなのではないか。

モデルを作るということは、現象を言語化・一般化することによって、何とかそれに対処しようとする実践的な要請から出ていると言える。しかし、その一方で、実践者は絶えずそのモデルを超える何か一生き生きとした、力動的な何か一に注意を払い、そのレベルでこそく変化>が起こることを期待しているとは言えないだろうか。 当企画では、モデル化できる質とできない質があるのではないかという観点から、これまでの質的研究において扱われてこなかったく変化>に着目し、現場での実践においてそのく変化>を問題にしていくことの意味について考えていく。

「青年らしさ」を捉えるために(大倉得史)

青年期にある人たちと接していると、いくつかの特徴的な雰囲気・感じを持つ言葉や態度にしばしば出会う。例えば過度に自分を追い込んでいる感じや、あまりに前向き過ぎる感じ。他者との衝突を恐れている感じや、何にでも食ってかかる感じ。非常に怠惰で無気力な感じや、何かに頑なにこだわっている感じ。甘えている感じや、干渉を拒む感じ…等々、発話される言葉や可視的な行動の表面的な差異を超えて「いかにも青年らしい」特有の雰囲気が感じられる場合が少なくない。その雰囲気、「らしさ」があるからこそ、私たちは青年を大人や子どもとは異なる独特の存在としてみなすのだろうし、青年に対する教育的・実践的関わりもそうした「らしさ」への働きかけとして行われるのだろう。

しかしながら、こうした「青年らしさ」は、逐語録や可視的行動の分析からモデル化を目指す現行の質的アプローチではなかなか捉え難い。それは恐らく「青年らしさ」の本質が、上記のさまざまな「感じ」が一体となった日く言い難いものとしてあるからであり、青年との接触から容易には言語化できない何かを感じ取り、それを何とか記述しようとする研究者の「努力」の中に「匂わせる」という形でしか表現・伝達できないものであるからである。こうした「青年らしさ」を捉えるために一体どのような方法論を構えるべきなのか、それをモデル化することができるのか否か、そもそもモデルを作ることの意義とはどのようなことなのかといったことを、事例

<質>の層一意味とモデル化一(有田恵)

発話を質的に分析するというとき、そこには様々な層があるように思う。層とは、例えば発話の生のデータを どのような視点(目的)で切り取るのかと不可分なものであり、この目的によって、発話のどこに着目するのか が変わってくる。質的研究の意義の一つは、教育、看護、医療といった現場において、個々の人々への実践に研 究が即還元されるところにあるのではないだろうか。

個々の人間が生きる現場での実践に研究を直接的に還元することを考えるとき、常に変動しうる協力者と研究者のあり様を、<いま、ここ>において捉え、両者が共に生きる文脈において捉える必要がある。発話データの分析方法については、すでに質的な立場からも様々な手法が展開されている。しかしながら、現場において、今、目の前にいる人を理解するために私たちが日々の生活の中で無意識的(あるいは意識的)に頼っている感覚については、これまで十分な議論がなされたとは言えない。この可視化できないもの、語られぬものをどう記すかという点を抜きにしては、現場でのデータ共有や協力者理解は難しいものとなる。さらには、学問としての理論と方法、さらには当事者(協力者・研究者)以外の人へと繋がる表現も不可避な問題である。

本発表では、終末期を生きる人との対話を基に、日々変化しうる協力者のあり様を、①何のために、②どのよう手法で、③どう表すかという観点からく質>の層一意味とモデル化一について考えていく。

自閉症児の内面の変化を捉える質的アプローチとは(勝浦眞仁)

保育、教育の領域において、教師と生徒の会話分析や行動分析を中心に、研究者それぞれの立場から多様な質的研究が盛んに行われ、これまでの研究では捉えきれなかった側面に目が向けられつつある。私自身も障害児保育、教育の実践の場に立ち会い、自閉症児を中心に、子どもとその子に関わる人たちを観察し、その様相を記述してきた。その中で、障害を抱える子どもも他者との〈つながり〉を求める存在であるという立場から(Trevathe n,1998)、他者とのコミュニケーションへの動機が自閉症児ではどのように発達していくのか、また私たちにはどのような支援が可能なのか、という問いが浮かび上がってきた。

しかし、自閉症児がどのように他者との関係を形成していくのかを記述し、モデル化していくのは容易ではない。というのも、自閉症児が身近な人たちのことをどのように思い、感じているのかは目に見えて観察できるものではなく、また彼ら自身が発する言葉も字義通りの意味で了解できるとは限らないからだ。しかし私が観察する限りにおいて、自閉症児の保育、教育を実践している人たち、そして私自身も自閉症児の内面の変化を感じることがあるのも確かであり、その変容を理論化していくことによって、今後の自閉症研究および保育、教育の実践をより豊かにしていける可能性も出てくるのではないかと思われる。

そこで本発表では、ある中学校の育成学級において1年にわたり観察してきた自閉症児の観察記録を提示する。 今回注目したのは、行動面の変化だけではなく、実践者や私自身に感じられた子どもの内面の変化である。それ を問うための方法、質的アプローチについて議論を行いたい。

引用文献:トレヴァーセン.C(2005)自閉症の子どもたち 間主観性の発達心理学からのアプローチ (中野茂, 伊藤良子, 近藤清美, 訳).京都:ミネルヴァ書房(Trevathen.C(1998).Children with autism: diagnosis and interventions to meet their needs. London: Jessica Kingsley Publishers)

主体性のデザイン

企 画: 有元 典文 横浜国立大学

企画·司会: 岡部 大介 慶應義塾大学

話題提供者: 高木 光太郎 青山学院大学

藤田 悟郎 科学警察研究所

青山 征彦 駿河台大学

文野 洋 東京都立大学

指定討論者: 鈴木 栄幸 茨城大学

有元 典文 横浜国立大学

企画趣旨

本シンポジウムでは、主体性を個人に所与の実体ではなく、社会文化的な構築として捉え、その構築のありさま、ダイナミクスについて具体例を挙げて検討する。ヴィゴツキーに端を発する社会文化的なアプローチでは、私たちの主体性は、人工物や制度と不可分な総体として議論されてきた。こうした人工物や制度自体が、私たちが自分たちの世界を作るためにデザインしてきたものであり、その意味では私たちは私たちの主体性をデザインする存在であると考えられる。このような観点から、まず主体性はいかに語られてきたか、またどのように考えるかを概観し、その上で、「主体性の社会性」が際だつ3つの場面から話題提供していただく。

いずれの場面においても、主体性は皮膚の内側のものではなく、制度やインスクリプション、人工物といった皮膚の外の具体的なセッティングによって構築されている。世界を特定の活動の対象としてデザインすることと、特定の対象に向けての動機をもつことの、再帰的な運動のスナップショットとして、主体を捉えていく。

話題提供

非-人間のエージェンシーをいかに考えるか:主体を考えるための準備運動 青山征彦(駿河台大学)

自動車を運転するときの主体は、ドライバーなのだろうか。当たり前のことを尋ねているような質問だと思われるかもしれない。しかし、科学技術社会学の理論であるアクターネットワーク理論では、自動車を運転するときには、自動車のデザイナーやガソリンの精製所、交通法規など無数のアクターを動員していることになると考え、「車を運転するという行為は集合的」だと主張する。 つまり、ドライバーを含むさまざまなアクターの集合体(ハイブリッド・コレクティヴ) が運転の主体ということになる。

別の例を考えてみる。充電しろと騒ぎ立てる携帯電話は、主体だろうか。もし、対象に働きかけて影響を与えることをエージェンシーと考えるなら、携帯電話にエージェンシーを認めることも可能であるという指摘もある。このように非一人間を含むようにエージェンシーの概念を拡張しようとする動きをどのように理解すればよいのだろうか。主体一人間という前提を当然のものとはせず、社会的な構築のプロセスとして見ていくための戦略を、Kaptelinin & Nardi や、Wertsch などの議論を検討しながら考えていきたい。

エコツアー参加者の環境学習の研究と主体性 文野洋(東京都立大学)

体験型学習の1つともいえるエコツアーでは、ツアー参加者(以降、参加者)が、エコツアーへの参加を通じて環境学習(環境の学び)を進めることが望ましいとされる。エコツアーにおける環境学習を扱う研究者は、参加者のツアー後の感想などから、いかに「学び」が達成されたかを読みとる。参加者は必ずしも環境学習を目的として参加しているわけではないことから、研究者による「学びの主体」の設定がここで行われているといえる。もう1つの主体性の水準に、参加者の「学び」を同定する際の、参加者の行為(本報告では「語り」)の扱い方がある。参加者が示した語りを、語りの文脈から抜き出して単独で扱うときには、「語りを産出する個人=学びの主体」という前提がおかれている。しかし、参加者が示した語りは、調査者とのインタビューの相互行為において「話し手=語りの主体」という役割を局所的に引き受ける形で生成されたものである。本報告では、エコツアー参加者とのインタビュー場面などを紹介しながら、エコツアーにおける環境学習を研究する際の主体性の構築について考えてみたい。

事故統計と犯罪統計における主体性のやりとり藤田悟郎(科学警察研究所)

近年、学術研究と官庁や企業の実務で、事故統計や犯罪統計を利用する、いわゆる2次分析(secondary analysis) の例が増加している。2次分析を行うと、統計により事故や事件がマクロに把握可能である、との素朴な期待が成立し難いことが、すぐに明らかになる。事故統計や犯罪統計は、刑事訴訟のために個人の責任を明確にする情報を記録する制度であり、責任の証明に関係がない情報は記録されにくい調査項目となっている。一方で、研究者は、標準化された質問票や実験計画などの制度やインスクリプションにより、統計を理解しがちである。統計の作成者と利用者は、それぞれが、別の制度やインスクリプションより構築された活動の総体であり、2次分析の困難は、異質な活動の総体が接触し、調整、融合しようという過程で生じる。この過程を換言すれば、異質な集団が接触する以前には、当たり前と考えられていた、集団の主体性が再発見される過程であるとも言える。2次分析の現場で、主体性の再発見が行われている様子と、目的達成のために行われている努力を紹介する。

「体験者であること」をめぐる交渉 高木光太郎(青山学院大学)

刑事裁判は「体験者であること」をめぐる高度に組織化された社会的交渉の場であるといえる。被告人や目撃証人は自身が出来事の体験者であること(あるいは非体験者であること)を、その体験(あるいは体験の不可能性)の詳細な説明を通して証明することを試みる。日常生活において過去体験の説明は特段の検証をうけないまま聞き手に受け入れられる場合が多いが、刑事裁判における被告人や目撃証人による体験の説明は、常に聞き手による徹底した批判的検証の対象となる。被告人や目撃証人は、事件にかかわる出来事を直接体験し、それを説明することのできる唯一の人物として特権的な存在であるにもかかわらず、出来事を体験していない裁判官、検察官、弁護人を説得し、その承認を得ない限りは「事実」を語る法的主体としての「体験者」となることはできないのである。報告では、このように「体験を語ること」と「それを承認すること」との倒錯した構図から産出される証言者の不安定かつ重層的な主体性について、それを媒介しているテクノロジーにも注目しつつ検討する。

個人研究発表 〔ポスター掲示〕

2008.11.29(1) 総合交流会館 入口ホール

2008.11.29(1) 総合交流会館 入口ホール						
29-01.	SEIQoL-DWから捉えた個人のQoL (1) —SEIQoL-DWを用いた調査法の検討—	立命館大学 立命館大学 岡山大学 国立病院機構新潟病院 国立病院機構新潟病院	福田茉莉			
29-02.	SEIQoL-DWから捉えた個人のQoL(2) 一成人筋ジストロフィー患者を対象とした一	立命館大学 国立病院機構新潟病院	サトウタツヤ 西田美紀			
29-03.	SEIOoL-DWから捉えた個人のOoL(3) 一筋ジストロフィー患者の生活の語り一		福田茉莉 サトウタツヤ			
29-04.	技術者コンフリクト現象における状況論的アプローチ 一支援技術開発者と支援技術ユーザーの相互作用を中心に一	立命館大学、KGS株式会社 大阪大学				
29-05.	哲学の道における環境体験について	立命館大学 立命館大学 岡山大学大学院 立命館大学	日高友郎			
29-06.	異文化体験と偏見:関わることの意味	東京福祉大学	石川清子			
29-07.	電話オペレーターの対人技術 一受注とクレームに対応するスキルの選択的運用一	岡山大学 岡山大学	入内島菜月 田中共子			
29-08.	化粧による他者との関係性の調整の検討	京都大学	木戸彩恵			
29-09.	知恵(Wisdom)に関する超越論的視点からの研究	北海学園大学	小島康次			
29-10.	保育者の語りに見る実践知 一「片付け場面」の映像に対する内容分析—	千葉大学 東京大学 聖心女子専門学校 川村学園女子大学 広島大学 東京成徳大学短期大学	秋田喜代美 増田時枝 箕輪潤子 中坪史典			
29-11.	プログラム参加者に対する「地球温暖化に関する意識と行動」についアンケート調査の質的分析	ハての 武蔵工業大学 神奈川大学				
29-12.	民俗芸能の師匠に対するナラティヴ・アプローチを用いた伝承の分析 一無形文化財保護に向けて—	京都大学 東北大学				
29-13.	「声を出すこと」の合意を通した学級への参加に関する一考察 一ディレンマを被る観察者のポジションから一	京都大学	平野拓朗			
29-14.	アイデンティティの変容と職業意識との関連性 一成人前期にある看護師のライフストーリーをもとに一	北海道大学	溝部佳代			
29-15.	知的障害者の就労に関する雇用者の問題意識の構造	九州ルーテル学院大学	石山貴章			
29-16.	小児医療における「がんばれ」という言葉のもつ多義性	奈良女子大学	大西 薫			

2008.11.29(2) 総合交流会館 入口ホール

29-17. 動物との交流の場における認知症高齢者A子さんの 他者との関係の中に体験される世界 札幌市立大学・奈良女子大学 河村奈美子

29-18.	成人知的障害者家族の語りの分析	大阪市立 北巽小学校	坂本麻美
29-19.	性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親の子についての物語化希求過程と構成された親物語の分析から		莊島幸子
29-20.	喪失からの学び―不妊治療を断念した女性の<生>の変化	京都大学	竹家一美
29-21.	家族の自死をめぐるやりとりの諸相	東京大学	橋本 望
29-22.	社会福祉援助の「成果と実施過程」に対する「質的評価」の重度知的障害者の地域生活を支援するためのアクションリナ		古井克憲
29-23.	障害者は高等教育をどのように経験しているか 「障害」のダイナミズム	大阪大学	松原 崇 佐藤貴宣 青木千帆子
29-24.	退院後の統合失調症を持つ方の内的・外的資源の獲得過程 一健康生成論を用いた闘病記の分析	大阪府立大学	山口知代
29-25.	地域の米作りに参加することの意味 〜幼稚園児の活動から〜	文京学院大学 文京学院大学	
29-26.	相互行為による学びの共構築 一日本語の教室におけるレポート作成活動の分析から一	(株)早稲田総研インターナショナル 早稲田大学	
29-27.	質的分析から試みる学外入学者を対象とした 大学院研究プロジェクトへの参加と活動に関する研究	関西大学	盛岡 浩 岸磨貴子 久保田賢一
29-28.	福祉物作りのサービスラーニングにおける教育効果の検討	湘南工科大学 湘南工科大学	
29-29.	犯罪によって子どもを喪った母親の経験とその意味づけ 一手記を書くという作業に見て取れるもの一 (第2報)	横浜市立大学 大阪大学	河原智江 西村ユミ
29-30.	看護師として働き続ける中で経験すること 一選択・決断という契機に注目して一	国立国際医療センター	村上優子
29-31.	Display and Education in the Art Museum - Around the Qualitative Approach	Pusan National University Pusan National University Pusan National University	Yi Byung Jun
29-32.	Interaction between teacher and student in cyberspace of education	Pusan National University Pusan National University	
200	08.11.30(1) 総合交流会館 入口ホール		

2008.11.30(1) 総合交流会館 入口ホール

30-01. 初めての子どもをもつ両親の育児の意味づけの変化 オスティック オール・オール オール オール・オール オール・オール オール・オール オール・オール オール オール オール・オール オール オール オール・オール オール・オール オール オール オール オール オール オール オール オール オール	大阪大学・	奈良女子大学	田中恵子
---	-------	--------	------

30-02. 大学生の持つ算数・数学の学力観および学習観に関するインタビュー調査 新潟青陵大学 中村恵子

30-03. 動物園における解説員は『来園者とのやりとり』をどのようにとらえているか 千葉市動物公園 並木美砂子

多摩動物公園 草野晴美

30-04. ジェンダー役割に対する判断の複数性 立命館大学 滑田明暢

2008.11.30(2) 総合交流会館 入口ホール

30-05. 子どもが生きる出来事世界としての〈学び〉の

30-05.	生成過程と成りたちに関する研究	上越教育大学大学院(学生) 上越教育大学大学院(学生) 上越教育大学大学院(学生) 上越教育大学大学院(学生) 上越教育大学大学院(学生) 上越教育大学大学院(学生)	三盃美千郎 荒 博史 目黒公三
30-06.	●未定●	筑波大学	守下奈美子
30-07.	高校家庭科教科書に対する言説分析と再構成への試み	**** * * * * * * * * * * * * * * * * * *	八ッ塚一郎 玉岡 愛
30-08.	子どもの反応が英語教師に与える影響	京都大学	黒田真由美
30-09.	基準的価値と人工物の選択・創出	メディア教育開発センター	黒須正明
30-10.	高校生の自己物語に見る意味形成 一学校教育におけるナラティヴ・アプローチー	湘南白百合学園	加藤美紀
30-11.	半構造化面接を用いた大学生の領域固有的無気力の検討	大正大学	長内優樹
30-12.	裁判員の「非専門家性」について:模擬評議とインタビューに基づ	いて名古屋大学	荒川 歩
30-13.	高齢期における発達のシンボルとしての植物の成長	名古屋大学	松本光太郎
30-14.	心理的援助過程の様々な意味ある学び	東京工業大学	保科公彦
30-15.	障害を持つ妹の主体性の発見 一姉による自己エスノグラフィの試み		原田満里子 能智正博
30-16.	生き方の中で意味づける障害 一壮年期に発症した脳血管障害者夫婦の語りから一	立命館大学	初鳥日美
30-17.	グループ回想法における高齢者の語りの質的検討(2)	大阪人間科学大学	野村信威
30-18.	質的研究におけるフェルトセンスの有効性 一ジェンドリンのTAE	日本女子体育大学	得丸智子
30-19.	語られない語りを考える一二次的外傷性ストレスの調査研究から一	中南大学	道免逸子
30-20.	新潟水俣病患者を支援し続ける人々の物語 一スライド・フィルムを使った「ナラティヴ生成」インタビューの	試みー新潟大学	坂井さゆり 酒井菜津子 宮坂道夫
30-21.	がん患者の事例における医療者一患者関係および今後の課題	明治薬科大学	小松楠緒子
30-22.	在宅ターミナルケアに取り組む看護婦のライフ・ストーリー 一心理的援助の実践と死生観	東京大学	向後裕美子
30-23.	離島地区に住む成人吃音者の語り	広島大学	川合紀宗
30-24.	ペット・ケアラーの動物看護師に対する支援役割認識	ヤマザキ動物看護短期大学 ヤマザキ動物看護短期大学	
30-25.	乳児の終末期医療を支えた当事者の、学びと変化に関する一考察 一医療従事者をエンパワメントする幼児教育の視点の付与一	関西福祉科学大学 大阪市立大学	
30-26.	妻の死の受け入れ 一配偶者との死別経験を有する男性の妻の死に関する語り—	京都大学	小林信一

上越教育大学大学院 松本健義

30-27. 大学院の研究プロジェクトにおける 関西大学 岸磨貴子 外部から入学した大学院生のアイデンティティ変容の軌道に関する研究 関西大学 盛岡 浩 関西大学 久保田賢一 30-28. 本邦研修における海外研修員の意識の変容に関する研究 関西大学 今野貴之 関西大学 岸磨貴子 関西大学 久保田賢一 30-29. 想起のプロセスにおける「言いっぱなし聞きっぱなし」の語りの検討 新潟大学 酒井菜津子 東京大学病院 坂上 香 新潟大学 坂井さゆり 新潟大学 宮坂道夫 30-30. ●未定● 筑波大学大学院 日本学術振興会特別研究員 徳外克幸 釜山大学 朴 東燮 30-31. 協力はなぜうまくいかないのか 筑波大学大学院 金 琦 Minnesota University Szatrowski Polly 30-32. Understanding School Curriculum in terms of Pusan National University Park, So Young Narrative Approach

SEIQoL-DW から捉えた個人の QoL(1) —個人の知覚を重視する QOL—

サトウタツヤ^{1.4}、西田美紀^{2.4}、^{3.4}福田茉莉、中島孝⁴、園田裕美⁴ (¹立命館大学文学部、²立命館大学大学院先端総合学術研究科、³岡山大学大学院社 会文化科学研究科、⁴国立病院機構新潟病院)

アイルランドの心理学者・0'Boyle らによる SEIQoL-DW (The Schedule for the Evarluation of Individual Quality of Life:個人の生活の質評価法の直接評価版)を、入院中のデュシャンヌ型筋ジストロフィー男性患者 6名(平均年齢 26.2歳)に対して行った。SEIQoL は、対話によって本人自らが自分の QOL を決定づけている生活領域の5つを明確化し、それらの領域の相対的な重み及びとその満足度を決定していくものである。最終的には、領域の重要度と満足度の積の総和が QOL 値となる。この方法を用いると、病気だから ADL が低下して QOL も低下するというような結果ではなく、また、病気かどうかにかかわらず、人が自身の生活をどのように捉えているのかを公共的な方法で示すことが可能になる。この報告では、入院患者 6名の結果を示すと共に、病気進行のために自分のやりたいことができなくなったと訴えるある人に対するインテンシヴな面接について紹介する。結果を数値で表すことの功罪や理論的展望、「病人」ではなく「人生 with 病い」ということについても考えてみたい。

SEIQoL-DW から捉えた個人の QoL(2) —成人筋ジストロフィー患者を対象とした継続的調査—

福田茉莉^{1·4}、サトウタツヤ^{2·4}、西田美紀^{3·4}、中島孝⁴、園田裕美⁴ (¹岡山大学大学院社会文化科学研究科、²立命館大学文学部、³立命館大学大学院先 端総合学術研究科、⁴国立病院機構新潟病院)

本調査では、病棟内で生活する成人女性筋ジストロフィー患者 5 名を対象に SEIQoL-DW を用いた QoL 調査を実施した。SEIQoL-DW は患者主体の QoL 調査法として、面接法を応用した QoL 調査法である。 SEIQoL-DW を用いた結果、「家族」・「趣味」・「人間関係」・「自治活動」などの項目が回答された。各調査協力者にとって QoL と関連する項目が異なるだけでなく、項目が一致する場合においてもその満足度や重要度には個人差がみられた。同病棟で生活し、同様の疾患を抱える患者であっても、個々に構成する Cue (QoL) は多様であった。さらに 1 ヶ月後、SEIQoL-DW を再度実施した。その結果、QoL に関連する項目の変容や数値の変化が見られた。Cue やその満足度・重要度の変容・変化プロセスには、出来事の発生による認識の変化や面接者との対話の中で QoL が構成され、変容する場合がみられた。SEIQoL-DW を継続的に調査することで、QoL を軸とした患者の生活や心理的な変化を捉える手段のひとつとなりえることが示唆された。

SEIQoL-DW から捉えた個人の QoL(3) 一筋ジストロフィー患者の生活の語り—

西田美紀 ^{1.4}、福田茉莉 ^{2.4}、サトウタツヤ ^{3.4}、中島孝 ⁴、園田裕美 ⁴ (¹立命館大学大学院先端総合学術研究科、²岡山大学大学院社会文化科学研究科、 ³立命館大学文学部、⁴国立病院機構新潟病院)

本研究は、入院中の筋ジストロフィー患者 3 名(男性・平均年齢 63 歳)に、半構造化面接からなる「個人の主観的評価法」SEIQoL-DW を行い、個々の QoL を明らかにし、対人援助における意義について検討することを目的とした。その結果、多様な個人の QoL とそのニーズが明らかになり、個人の QoL ニーズに対応していく援助が考えられた。しかし、この報告では、「身体」と「家族」という共通領域に焦点を当て、例えば「身体=できることを行いたい」といったニーズをケアにより満たしていくことの必要性と限界性についても触れ、できても・できなくても自己の存在価値は変わりないといった「無条件の肯定」の重要性について提示する。また、面接者との対話によって自らが QoL を構成し数値化していく SEIQoL-DW の方法により、潜在的な QOL は値や語りを通して顕在化される。この方法を継続的に用いる場合、ナラティヴ的な視点からどのような援助が可能になるか、留意点も踏まえながら考察していく。

支援技術開発における、技術者コンフリクト現象の状況論的アプローチ 一支援技術開発者とユーザーとの相互行為を中心に一

〇韓 星民・佐藤 貴宣 (立命館大学/KGS 株式会社・大阪大学人間科学研究科)

支援技術開発者はユニバーサルデザイン(UD)という設計思想の元に出来るだけ多くの人 (障害者)が使える製品設計を試みる。ところが、出来上った製品は現場に適合しなかったり、使いにくいものとなったりする。開発者は障害者のために作った製品が受け入れられない事にコンフリクト状態に陥る。筆者の一人である韓は支援技術開発にユーザーの立場として参加した経験から、支援技術開発における技術者のコンフリクト現象は、技術者とユーザーの相互行為により、相互理解につながるためのきっかけであると考える。UDの設計思想は誰もが使えるデザインとしてのプランであるが、支援技術を使用する障害者とそれを開発する技術者の間には異なった文化・世界があることから、ユーザーと技術者のインタラクションにより、参加型デザインに結びつくことを確認した。我々は本研究を通じ当事者の視点から支援技術開発におけるプランと状況的行為について考察を深めたい。

哲学の道における環境体験について

水月昭道、日高友郎、福田茉莉、サトウタツヤ

(立命館大学人間科学研究所,立命館大学文学研究科,岡山大学社会文化科学研究科,立命館大学文学部)

哲学の道は、生活路であるとともに観光路ともなっている特殊な様相を呈する道である。ここでは、生活者と観光客の双方によって、異なる質の環境体験が同じ道に対して繰り広げられている。つまり、一つの道に対して、二つの意味領域が浮かび上がっているといえる。本研究では、このことに注目し、生活者と観光客とが哲学の道をどのように使い分け、そこでの環境体験を具体的に展開しているかを、フィールドワークによって明らかにした。環境体験の質の差に注目した分析からは、以下のことが明らかになった。観光客は道のさまざまな場所において立ち止まり行動が観察された。その際、橋の欄干やベンチといった道に付随するオブジェクトとの相互交流が、詳しくない道における環境体験のあり方として数多く観察された。一方、住民は、自己表出ツールなどを利用した、多様な質の体験方法をすでに獲得しており、道に対するプライベート領域と公共領域の区別や、場所の占有と排他性といった現象なども観察された。

異文化体験と偏見:関わることの意味

石川清子 東京福祉大学大学院

本研究は異文化環境に対する日本人の行動パターンを異なる2つの環境より調査した。大学生14名を対象に実験的異文化環境内における人の行動変化を自己評価による心理検査状態と行動観察により、またファミレスでパーティーといった異文化環境における行動変容を観察及び個々個人とのに対話により、心理的な影響を分析した。本結果によると、一般的に自分がマイノリティになる事が少ない日本人にとっては、異文化環境に慣れることは非常に辛い経験である事が分かった。しかし、簡単な挨拶などポジティブな経験は異文化に対する印象を良くする反面、ネガティブな体験をしたとしてもその後の関わりをいかに持つかにより、異文化に対するイメージは1回目よりは2回目、また、2回目よりは3回目と良くなって行く傾向が見られた。従って、偏見の心理は、人々の関わりの偏りが問題のであると思われる。その意味でも、他者に対する関心を持つ事の重要性を軽視は出来ない。文献

- 1. Carpenter, S. and Zarate, M.A. (2007) Cultural Pluralism and Prejudice Reduction. *Cultural Diversity & Ethnic Minority Psychology*, Vol. 13(2), 83-92.
- 2. Daniels, W.W. (1968) *Racial discrimination in England.* Harmondsworth: Penguin.
- 3. Esmail, A. and Everington, S. (1993) Racial discrimination against doctors from ethnic minorities. *British Medical Journal*, 306, 691-692.
- 4. Kawakami, K. et.al. (2007) (Close) distance Makes the Heart Grow Founder: Improving Implicit Racial at Interracial Interactions through Approach Behaviors, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 92(6), 957-970.
- 5. 大里栄子 (2005) 「対人コミュニケーションと個人空間」福岡国際大学紀要、no.13, 21-27.
- 6. Turner, M.A. et. Al., (1991) Opportunities Denied, Opportunities Diminishes: Discrimination in hiring. Washington, D.C.: The Urban Institute.
- 7. 山口創・石川利江 (1997) 「対人不安者の着席行動と印象形成」 性格心理学研

究、第5巻1号、15·26.8. 斎藤 勇 編 (2000) 「人間関係の心理学」誠信書房

電話オペレーターの対人技術 —受注とクレームに対応するスキルの選択的運用—

〇入内島菜月 (岡山大学大学院社会文化科学研究科) 田中共子 (岡山大学文学部)

通信販売において電話オペレーターは、受注・クレームを含む問い合わせ対応など接客業務と、受けた電話に対する適切な処理を行う事務的な業務の一部を担う。特にクレーム対応は心理的負担が大きいと考えられる。電話オペレーターの対人技術がどのようなものかを、半構造化面接とグラウンデッド・セオリー・アプローチによって検討する。業務に伴うストレスの緩和方法は、「自己調整スキル」として抽出される。また、接客業務全般のスキルには、客の心情に寄り添った「情緒焦点型スキル」と、手続きを円滑に進めるための「機能焦点型スキル」が存在する。スキルの選択は、オペレーター個人によって異なり、オペレーターの経験や仕事に対する信念と対応したものが用いられていく。新人時代のスキルが希薄な段階から、熟達していく過程でどのようにスキルを選択し運用できるようになっていくかを中心に考察する。

引用文献

石井浩二. 斉藤政彦. (2008). 産業現場におけるストレスに対するセルフケア―産業医による取り組み実態のアンケート調査結果―産業衛生学雑誌, 50, 4-10

戈木クレイグヒル滋子. (2005). 質的研究法ゼミナール─グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ ─. 医学書院

戈木クレイグヒル滋子. (2006). グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生みだすまで. 新曜社

化粧による他者との関係性の調整の検討木戸彩恵(京都大学教育学研究科)

身体の中でも、特に、顔はセルフ・イメージに大きな役割を果たしており、化粧は容貌印象管理の一環として女性によって日常的行われる行為である。化粧とは、顔を中心とする身体に意図的な加工(肌の手入れ、顔面の色・質感・形の変形)を施し、その容貌に変化をもたらす行為である。化粧をする際に行為者にとって宛先なる他者及び場所の構造を、「装う自己」「見られる自己」という 2 軸からモデル化することを目的とし、美容職従事者 4 名を対象にインタビュー調査をおこなった。化粧をする際に、行為者は過去経験において過去の<私>が対峙した他者―時間的・文化的外在性と独自性を持つ他者―と対話させながら、他者に向かう自分をつくりあげていること。また、現在の自己を創る行為ではなく、未来の<私>をつくりあげることが明らかになった。

知恵に関する超越論的視点からの研究

小島 康次 (北海学園大学)

知恵(Wisdom)は単なる知識とは違って、人がいかに人生をより善く生きるかという問題、したがって心理学においては、生涯発達(life-span development)の問題と深くかかわる視点である。知恵に関する外示理論的研究(Baltes & Staudinger)は、個人の認知の獲得と表明が他者の認知に影響し、かつ影響されることを示す。すなわち、社会的な関係なしでは人は成長することができず、また、それぞれの分離なしでは人々は関係することができないのである(Ackermann 1996)。知恵には、社会的な相互作用が必須であり、同時に子どもが一人で過ごす時間や、自分自身に話しかけ、言葉で遊び、繰り返しや言語ゲームによって内面化の過程を支えることも必須である。Baltes & Staudinger(1996)は、知恵を「人生の根本にかかわる実用論についての専門的知識」と定式化して、二つの専門的知識と「超越論的自己」を含む三つのメタ知識からなる5つの基準を提案した。これらの基準について概念的な妥当性を吟味し報告する。

Baltes, P. B., and Staudinger, U. M., 1996: "Interactive minds in a life-span perspective: prologue." In P. B. Baltes and U. M. Staudinger (eds), *Interactive minds: life-span perspectives on the social foundation of cognition*, 1-32. Cambridge: Cambridge University Press.

保育者の語りにみる実践知 - 「片付け場面」の映像に対する語りの内容分析—

砂上史子(千葉大学)·秋田喜代美(東京大学) 増田時枝(聖心女子専門学校)·箕輪潤子(川村学園女子大学) 中坪史典(広島大学)安見克夫(東京成徳大学短期大学)

保育者の行動は状況に応じた即興的思考と行動によるものであり、具体的な行動のなかに<u>実践知としての専門性</u>が埋め込まれている。しかし、実践知が保育者自身によって対象化され、反省的に言語化されることは少ない。とりわけ特定の場面に関する保育者の実践知の研究はほとんどみられない。保育の「片付け場面」は、片付けさせたい保育者の意図ともっと遊びたい子どもの感情との葛藤が生じる場面であるが、それは、子ども自身の主体的な行動として片付けを展開しようとする保育者の実践知が発揮される場面でもある。本研究では、「片付け場面」の映像に対する保育者の語りを分析し、その内容から保育者の実践知を構成する視点を見出すことを目的とする。調査は文部科学省が作成した教員研修用ビデオを用い、グループで討議してもらうという手順で実施した。その結果、片付け場面での保育者の行動は、「言葉かけ」「動き」「子ども理解」「保育者同士の連携」「保育のスケジュール」等の多様な視点からその意味と適切さが判断され、実践されていることが明らかとなった。

プログラム参加者に対する「地球温暖化に関する意識と行動」 についてのアンケート調査の質的分析

高橋直 松本安生 (武蔵工業大環境情報学研究科) (神奈川大学)

温暖化対策においては、大量の資源やエネルギーを消費する社会経済構造を変革していくことが重要であり、このためには、国や自治体のみならず市民・事業者を含めたすべての主体がその施策にたいして積極的な連携を行うことが求められている。

本研究では、温暖化問題に関する一般市民への普及啓発を目的とした参加・体験型コミュニケーションの効果と課題を明らかにするため、東京都港区の「ストップおんだん館」*1)でのワークショップ型プログラムを事例として取り上げる。そして、このプログラムの参加者にたいして行った「地球温暖化に関する意識と行動」についての調査において、①約2週間前の郵送による事前アンケート調査と、②約1ヶ月後の郵送による事後アンケート調査の自由回答部分を質的に分析することで、参加型コミュニケーションが及ぼす影響を検討した。

*1)ストップおんだん館とは、全国地球温暖化防止活動推進センター(JCCA)が運営を行う、温暖化に関する環境学習施設である。

民俗芸能の師匠に対する ナラティヴ・アプローチを用いた伝承の分析 ―無形文化財保護に向けて―

竹内一真(京都大学教育学研究科) 渡部信一(東北大学教育情報学研究部)

近年、無形文化財保護の文脈において、伝承者の視点を取り入れた生成的な伝承観に基づく文化財保護が求められている(俵木、2006:吉田、2005)が、これまでの伝承では超世代的に「変化しないもの」に焦点が当たっていた(俵木、1997)ため、生成的な伝承観をどう評価すればよいのか十分に研究されていない(俵木、2006)。本研究では、世代間の関係の中に埋め込まれたものとして「個」を捉える心理学的な立場(Yamada&Kato,2006他)に依拠し、フィールドワークよって、伝承者が後続者に「何を伝えているのか」ということに加え、伝えている伝承を「どのように受け継いできたのか」ということに関するデータを収集する。そして、伝承者が伝えている伝承を世代間の関係の中でどのように位置づけているかを分析し、伝統を生成してきた過程を明らかにする。このように伝承者の世代間の関係性に焦点を当てることで生成的な伝承観を提示し、無形文化財保護への新たな視座を提供するものである。

引用文献:

- 俵木悟 (1997) 「民俗芸能の実践と文化財保護政策—備中神楽の事例から—」『民俗芸能研究』25, pp.42-63
- 俵木悟(2006)「民俗芸能の変化についての一考察」東京文化財研究所編『民俗芸能の上演目的や上演場所に関する調査研究報告書』pp.15-33
- 吉田憲司(2005)「有形・無形文化遺産とミュージアム―ユネスコにおける無形文化遺産保護条約採択を機に―」『民博通信』108, pp.2-3
- Yamada, Yoko. & Kato, Yoshinobu. (2006) "Images of Circular Time and Spiral Repetition: The Generative Life Cycle Model." *Culture & Psychology*, 12(2), pp.143-160

「声を出すこと」の合意を通した学級への参加に関する一考察 ―ディレンマを被る観察者のポジションから―

平野拓朗 (京都大学大学院)

本発表は、学級に参加するプロセスについて、フィールドワークでの事例から考察しようとするものである。対象となる学級は、関西にある北中学校(仮名)の三年□組である。当該学級においては、教師と生徒たちとの間に「声を出すこと」が約束され、価値づけられている。それは、チャイムの鳴る二分前に着席する二分前着席の(生徒たち同士の)呼びかけ、授業で挙手した回数がポイントとなる挙手・ポイント制などにおいて制度化されている。

発表では、学級で「声を出すこと」の関係に参加できていない筋ジストロフィーの三木くん(仮名)に、教師、生徒たちがどのような働きかけをしているのかに注目する。そこから、当該学級において「声を出すこと」が参加の鍵として位置づけられるプロセスとそれの担う意味について考える。また、事例を記述・分析する契機として、観察者である私が、被るディレンマから問いを立てるという方法を試みる。それは、一方で、学級における「声を出すこと」の問題を意識しながらも、他方で、その問題に関わり、関与することで三木くんを孤立させている私の二重性を認識することで、当該学級へ参加することの複雑性を捉えることが期待されるからである。

アイデンティティの変容と職業意識との関連性 一成人前期にある看護師のライフストーリーをもとに一

溝部 佳代

(北海道大学大学院保健科学研究院)

本研究の目的は、青年期に遭遇した心理的危機と看護師としての職業意識との連関について語った看護師Aさんの事例をもとに、成人期におけるアイデンティティと職業意識との関係性について検討することである。方法は、看護師になってから現在に至るまでのライフストーリーを語ってもらい、それを逐語録とし、研究者2名がデータを繰り返し読み込み、ライフストーリーを再構成した。面接時間は60分で、プロトコールデータ134個をトピックによって分類し、〈アイデンティティの芽生え〉2個、〈ネガティブな出来事の発生とアイデンティティ形成過程の揺らぎ〉47個、〈アイデンティティ形成と成人期の発達課題の達成〉53個による三つの枠組みを用いてライフストーリーを再構成した。ポスター発表ではさらに、職業意識や生涯発達に及ぼす社会文化的影響を組み込み、看護師のキャリア発達におけるダイナミクスを表す循環型モデルを提示する。

知的障害者の就労に関する雇用者の問題意識の構造

石山 貴章 (九州ルーテル学院大学)

障害者雇用の問題を検討していくためには、実際の現場で起こっている現象を捉えていくことが不可欠であり、障害者本人はもとより、それを取り巻く人的・物的・社会的な環境要因にも着目していく必要性がある。

本研究では、障害者を雇用している現場における人間の内面世界を浮上させていくために、「雇用者側の問題意識」の深部に入り込み、障害者雇用問題で見落とされがちであった現場で生じている人と人との相互作用を捉え、障害者就労の問題に、新たな知見や解釈を提示していくことを目的としている。

よって、障害者雇用現場の実践を理論化するための現実的可能性を追究し、雇用者側からの視点で捉えた障害者就労に対する「積極的意味」や「問題意識」の動きを捉えていくために、長期にわたるフィールドワークを実施し、そこで得られたデータと雇用者に対する半構造化インタビューを基にして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いた分析を試みた。

その結果、障害者雇用現場における問題意識の構造として、最終的に【挑戦】【バックアップ】【軋轢・葛藤】【日常的相互作用】【ヒューマニズム】という5つのカテゴリーが浮上した。今後も、継続した現場主体型の障害者雇用問題の掘り起こしや研究結果を現場に戻しての検証と理論の構築、障害者雇用を全く行っていない事業所や学校教員および障害者本人、家族に対する調査を実施し、本研究結果を精緻化していく必要性があると考えている。

小児医療における「がんばれ」という言葉のもつ多義性

大西 薫 (奈良女子大学大学院 人間文化研究科)

日本文化の中で「がんばる」という言葉は、スポーツや学習場面、職場、家庭など生活の様々な場面で用いられている日常語である。「がんばれ」「がんばります」「がんばろう」と、他者への声援や励ましだけではなく、自分に対する決意や奮起させる形で用いられる。しかし、北山(1992)が指摘するように、ほんの一瞬だけ適当にがんばればよい挨拶代わりの「がんばれ」が連なって過剰な声援と期待となり、心身に過酷な無理を強いることは臨床の内外を問わずに生起しやすい。

大人でも耐えられないほど痛いといわれる検査で、しかも治療上、決して避けることができないような検査の過程で、「がんばれ」という言葉はどのように用いられているのか。「がんばれ」の意味を分析することで、「がんばれ」の背後にある援助者の意図や思い、願いを明らかにするとともに、「がんばれ」と発せられた子どもは、その言葉をどのように受け止め、振る舞っているのか。さらに、子ども自身は、その言葉をどのように用いているかを示すことで、治療を受けること、小児医療の一端を明らかにしたい。

引用文献

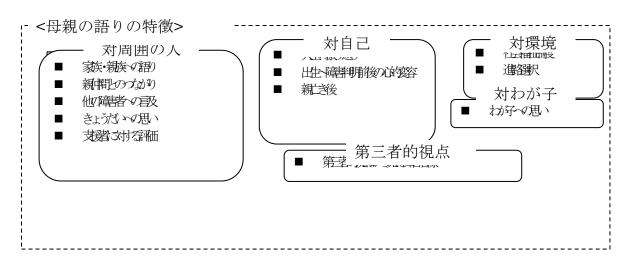
北山 修. (1992). 頑張る. 北山 修 (編), 総特集=ことばの心理学—日常臨床辞典 (pp. 116-117). 東京:青土社.

成人知的障害者家族の語りの分析

坂本麻美 (大阪市立北巽小学校)

障害者の地域社会での共生が目指され、学校教育では障害の有無に関わらず子ども一人一人の特別なニーズに応じた教育援助が求められている。しかし、福祉や教育の理念及び施策が変化しても、障害者と家族が障害と共に生きていくことに変わりはない。そこで本研究では、障害者家族が障害と共に生きていくことの意味をどう意味づけるのか、ライフストーリー研究(やまだ、2000)を用いて明らかにすることを目的とした。

本研究は、9名の成人重度知的障害者の母親(50歳代~70歳代)にインタビューを実施し、障害のある子どもが生まれ現在までにどのような出来事があり、どのような思いを抱いてきたかを尋ねた。分析では、まず、K J 法を用いて代表的な母親一名の語りを分析し、ある程度の一般性の中で母親の語りの特徴を見出した。次に、二人目以降を具体的なデータに依拠したまま、K J 法結果の修正を試み、そこから一般性を取り出すことを目指した。その結果、母親の語りの特徴として 12個のカテゴリーとそれを包括する5つのまとまりを見出した。母親の語りは過去(出生から障害判明前後)、現在(就労)、未来(親亡き後)の三つのかたまりで人生が彩られ、語られる傾向にあった。学齢期に関する語りは簡潔な表現が多く、また、各ライフイベントにおける語りの多くは否定的感情と肯定的感情が混同した、一義的でないものであった。



〈引用文献〉

やまだようこ編著 『人生を物語る-生成のライフストーリー』 2000 ミネルヴァ書房

性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた 母親の心理過程:

子についての物語化希求過程と構成された親物語の分析から

莊島 幸子(京都大学大学院 教育学研究科)

問題/目的/方法 本研究は、身体に対する強烈な違和感から、身体的性別を変更することを望むトランスジェンダー(transgender, TG)と呼ばれる性的少数者の子をもつ母親が、性的少数者である我が子からカミングアウトを受け、子の独特な発達的問題(Strommen, 1989)に直面した際の語り直しに関する事例研究である。子である当事者にとって最も身近で重要な他者とは、第1に家族であり、カミングアウトに対する家族の反応は当事者の最大の関心事とされる。一方、カミングアウトは当事者だけでなく家族にとっても大きな出来事である。TG 当事者が自己について語り始めた現代において

は、当事者からカミングアウトを受けた家族が、子の新たなセクシュアリティやジェンダーアイデン ティティ、そして身体を追求していく生き様にいかに関わっていくのかという問題は、一層深刻さを 増している。そこで、本研究は、子からカミングアウトを受けて2年が経過した第1回インタビュー 時に、「我が子を簡単には受け入れることができない」と語っていた母親1名に、縦断的にインタビュ ーを行った(荘島, 2008)。子からカミングアウトを受け、これまで母親として子とともに歩んできた という親の物語の崩壊に見舞われた母親が、子及び親自身についての物語化のなかで、いかに他者に 向けて語るのかという問いを扱う本研究は、受け入れ難い出来事を体験した親の心理過程を、段階的、 一方向的、適応的に描く傾向にある従来の研究に対し、そのような常識的なモデルに基づくのではな く, 母親の語りをつぶさに検討することで, 家族-当事者が生み出す現実に迫ろうとするものである。 研究参加者は女性から男性への性別移行を望む TG 当事者(以下, A)をもつ母親1名である(以下, \mathbf{M})。 \mathbf{M} はインタビュー当時, 55 歳であった。 \mathbf{M} へのインタビューは, 約 1 年半の間に 3 回行われた。 結果/考察/展望 分析では,①A-M の母子関係の変化,②M の心理過程-物語化希求過程と親 物語の構成の分析から-, ③語りの結びつきについて検討した(それぞれの詳細な結果については、 割愛する)。M の事例から、自らの過去、特に A の子育てに関するエピソードを語り直す過程が見出 されたが、この語り直しは同時に、親である自分を問い直しながら親物語を構成していく過程と連関 していることが明らかになった。ここから、子が TG 当事者であることを受け入れようとする母親の 心理過程では、性別移行していく我が子だけではなく、親自身が子と共に歩んだ物語を辿りながら、 過去及び現実を捉え返していく必要性が浮かび上がった。今後は、当事者だけではなく、家族をも視 野に入れた支援を模索するためにも、個々の事例への深い理解とともに、事例の詳細な縦断的分析を

引用文献

積み重ねていきたい。

Strommen, E. F. (1989). "You're a what?": Family member reactions to the disclosure of homosexuality. Journal of Homosexuality, 26, 41-56.

荘島幸子. (2008). トランスジェンダーを生きる当事者と家族: 人生イベントの羅生門的語り. 質的心理学研究, 7, 204-224.

喪失からの学び―不妊治療を断念した女性のく生>の変化

竹家 一美 (京都大学大学院教育学研究科)

母になる人生を思い描いていた女性にとって、不妊は喪失と捉えられる。竹家(2008)は、子を得られずに不妊治療を断念した女性 9 名の語りを分析し、不妊経験の過程で喪失感を深める当事者のポジティヴな変化の側面を見出した。だが、誰もがポジティヴな変化を語るわけではない。「未来が見えない」と物語を停滞させる人もいる。本研究では、喪失感を募らせる不妊女性の負の語りを分析し、彼女の<生>の変化の可能性を検討した。KJ 法による分析は、彼女の不妊経験の意味づけの二元化を明示した。すなわち、終始一貫主体的に選択した不妊治療は肯定的に、それでも克服できなかった不妊自体は否定的に意味づけられていたのである。では、彼女の負の物語は変化しないのだろうか。KJ 法は、仮定法による現実変換の可能性を示唆した。過去の語り直しは現実を変換させ、過去の事実の納得に繋がる。仮定法には時間軸の過去から未来への転換という役割がある(やまだ,2007)からだ。本研究は、負の物語に潜む意味転換力を示した。どんな物語にもこの潜在力があるからこそ、物語は必要とされ<生>は変化しうるのだと思われる。

[引用文献]

竹家一美. (2008). 不妊治療を経験した女性たちの語り—「子どもを持たない人生」という選択. 質的心理学研究, 7,118-137.

やまだようこ. (2007). 喪失の語り 生成のライフストーリー. 東京:新曜社.

家族の自死をめぐるやりとりの諸相

橋本 望

(東京大学大学院教育学研究科)

近年、日本では3万人を超える人が自ら命を絶つという状況が続き、社会的な問題として対策を講じようとの動きが広がっている。その対策の一つには、遺された側への支援が含まれている。つまり、「家族の自死を"語れなかった"遺族が"語れる"ように」(清水ら,2002)遺族会を中心とした支援の拡大が目指され、実際に広がりつつある。

では、遺族にとって家族の自死を「語る」とはどのようなことなのだろうか。遺族に対する支援がさらに質のよいものとなっていくために、家族の自死を語ることについて改めて検討することには意義があると思われる。本研究では、「家族の自死を『語る』とはどういうことなのか」を検討するために、4人の方にインタビューを行い、家族の自死をめぐる他者とのやりとりを幅広く検討することを試みた。本発表で現段階での分析結果に対し、幅広くご意見をいただきたいと考えている。

社会福祉援助の「成果と実施過程」に対する 「質的評価」の意義と課題:重度知的障害者の地域生活を支援 するためのアクションリサーチから

古井克憲

(日本学術振興会特別研究員 P D · 大阪府立大学)

質的評価とは、実践の改善過程や結果を、質的データの収集・分析によって検証し、その成果の是非について判断することと考えられる。

報告者は、重度知的障害者の生活場面への参加促進を目的としたアクションリサーチで参与観察記録と支援職員による自由記述を分析し、その支援の成果と実施過程に対する質的評価を行った。その結果、実施過程で職員は、障害者のスキル獲得を量的に評価するのではなく、ステップ方式をとらず障害者が生活実感を持つことを自らの支援に対する「評価基準」としていた。さらに、この「評価基準」に即し支援を検証すると、障害者の参加意欲が高まった、成功経験が増えたといった成果が明らかになった。

以上から報告者は、社会福祉援助での質的評価は、実践への「偏重」という課題が残されるものの、実践で潜在化された「評価基準」を浮き彫りにすることによって、当事者が求める視点に近づき実践を評価できる点、それにより研究と実践との乖離を埋めていく点で意義があると考える。

障害者は高等教育をどのように経験しているか: 「障害」のダイナミズム

松原崇・大阪大学障害学生支援室 佐藤貴宣・大阪大学大学院人間科学研究科 青木千帆子・大阪大学大学院人間科学研究科

近年、高等教育への障害者のインクルージョンに注目が集まりつつある。しかし、 先行研究は障害学生に対する支援のあり方に議論を集中しており、障害学生の高等教 育の経験の詳細は明らかにされていない。そのため、本研究では、大学で学ぶ 10 名 の障害学生へのインタビュー、および、障害学生の支援現場での参与観察に基づき、 彼(女)ら自身の観点に沿って障害学生の高等教育の経験を明らかにすることを目指 した。その結果、障害学生は、高等教育の様々な局面で生じる物理的・制度的な障壁 や周囲からの意味の押し付けに対し、多様な言説戦略を駆使して「障害」の意味を主 体的に構成することにより、自身の学びや学生生活を組織化していることが分かった。 こうした本研究の成果は、個別具体的な文脈における周囲との交渉のなかで動的に構 成されるものとして「障害」を理解する可能性を開くものである。

退院後の統合失調症をもつ人の内的・外的資源の獲得過程 一健康生成論を用いた闘病記の分析

山口 知代 (大阪府立大学看護学部)

統合失調症をもつ人にとって、退院後は数々の生活のしづらさが大きな課題となる。そこで、当事者が辿る回復過程において、当事者が内包している強みを見出したり、社会的資源を得ていく過程に注目した。調査対象となる人がもつ、対人関係の病いという疾患の特性や、調査者が医療従事者というバイアスがかかると得られにくい語りがあることを鑑み、今回の調査では、当事者によって不特定多数に向け発信された闘病記を用いて分析し、内的・外的資源の獲得過程を明らかにした。この際、イスラエルの医療社会学者Antonovskyが提唱した健康生成論ー健康は単に病気でないということではなく、健康ー健康破綻の連続体上のどこに位置する人でも、健康の極側に向かっていけるという理論ーにもとづいて分析を行ったので、報告する。

【引用文献】Antonovsky A, 山崎喜比古 監訳(2001):健康の謎を解くーストレス対処と健康保持のメカニズム, 有信堂

地域の米作りに参加することの意味~幼稚園児の活動から~

西方 浩一(文京学院大学 保健医療技術学部) 中山智晴(文京学院大学 人間学部)

我々日本人は、古くから農村環境の中で伝統的な生活や文化を継承してきた.しかし、都市化の進行とともに農村環境は劣化し、休耕田が多く見受けられる都市型自然環境に変貌している.この状況が進行すれば、現代世代、将来世代の暮らしに大きな影響を与えることが推測できる.

当大学近郊のF市においても上述のような状況が見られている。当大学では地域住民と協働のもと休耕田の冬期湛水、有機栽培の米作りによる生物多様性の再生活動を実施している。住民が自分たちの住んでいる地域で、"人、自然"が織り成す「共生の連鎖」の一部になることを目的に、誰もが共に自然と触れ合い、人と交わり、交流を広げることのできる「体験・共生型プロジェクト」を展開し、現在、大学生、幼稚園児、地域住民、高齢者、障害者などが協働で関与している。

今回は、幼稚園児に焦点をおき「体験・共生型プロジェクト」に参加することは、幼稚園児や園活動において、どのような経験や意味をもつのか、また今後、学びや交流の視点を持ちながら実施するにはどのように展開することが望ましいのかの示唆を得る目的で幼稚園教員へのインタビューを実施し、質的に分析・検討をしたので報告する.

相互行為による学びの共構築 ―日本語の教室におけるレポート作成活動の分析から―

古屋憲章(㈱早稲田総研インターナショナル)、古賀和恵(早稲田大学)

発表者らは、日本語学習者が話し合いながら各々のレポートを作成していく実践を行っている。本 実践では教室でのやり取りがクラス活動の中心となる。しかし、レポートは形として残るものの話し 合いの過程は残らないため、学習者は自己の変化・向上を認識しにくい。そこで発表者らは、学習過程を話し合い、記述する「振り返り」活動を段階的に行った。

本発表では、「振り返り」活動において個々の経験を共有する過程の分析により、学習者が学びを共構築していく様を提示し、教室コミュニティにおいて学びを共有する意義を考える。分析には大谷尚(2007)の SCAT の手法を援用した。SCAT による談話分析の試みも併せて提示する。 参考文献

大谷尚(2008)「4 ステップコーディングによる質的データ分析方法 SCAT の提案―着手しやすく小規模 データにも適用可能な理論化の手続き―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第 54 巻第 2 号、pp. 27-44

質的分析から試みる大学院学外入学者を対象とした大学院研究プロジェクトへの参加と活動に関する研究

盛岡 浩 (関大大学大学院) 岸 磨貴子 (関大大学大学院) 久保田 賢一 (関西大学)

大学院教育を組織的・体系的な教育的取組に対して積極的な支援をしようと、文部科学省は、魅力ある大学院教育や大学院教育改革支援プログラムといった公募を実施してきている。しかしながら、組織的な教育改革といった重要性を認識しつつも、単にカリキュラムを体系的に改善するだけでは十分とは言えない。なぜなら、大学院教育では、カリキュラムという明示的な体系ではなく、ゼミや大学院での共同研究といった、教員と学生が一緒になり研究に取り組む中での学習が重要な役割を果たすからである(久保田ら,2007)。そのうえ、院生が、大学院への入学する目的は様々であり、学内からの進学ばかりではなく、学外からの入学する学生など、異なった文化的背景のもっと学生が大学院研究室に属することになる。そのような背景の基、著者らの研究グループは、高等教育における実践共同体の研究を行い、大学院生7名からインタビュー調査を実施した。本研究では、インフォーマント7名のうちの学外からの入学した大学院生3名を焦点にあて、大学院における実践共同体という研究プロジェクトに、どのように参加し活動したのか、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行い、結果を考察する。

参考文献

上野直樹・ソーヤーりえこ編著 (2006) 文化と状況的学習-実践, 言語, 人工物へアクセスのデザイン-. にほんごの凡人社. 東京

久保田賢一・岸磨貴子・今野貴之・盛岡 浩 (2007) 高等教育における実践コミュニティの醸成. 日本教育工学会第 23 回全国大会, pp. 507-508

久保田賢一・山本良太・岩崎千晶・鍛治大佑(2007)質的データ分析におけるソフトウェアの利用ー

MAX QDA 2007 を活用した分析事例 -. 日本教育メディア学会第 14 回年次大会, pp. 18-19 盛岡浩・岸磨貴子・久保田賢一他 (2008) 大学院研究プロジェクトにおける正統的周辺参加--グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) の手法を用いて. 日本教育工学会研究報告集 Vo108. No. 2, pp. 7-14.

福祉ものづくりのサービスラーニングにおける教育効果の検討

市山 雅美 二見 尚之 (湘南工科大学)

サービスラーニングは、社会貢献活動と学校・大学での学習を関連付けた教育方法である。本発表では、湘南工科大学の授業科目「社会貢献活動」で実施されている、「福祉ものづくり」等のサービスラーニングプログラムにおいて、どういった実習体験がどのような成長を学生にもたらすかといった、教育効果の分析を行なうとともに、その方法の検討を行う。

「社会貢献活動」では活動終了時にアンケートを行なっている。それは「あなたの選んだ実習は、どのような点で社会に貢献しましたか」等の項目について記入を行う自己評価であり、「ふりかえり」の活動とも言える。このアンケートの記述から、「社会貢献活動」の目標がどの程度達成できたと感じているかといった、目標に対する意識について検討を行う。そして、学生自身が目標としていたものと、大学側が考えている目標との関連を検討する。加えて、活動開始時、中間期のレポートの内容と比較し、学生の意識の変化の考察を行う。

「犯罪によって子どもを喪った母親の経験とその意味づけー手 記を書くという作業に見て取れるもの一」(第2報)

河原智江 (公立大学法人横浜市立大学医学部看護学科) 西村ユミ (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

目的:

犯罪によって突然子どもを喪った母親が手記を書く作業の中で、事件や子どもとの経験をどのように意味づけているのか、また母親にとって、手記を書くこと自体がいかなる意味をもつのかを明らかにする。

方法:

第1報に引き続き、対象者が犯罪被害という特別な状況にある当事者ということを踏まえ、研究の 実現可能性と倫理的配慮という観点から、子どもを犯罪によって喪った山下京子氏によって編まれた 手記を資料とした。手記をまとめていく作業を通じて、当事者の経験の意味づけやとらえ方がどのよ うに変化しているのかを解釈した。

結果:

山下氏にとって犯罪で子どもを喪った経験は、子どもがいなくなることのみでなく、自分自身の存在を見失うことであった。手記を綴ることにより、子どもの生と共に暮らした生活を意味づけ、ふだんは意識していないことを意識化することで、子どもの存在によって自分が成り立っていることや生きる意味を捉え直していた。

<引用文献>

山下京子:彩花へ 「生きる力」をありがとう,河出書房新社,1998

看護師として働き続ける中で経験すること 一選択・決断という契機に注目して一

村上優子 (国立国際医療センター)

【目的】離職率の高さが問題にされる一方で、多くの看護師たちは、多様なライフコースを経ながら働き続けている。彼らと話す中で、何が働き続ける原動力となっているのか、働き続けることや働き方をどのように選んだり、決めたりしているのか等々に疑問をもった。本研究では、看護師たちが働き続けることを選択、決断する契機をいかに経験しているのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】研究協力の了解が得られた看護師 3 名を対象とし、個別インタビュー法により経験を聴き取った。

【結果・考察】働き続ける中で看護師たちは、多様な選択や決断を経験していた。それらの契機は、幾つもの出来事が積み重なった状況によって作られていた。数多くの似ている場面や同じような体験であったとしても、それはあくまでも似ているだけであり、どれひとつとっても異なるものである(尾崎,2002,p.82)といわれるように、そこに至る文脈によって、契機になったりならなかったりしていた。さらに、経験の積み重ねの中で新たな自分の関心を発見し、それが次の契機を生み出すこともあった。そして、これらは幾度も経験されていた。

尾崎新(2002):「現場」のちから 社会福祉実践における現場とは何か、誠信書房.

29-31 Park Ji Yeon さん

Title:

A study on interaction between a teacher and students in the online learning community: focusing on the 6th grade of elementary school

Eun Jeong, Han

(Graduate Student, Pusan National University)

The internet's rapid growth and diffusion makes it possible interaction between the teacher and students in the online learning community without time and space limitation. Considering this change, this study will deal with interaction between the teacher and students in the online learning community, which allows the teacher and students to communicate with each other.

It is attempted in this study to investigate the interaction between the teacher and students in the online learning community, and identify its meaning that they have thought about it. This is to clarify what could be identified as the important implications for educational research.

In particular, 'blog' which was managed in the class is important data to identify the online learning community' meaning that the teacher and students thought.

For this study, observation will be conducted, focusing on the 6th grade of elementary school in Busan for 8 months. Results from observing 'blog' of the online learning community will be analyzed as four factors—1) lived time, 2) lived space, 3) lived body, and 4) lived relationship.

初めての子どもをもつ両親の 育児の意味づけの変化

名 前 田中 恵子

(所 属) 大阪大学大学院医学系研究科 奈良女子大学大学院人間文化研究科

初めての子どもをもつ両親が育児をどのように捉え、意味づけているのかを出産後早期(出産後3~4日目)と6か月の語りを通して明らかにする。対象は両親10組であり、出産後早期は病院内個室で、6か月は家庭訪問により半構造化面接を母親と父親別々に行った。逐語録の精読後、子育ての意味づけに関する語りを社会・子ども・自己の3つに分類し、質的に分析を行った。

その結果、母親は出産後早期の授乳をする楽しさから、6か月時には子どもの成長発達がわかる楽しさへと子どもとの関係における「楽しみ」が変化し、子どもの顔を見ているだけで癒されるという「心のやすらぎ」としての意味づけもみられた。父親は社会との関係における「親としての責任」「家族扶養性」「世代継承性」や子どもとの関係における育児の意味づけの語りが増えていた。

育児の意味づけの特徴は、今後の両親への育児支援を推進していく上で手がかりとなることが示唆 された。

大学生のもつ算数・数学の学力観及び学習観に関するインタビュー調査

中村 恵子 (新潟青陵大学)

2003 年の PISA 調査及び TIMSS 調査の国際学力検査の結果、日本の算数・数学の平均得点は、前回と比べ有意に低下した。「数学の勉強は楽しい」や「数学の勉強への積極性」の項目では高いレベルの割合が少なく、学ぶ意欲が国際的に下位にあることは問題である。また、2007 年の全国学力検査の算数・数学の結果によれば、「知識」を問う問題の平均正答率に対し、知識の「活用」を問う問題の平均正答率は 10~20 ポイント低かった。算数・数学における学ぶ意欲や考える力を培うための算数・数学科の授業の在り方が問われる。本研究は、大学生を対象にして、どのような学力観・学習観をもち、どのような算数・数学科の授業を受けてきたのか、半構造化面接による調査を行うものである。小・中・高等学校における算数・数学の学力観・学習観の変化や学力観に影響を与える要因について明らかにし、算数・数学科の授業の在り方について考察する。

動物園における解説員は 「来園者とのやりとり」をどのようにとらえているか

並木 美砂子 (千葉市動物公園)

1. 解説員の業務

博物館には、規模の違いはあるものの、展示解説の業務を担う人々が少しずつ増えているが、日本の動物園や水族館には、展示動物を来園(館)者に紹介し、その魅力を伝え、いっしょに自然のしくみや生き物の生活につちえ考えてもらう解説者はまだ少ない。職業としてこの業務を担当するのは、多くの場合飼育担当者や獣医師である。そのような中で、目の前の生きている展示動物とどう関わりをもち、その経験が、野生動物の世界や自然の保全について深く考えることとどう結びつくのか、それを模索しながら活動する専門の「動物解説員」は、数少ないとはいえ、これからの「動物園における解説者」のあり方を考える上でひとつのモデルを提供すると筆者は考えている。

2. 解説員へのインタビュー

これまで筆者は、動物解説員の K さんへのインタビューを通じて、①K さん自身が日常、解説活動をする上で信念としていること、②仕事のモティベーション、③自分と来園者の関係などについて知ることができた。これら一連のインタビューの中では、K さんは、私からのインタビューによって、自身の業務を客観視することになったことを、まるで「解剖されている感じだが、いやではない」という表現で語った。

3. 媒介物の役割と「やりとり」にとっての必要性

今年は、来園者とのどのようなやりとりがあるのか、やりとりをもたらすものはプロセスはどのようなものか、それを筆者と K さんとのあいだで少し整理してみた。その中で、①動物観察のツールは、それを介して観察という行為が進むだけでなく、その媒介物に「利用者にこれから展開するであろう活動をイメージさせ、見通しをもたせるもの、そして活動の記録ともなる」という役割があることが明らかにされた。 ②「やりとり」は、言語的なものだけでなく、非言語的な「雰囲気」や「表情」ということが大きいようである。 ③こうした「やりとり」や媒介物の進化(向上)が、自身の活動のもティベーションに深くかかわっている。という結果が得られた。

ジェンダー役割に対する判断の複数性

滑田明暢 立命館大学大学院 文学研究科

本発表では、ジェンダー役割に対する判断が個人においても一様でないことを研究によって示し、ジェンダー役割態度とは何かを考察する。研究では、未婚の女性を対象としたインタビューを行い、Edwards (2004) や Potter (1996; 1997) が提唱するディスカーシブ心理学アプローチ (Discursive psychology approach) を用いてデータ分析を行った。その結果、個人においても場面や状況によって異なるジェンダー役割観をもち得ることが確認された。具体的にはジェンダー役割への判断の 3 つの形が見出され、1 つめは、ジェンダー役割によって不当な扱いを受けた経験に根ざした判断の形。2 つめは、家事分担に関して相反する考えを同時にもっていることから、判断に葛藤が生み出されているもの。3 つめは、学術的知識をもっている人としての判断であった。宇井 (2002) は場面によって用いられる判断基準が異なることを指摘したが、ジェンダー役割を判断するための基準が既に構築さ

れていたというよりは、判断はある文脈に出会うことによってつくり出される、という側面があることを本研究は示唆している。

引用文献

- 宇井美代子. (2002). 女子大学生における男女平等を判断する基準: 公的・私的・個人領域との関連から. 青年心理学研究, 14, 41-55
- Edwards, D. (2004). Discursive psychology. In K. Fitch and R. Sanders (Eds). *Handbook of Language and Social Interaction* (pp. 257-273). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum
- Potter, J. (1996). Representing Reality: Discourse, Rhetoric and Social Construction. London: Sage
- Potter, J. (1997). Discourse analysis as a way of analysing naturally-occurring talk. In D. Silverman (ed). *Qualitative Research: Theory, Method and Practice* (pp 144-160). London: Sage

子どもが生きるできごと世界としての〈学び〉の生成過程と 成りたちに関する研究

松本健義(上越教育大学大学院学校教育研究科)·三盃美千郎(上越教育大学大学院学校教育研究科)·荒博史(上越教育大学大学院学校教育研究科)·目黒公三(上越教育大学大学院学校教育研究科)·佐々木晶子(上越教育大学大学院学校教育研究科)·高山俊徳(上越教育大学大学院学校教育研究科)

子どもたちは学んでいるとき,個別のできごと世界と出合い生きている。同時に,自分が生きている世界を他者と共同化された世界として共に生き合い,つくり合おうとしている(松本,2004)。子どもは,もの,こと,人と働きかけあって生きる過程で,ものを記号や道具等につくり変えて他者とともに使用することにより,世界をできごととして生成し,それにより自分や他者の感じ方,考え方,あらわし方をつくり変えていく(ワーチ,2002;エンゲストローム,1999)。また,できごとを協同形成していく実践の社会的関係性を,自分と他者とのあいだに成り立たせていく(レイブ&ウェンガー,1991)。〈学び〉という実践がつくる変容は,〈もの〉から〈こと〉への世界の生成であり,その世界を協同的につくる子どものふるまいの生成であり,できごと世界を生成する実践の社会的関係の生成であるといえる。

本研究では、〈学び〉の生成過程と成りたちについて、算数・数学、体育、図工等の学習活動場面を取り上げ、チームによる協働研究を進めることで、学校で子どもたちが日常的な相互行為を通してできごと世界として〈学び〉をどのように生成しているのか、その生成過程を明らかにし、子どもたちの〈学び〉の成りたちについて新たな視点や示唆を得ようとするものである。

キャリア発達と職業集団語 初航海の実習生は『シーマンシップ』をどのように捉えるか

守下奈美子 (筑波大学大学院) 熊田 公信 (独立行政法人航海訓練所)

船員社会に『シーマンシップ』という職業集団語が存在するが、これまでの調査で熟達の度合いで捉え方が異なることが明らかになった(守下、2005)。そこで本研究では、初めて乗船する実習生が1ヶ月の航海を経て『シーマンシップ』をどのような内容として捉え、それがどのような場面で形成されるのかを明らかにした。対象は大学1年生(18~23 歳)259 名で、方法は自由記述式質問紙を実施した。教示文は①『シーマンシップ』という言葉で思い浮かべるイメージや連想される言葉を思いつく限り書いてください②『シーマンシップ』という言葉を初めて聞いたのはいつですか③この実習を通して『シーマンシップ』が使われていた場面があれば書いてください④あなたが思う『シーマンシップ』とはどのようなものですか、とした。これにより、シーマンシップの内容については①と④、場面については②と③から分析を行った。

高校家庭科教科書に対する言説分析と再構成への試み

ハッ塚一郎 (熊本大学教育学部) 玉岡 愛 (京都大学人間・環境学研究科)

高校家庭科教科書を対象として、イアン・パーカーの議論に依拠した言説分析を実施し、そこに内在する矛盾と多声性を摘出した。それを踏まえて、家庭科教科書の中で、学習者の存在を等閑視したまま異質なアクター同士の対話がもっぱら展開されている可能性を指摘するとともに、学習者を不可欠のアクターとして位置づける、あり得べき「家庭科X」の可能性を提示した。家庭科教科書の目次を検討すると、「相互に連関を持たない内容の羅列」と、それに伴う「内容の重複・反復」を看取することができる。そこで、目次項目を素材としたKJ法を実施し、内容の連関に則した目次の並べ替えを行った。その結果、「発達過程の中の学習者」「社会制度の中の学習者」「文化と生活知識の中の学習者」の3部構成として、常に学習者を念頭に置いて著者たちが対話を交わす教科書を構想することができた。

文献:イアン・パーカー『ラディカル質的心理学 アクションリサーチ入門』ナカニシヤ出版

子どもの反応から ALT が受ける影響

黒田真由美 (京都大学大学院)

多くの小学校で英語活動が実施されるようになり、活動内容や実施のノウハウが蓄積されてきている。ALT (Assistant Language Teacher)には経験の浅い者が多いが、このノウハウを利用したり、授業を通して自分なりに活動を改良している。学級担任との関わり方や子どもとの接し方を工夫しながら、授業を行っている。その一方で、ALT にとって活動計画の変更は困難であることが指摘されている。本研究では、経験を積んだ ALT が活動内容をどのように調整しているのかについて明らかにすることを試みた。公立小学校の 5.6 年生(全4クラス)を対象として行われている英語活動を観察し、授業内容の変化について検討した。その結果、ALT は子どもの反応を基に臨機応変に活動内容を変えるだけでなく、長期的な視点で実施する活動を取捨選択していることが明らかになった。当初持っていた活動方針の変更を明言することはなかったが、多様な視点から子どもに応じて実質的に変化させ活動を調整していた。

基準的価値と人工物の選択・創出

黒須 正明 (総合研究大学院大学 兼 メディア教育開発センター)

人間は人工物に取り囲まれた世界に住み、自分の目標達成のためにそれらを利用している。しかし同一の目標達成のために、人間は、時代により、地域(文化圏)により、多様な人工物を開発してきた。各人は、それらの選択肢の中から自分の基準に適合したものを選択し、あるいは自分の基準に適合した新たなものを創出する。集団規範の強かった時代には、人工物の選択は時代様式や地域様式に従うものであったが、20世紀後半の個の時代になり、各人は自らの基準的価値にもとづいて選択や創出を行うようになった。それらの人工物が基準的価値に照らして適切なものであるかをユーザ工学の観点から考えるのが境界科学としての人工物発達学である。今回は特に価値観と人工物の選択や創出との関係に焦点を当てる。すなわち、ユーザビリティは基準的価値のひとつではあるが、他にも経済的価値観、審美的価値観など多様な価値観があり、どの基準的価値に依拠するかは個人によって異なっている。

高校生の自己物語にみる意味形成 ー学校教育におけるナラティヴ・アプローチー

加藤 美紀 (湘南白百合学園中学高等学校)

本発表は、日常の葛藤的体験の意味づけと連関する生きる意味の生成の視点から、高校生の自分史と自己語りを分析することによって、生徒の意味形成に対する物語論的支援の在り方を検討する。

本研究では、私立女子S校をフィールドワーク調査の対象とした事例研究を行った。総合的学習の 課題作品である高校生の自分史テクストの分析、執筆者生徒への半構造的面接調査、質問紙調査を主 な資料として、青年期の生きる意味探究の様相を事例別に描くとともに、意味づけの類型化を試みた。

その結果、i)重要な他者との間につくられる心理的場所¹が自己物語の形成基盤となる、ii)心理的場所において時間的展望が形成される、iii)各人固有の内的ファンタジーが自己物語生成の重要な触媒として機能する、iv)日常的体験の意味づけと生きる意味への問いが往還するなかで、次元の異なる多重的な自己物語が生成することが示唆された。

それゆえ、意味生成の主要な要素である重要な他者と時間的展望及びファンタジーの役割に着目し、 生徒固有の意味の枠組みである自己物語づくりを支援することによって、青年期の生きる意味への問いを支える学校教育の可能性を探りたい。

注) 1 やまだようこ 1987 \mathbb{C} ことばの前のことば-ことばが生まれるすじみち- 』新曜社

半構造化面接を用いた大学生の領域固有的無気力の検討

長内優樹 (大正大学大学院人間学研究科)

問題:長内(印刷中)は、「知覚された無気力」を領域固有的無気力と領域全般的無気力に分類した。また、大学生を対象にした領域固有的無気力の研究では、特定の領域で無気力を知覚しやすい傾向があることが示唆された。しかし、どのような条件で領域固有的無気力を知覚するのかは検討されていない。

目的:領域固有的無気力を知覚する条件を探索的に把握することを目的とした。

方法:長内(印刷中)で使用した質問項目を用いて半構造化面接を実施した。対象は大学生(23 歳・男性1名,20歳・女性1名)である。

結果:本人にとって問題となる「否定的な領域固有的無気力」の発話に注目した。その結果,どの領域においても「やらなければいけないと思っているが,やる気がしない」という共通する条件があることが示唆された。

引用文献:長内優樹(印刷中).大学生における知覚された無気力の研究―領域固有的無気力が領域全般的無気力に及ぼす影響― 応用社会学研究 東京国際大学社会学研究科.

裁判員の「非専門家性」について一模擬評議とインタビューに基づいて

荒川 歩 (名古屋大学大学院法学研究科)

2009年5月21日から裁判員制度が実施される。この裁判員制度は、一般市民が裁判官とともに、公判・評議に参加し、事実認定や量刑判断などに携わる制度であり、評議のあり方が研究の一つの焦点になっている。評議を分析した研究は、〈質問-応答〉の関係から、裁判員が教室における生徒のような役割にあると指摘している(高木,2007の西條報告)。しかしこのアナロジーに回収されない側面もあるだろう。そこで、本報告では、裁判官役の法科大学院生1人、裁判員役の学部生4人を1評議体とした模擬評議の分析結果を、裁判員の非専門性がどのように現れるのかに焦点を当てて報告する。分析の結果、法的判断の論理を認めた上で、別の考え方を指摘する発話があった。非専門家性は、市民の文脈による応答の是認と、最終的な法的文脈の尊重という面に現れた。

引用文献 高木光太郎 (2007). 裁判員制度における評議 —コミュニケーションをどのように デザインするか 法と心理, 6, 52-55.

高齢期における発達のシンボルとしての植物の成長

松本光太郎

(名古屋大学 エコトピア科学研究所)

発表者は高齢者が居住する特別養護老人ホームに通い、居住者の方々を外へ連れ出す営みを続けている。当たり前に外へ出ている発表者にとって、普段外へ出る機会がほとんど訪れない彼/彼女らと外へ出ることはいろんなことに気づく機会となる。また気づきの機会を重ねることにより、高齢期という時節を生きていることについて、彼/彼女の視点から了解することにもつながっている。

外へ出ると、前回の外出との違いに言及する方が多い。特に、場所に根ざし、いつもそこにいる植物たちの変化に言及することが多い。「前回は実が小さかったのに、こんなに大きくなっている・・・ 云々」。施設内で変化や動きを目にする機会の乏しい居住者において、外へ出た際植物の成長に目は吸い寄せられるようである。

居住者である 1 人の女性は、居室に隣接するベランダに置いているに草花を植えている一つの鉢植えの世話を、窓枠越しに車いすから腰をかがめて手を伸ばし日々続けている。彼女が自宅で過ごしていたときの写真を拝見すると、趣味という言葉に納まらないくらいに家を鉢植えが取り囲んでいた。それら日々丹精込めて世話をした鉢植えは施設に入居する際すべて処分した。彼女は、施設の物理的環境の制限と、足だけでなく手も利かなくなってきたことから独力での世話が難しくなってきたことを、自分に言い聞かせるように話すことを繰り返すことで自分を納得させようとしているようだった。他の居住者と同様に、発表者は彼女を外へ連れ出す機会を得た。他の居住者が亡くなったり、病気で入院しがち/し続けるなかで、彼女とは幸運にも植物を観賞する機会に恵まれた。春には桜や菜の花、夏には朝顔、秋には秋桜、冬には山茶花など固有の季節に咲く花を毎年一緒に観賞することを重ねた(松本、2007)。彼女は植物を眺めたり触れたりする際に「楽しみだよ」とよく口にする。彼女が口にする「楽しみ」という言葉は、成長へ至った際の喜びへの足取りとして今を位置づけ世話することを通して期待をふくらませ待っていること、そのことを指しているように思える。

高齢者は発達しない、高齢者は有能であり発達している、高齢期は喪失というライフサイクルを生きている、など高齢期の発達について言及がなされてきた。しかし高齢期を生きている当人の日々の変遷を発達論にもたらすものは皆無ではなかったか。また「自分が発達する」ことに固執しすぎてはいなかっただろうか。身の周りが変わっていくこと、そのなかでも見過ごされがちな植物の成長をシンボルとして、自分の日々の変化を当たり前に感じ、「自分が発達する」ことを問わなくてよくなること、そんな発達論の構想について議論したい。

文献) 松本光太郎 2007 人間・植物関係における質的研究の意義と可能性 人間・植物関係学会雑誌 6(2) 7-17

30-14 発表中止

障害をもつ妹の主体性の発見 一姉による自己エスノグラフィの試み

原田満里子・能智正博 (東京大学大学院)

本発表では、障害(脳性まひ)をもつ25歳女性の姉である筆者の語りをもとにして、筆者がもつ妹についてのイメージの変遷を、自己エスノグラフィによって描くことを試みている。自己エスノグラフィとは、自叙伝的な記述をとおし、個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示していく質的研究のひとつである(Ellis 2004)。その厳密な定義や用法は曖昧なまま発展してきているのだが、本発表では文化の中に生きる自分自身の経験を再帰的に対象化し、自己一他者の相互行為を深く理解することを主眼とする。筆者はまず、共同研究者との語り合いのなかで、妹との関係を中心としたライフストーリーを語った。その語りをもとに、分析の方向性を定めながらさらなる対話を続けていったところ、それまで姉と一体化していた妹の主体性や独自性が、時間的経過に伴う姉妹間、および他者との相互行為により変化していったことなどが明らかとなった。

引用文献: Ellis, C. (2004). The ethnographic I: a methodological novel about autoethnography. AltaMira Press.

初鳥 日美 立命館大学大学院 応用人間科学研究科 研修生

人にとっての「病いの意味」は個人的で、状況や関係の中で変化する多義性を持っている。本研究は、壮年期(40歳代から50歳代)に脳血管障害を発症した男性とその妻との語りを調査した。3組の夫婦の語りの中からは、従来の障害による「絶望」からの「新たな自己」を再獲得する過程とは異なる姿が見られた。対象者は障害を諦めでも居直りでもなく、肯定的な意味を含めた「しょうがない」と語っている。対象者の語るライフストーリーの中の「しょうがない」を分析すると、「自業自得」、「考えてもしょうがない」、「出来ないものはしょうがない」、「前向きな姿勢」という意味づけが含まれていた。対象者は、障害を自身の今までの生き方や人生の中で意味づけを行っていた。障害を受容すると一言で語られるものではなく、人は様々な視点で障害を意味づけているという事が分かった。

質的研究における「フェルトセンス」の有効性 -ジェンドリンの TAE-

得丸さと子 (日本女子体育大学)

発表者は、ユージン・ジェンドリンらの開発した理論構築法 TAE(Thinking At the Edge) $^{1)}$ を質的研究に応用する試みを続けている $^{2)}$ 。 TAE の特徴は、一種の「感性」であるフェルトセンス(felt sense)を活用する点である。フリック(2002)が『質的研究入門』で、理論生成的研究では「問題を大まかに示すだけの『感受概念』を出発点とする」と述べるように、「感性」を活用する質的研究法は多いが、その役割を正面から論じるものは少ない。本発表は、TAE におけるフェルトセンスの役割を論じることを通じて TAE を紹介するとともに、質的研究における「感性」の議論に一石を投じることを目的とする。

- 1) Gendlin, E. T., & Hendricks, M. (2004). TAE (Thinking At The Edge(TAE) Steps). Folilo, 19: 11-24
- 2) 得丸さと子 (2008)、TAE による文章表現ワークブック、図書文化:145-152

(編集担当者へ)

字数が多い場合は、最後の「とともに」以下を削除して、その文の主語を「本発表では」としてください。

また、字数の関係で、フリックの文献は簡略に示しましたが、必要があれば、原稿の一部を削って下の文献を入れてください。削除箇所はお任せします。

3) Flick, Uwe (1995) 小田博志・山本則子・春日常訳 (2002) 質的研究入門:「人間の科学」のための方法論,春秋社

語られない語りを考える ---二次的外傷性ストレスの調査研究から---

道免逸子 甲南大学大学院

DV 被害者支援事業に携わる人の困難、特に二次的 外傷性ストレスについての探索を目的に、7名の女 性センターカウンセラーに対し、半構造化面接によ る聞き取り調査と Figley の共感満足/共感疲労の 自己テストを使った質問紙調査を行った。7名の語 りから、共感疲労・代理トラウマといった二次的外 傷性ストレスの他に、バーンアウト、一次的外傷性 ストレス、身体症状が分ち難く絡み合った、援助者 の複雑なストレスの全体像が浮かび上がった。本研 究においては、質的研究と量的研究の組み合わせと いう方法により、語りからだけでは分からないこと、 また尺度の結果からだけではわからないことを考 察している。こうした研究方法の成果について、ま た、支援者・研究者のポジショニングの問題や、調 査研究が被調査者に及ぼす、肯定的・否定的影響と 共に、語りの欠如、つまり語られない語りを考える という、質的研究だからこそ可能となったアプロー チについてご報告したい。

新潟水俣病患者を支援し続ける人々の物語 ースライド・フィルムを使った「ナラティヴ生成」インタビューの試みー

坂井さゆり(新潟大学医学部保健学科) 酒井菜津子(新潟大学大学院保健学研究科) 宮坂 道夫(新潟大学医学部保健学科)

新潟水俣病問題は、昭和 40 年の公式発表以来その原因や認定基準等をめぐり、長い闘争の歴史をたどってきた。地域における差別や偏見は根深く、患者、家族そして支援する人々もまた多重の苦悩や困難を抱えている。本研究では、新潟水俣病医療に生涯に渡って取り組み、若くして亡くなった白川健一医師が遺した昭和 50 年代のスライド・フィルムを使い、新潟水俣病問題に数十年に渡り関わり続けた人々6 名にインタビューを行った。6 名は、白川医師が遺した映像からメッセージを感じ取り、忘れていた記憶を回想しながら、当事の自分の価値観や行動、新潟水俣病問題の歴史的経緯をインタビュアーに、いわば語り継ぐかのように、自己を意味づけていた。さらに、新潟水俣病患者と関わることで得られた学びを語りつつ、未来に向けた新たな自己のあり様も語った。語り終えた 6 名の表情はとても活き活きとしていた。これらのインタビュー結果から、媒体を使ったインタビュー方法についての考察を試みる。

がん患者の事例における医療者一患者関係 および今後の課題

小松楠緒子 明治薬科大学社会学研究室

本発表では、あるがん患者の事例を医療社会学の観点から分析し、医療者ー患者関係のあり方について考察する。さらに、それを踏まえて、今後の課題を提示する。

ここで事例としてとりあげるがん患者 A さんは、これまで乳がん、子宮がん、肺がんに罹患した。現在は、肺がんが転移したと思われる病巣が首までひろがっている。ただし A さんの場合は、転移と思われる病巣をかかえたまま、長期生存し、企業の管理職として就業をつづけ、社会人として活躍している点に特徴がある。

Aさんは、肺がんの病巣が他にひろがっていると告知され、一時は絶望していた。しかしその後、セカンドオピニオンを求めて受診した医者は親身に A さんの話を聴き、自然治癒力の資料を手渡した。これにより、Aさんは前途に希望を見いだした。気力をとりもどしたAさんは、抗がん剤などの投薬治療と気功・イメージ療法などの代替医療を併用し、がんの進行は止まっている。

この事例を通して患者は医者に、①緊密なコミュニケーション、②代替医療を含む幅広い選択肢に関する情報、等を求めていることがわかった。今後の課題としては、①医療者のコミュニケーション能力の向上、②患者教育、などが挙げられる。

在宅ターミナルケアに取り組む看護師のライフ・ストーリー― 心理的援助の実践と死生観―

向後裕美子 (東京大学大学院教育学研究科)

本研究は、在宅ターミナルケアに取り組む訪問看護師のライフ・ストーリーの分析をとおして、ターミナル患者への心理的援助実践と死生観がどのような関わりをもっているかを検討するものである。慢性疾患の増加と告知率の上昇に伴い、自らの死を意識しながら生きる期間が長期化し、ターミナル患者への心理的援助の必要性が指摘されている。また、現在は日本人の約8割が病院で死亡しているが、今後は在宅死が増加することが予想されている。しかし、多くの人が在宅での看取り経験を持たず、心理士による訪問カウンセリングがほとんど実施されていない現状では、医療者、特に看護師が心理的援助の重要な役割を担っている。そこで本研究では、在宅ターミナルケアに取り組む看護師へのインタビューを行い、患者への心理的援助について検討したところ、彼らの援助実践は死生観と深く結びついており、こうした死生観は、看護教育や職業的経験だけでなく、人生全体の経験を通して培われたものあることが見いだされた。

離島地区に住む成人吃音者の語り

川 合 紀 宗 (広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター)

(目的)本研究は、Phenomenological Approach (Creswell, 1998)を用い、離島に在住し、専門家の受診やセルフへルプグループへの参加経験のない成人吃音者のライフストーリーを集め、彼らの吃音に対する知識や経験、態度、そして吃音が彼らの社会生活にどのような影響を与えてきたのかを明らかにし、今後、専門家はどのように離島地区に住む吃音者に手を差し伸べてゆけばよいのか、その方策を探ることを目的とした。(方法)参加者は某県離島地区に住む 20-60 歳代の成人男性吃音者 6 名。1人あたり約 45分~60分インタビューが実施された。参加者への質問は、デモグラフィック質問に加え、自由回答形式の質問(主質問、従質問、プローブ)が実施された。主たる質問項目は、吃音に対する知識、経験、態度、感情などに関するものであった。(結果および考察)吃音の知識・認識に乏しい者が多く見られた。また、吃音に対する態度は、若い者ほど吃音に対してよりネガティブな傾向を示した。全員が吃音のことでいじめやからかいの経験があり、吃音が社会生活に何らかの影響を及ぼしていると述べた。本研究の結果は、川合(2006)の結果に追随するものであった。

Cresswell, J. W. (1998). Qualitative inquiry and research design: Choosing among five traditions. Thousand Oaks, CA: Sage.

川合紀宗(2006). 専門家の受診や自助組織への参加が困難な地域に住む成人*吃音者の語り*:.A Grounded Theory Study. 日本特殊教育学会第44回大会発表論文集.

ペット飼い主の動物看護師に対するケア支援者認識の移行過程 小倉啓子 ヤマザキ動物看護短期大学

- 1. 問題:家庭の犬猫飼育頭数は 2200 万頭(2007年ペットフード工業会調査)となり、ペットの長命化による日常的ケア・慢性疾患・介護や飼い主の老齢化問題など、飼い主への飼育支援が重要になっている。発表者は飼い主のペットケアについてインタビュー調査を行ったところ、飼い主の多くが支援者として獣医師と飼い主仲間・家族をあげ、動物看護師をたんに「受け付け・手伝い」とみていた。一方、動物看護関連の書籍・学会誌では、動物看護師は飼い主サポートを重視する姿勢を示しており、双方に支援者認識についてギャップがみられた。今後は、飼い主に動物看護師を支援者として認識・活用してもらえるような関わり方にしていく必要があると考えられる。
- **2. 目的**:飼い主が動物看護師をケア支援者として認識するのはどのような相互作用を通してかをとらえ、動物看護師を飼い主支援者として活用出来るための示唆を得ることである。
- **3. 方法**: 比較的健康な犬猫飼い主 24 名(5 0 歳代中心)に日常的・医療的ケア、動物看護師との関わりについて 60 分~90 分のインタビューを行い M-GTA を用いて分析した。
- **4. 結果**: 飼い主の認識変化を説明する中心概念は動物看護師に対する'頼りになる実感'である。 飼い主が「役割不明確な者との関わり」・「ケア問題の2元的解決」に留まらず「自発的なケア相互作 用」を通して'頼りになる実感'を得られれば「身近な専門職への期待」を持つことが示唆された。(「」 はカテゴリー。動物看護師は一般的名称)

乳児の終末期医療を支えた当事者の、学びと変化に関する一考察 - 医療従事者をエンパワメントする幼児教育の視点の付与-

岡本 雅子 山口 悦子 (関西福祉科学大学) (大阪市立大学)

本発表は、大阪市内にある医学部附属病院小児病棟で行っている長期療養患児とその家族の保育支援、及び参与観察で得た事例を基に、乳児の終末期医療に幼児教育の視点が加わったことで、①そこに関わった者が何を学んだのか、②その学びは各当事者にどのような変化をもたらしたのか、③変化の結果として集団の構成員の行動・意味づけにおける質的変容へと展開するに至ったプロセスを考察するものである。本発表でいうところの幼児教育の視点とは、医療者側とも患児側とも距離を有する視点を意味する。また視点を付与する主体は、病棟に常駐しない職員としての保育研究者と定義する。本研究では、患児と当事者としての家族(両親)・医療者(看護師・医師・コメディカルスタッフ)を対象に、幼児教育の視点がもたらす医療従事者のエンパワメントおよびファミリーセンタードケアへの貢献について検討する。

妻の死の受け入れ

一配偶者との死別経験を有する男性の妻の死に関する語り一 小林信一

(京都大学教育学研究科)

死別経験後の反応の要因として、配偶者の死というものに対する女性に比べた際の男性の脆弱性が指摘されている(Stroebe & Stroebe, 2001)。一方、死別経験に関する肯定的側面に関連するものに、発病から死までのケア提供があげられる(渡邉・岡本,2005; 宮本,1989)。そこでは、ケアの頻度やケアの満足感こそが、死別経験による人格的発達を高めるものとされている。死に逝くものへのケアというものが、死別経験後の変化のプロセスや構造を捉える一つの鍵とすると、臥床期間中に配偶者に対して如何なるケアを行うとともに、配偶者が死に向かうという現実をいかに認識し、ケアの満足感というような意味付けが死別後いかに生成されるのかを検討する必要があると考えられる。そこで本研究においては、配偶者との死別経験に対し脆弱性が指摘されてきた男性は、配偶者が死に向かう過程においていかなる経験をし、それらをいかに認識しているのか、死別後の語りから検討した。

大学院の研究プロジェクトにおける外部入学の大学院生の アイデンティティ変容の軌道に関する研究

岸 磨貴子 (関西大学大学院) 盛岡 浩 (関西大学大学院) 久保田賢一 (関西大学)

関西大学大学院総合情報学研究科では大学院生を中心に様々な研究プロジェクトを実施されている。研究プロジェクトは、大学院生の興味・関心に基づいて古参者である博士後期課程または博士前期課程の院生がリーダーシップをとり企画・運営される。プロジェクトの多くは学部生、現職教員、他大学の学生・教員などを含む多様な分野・立場の人が参加している。外部から入学してきた院生は新参者として研究プロジェクトに参加する。なぜなら院生は研究プロジェクトを通して修士論文に取り組むからである。しかし外部から来た院生にとって自分の研究テーマや関心にあったプロジェクトに出会うことや既存の研究プロジェクトに馴染むことは容易ではない。本研究では、外部から来た7人の大学院生を対象に、研究プロジェクトに参加し役割を獲得していく軌道およびそれに伴うアイデンティティの変容について調査した。分析の結果は、レイブとウェンガー(1993)の正統的周辺参加論の視点から考察する。

参考文献

- 曽余田浩史ら(2001)現在の大学院生の大学院生活に対する認識についての調査研究-徒弟制の教授・ 学習形態に照らして-,中国四国教育学会教育学研究紀要,第47巻,pp.426-437
- 原田杏子 (2004) 専門的相談はどのように遂行されるかー法律相談を題材とした質的研究ー,教育心理学研究,教育心理学年報 Vol. 45, pp. 344-355
- 久保田賢一・岸磨貴子・今野貴之・盛岡 浩 (2007) 高等教育における実践コミュニティの醸成,日本教育工学会第 23 回全国大会,pp. 507-508
- ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウェンガー, 佐伯胖訳, 福島真人解説 (1993) 状況に埋め込まれた 学習-正統的周辺参加-, 産業図書, 東京
- 石黒広昭編著(2004)社会的文化アプローチの実際-学習活動の理解と変革のエスノグラフィーー, 北大路書房,京都
- 上野直樹・ソーヤーりえこ編著(2006)文化と状況的学習-実践、言語、人工物へアクセスのデザイン-、にほんごの凡人社、東京都
- 高木光太郎(1993) 状況論的アプローチ」における学習概念の検討 ~正統的周辺参加(legitimate peripheral participation) 概念を中心として~. 東京大学 教育学部紀要, **32**; 265-273
- 高木光太郎(1999) 正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張. 東京学芸大学海外子 女教育センター, **10**; 1-14

本邦研修における海外研修員の意識の変容に関する研究

今野 貴之

関西大学大学院 総合情報学研究科 岸 磨貴子 関西大学大学院 総合情報学研究科 久保田 賢一 関西大学

現在、諸分野において我が国の経験の活用や開発途上国の人材育成を目的に、海外から技術研修員

として受け入れをおこなっている。そのような中、異なる文化やシステムを持つ日本での教育研修では、途上国の実情とかけ離れているため研修員が"葛藤"を起こすことや、「日本は設備が整っているからできる」「日本のシステムと私たちのシステムは違う」というように自国と日本を比較するだけにとざまったり、日本の教育方法をそのまま適応しようとしてうまくいかないといった現状が見られる。本研究では、研修員が日本での研修(社会的教育活動)に参加することを通して、どのように"自国の教育への適応"を捉えていくようになるか、その変容を考察する。具体的には2007年8月から11月の3ヶ月間本邦研修を受けたシリア・アラブ共和国からの研修員1名を対象とし、研修員の振り返りシートとインタビューをもとに、1)研修員は"葛藤"をどのように克服していったのか、2)研修員と日本側の相違を解消することはできるのか、3)社会的教育活動に参加するという自発的で主体的な学びの場で、研修員は何を学びどのようなスキルを獲得したのか、について社会文化的アプローチの観点から分析を行う。

参考文献

小野由美子 (2005) 教師教育の実践報告 教師教育における国際教育協力--JICA 長期研修員の能力開発と大学の国際化、日本教師教育学会年報 (14)、pp. 139-149

佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』、新曜社

ト部 朋(1999) 途上国における日本の教育経験の活用可能性--国際協力事業団(JICA)研修員の研修報告の分析から、国際教育協力論集 2(1)、pp. 113-120

想起のプロセスによる 「言いっぱなし聞きっぱなし」の語りの検討

酒井菜津子¹⁾、坂上香²⁾、坂井さゆり³⁾、宮坂道夫³⁾ (¹⁾ 新潟大学大学院保健学研究科、²⁾ 東京大学医学部付属病院、 ³⁾ 新潟大学医学部保健学科)

断酒会には「言いっぱなし聞きっぱなし」という独特のルールがあり、一見すると無関係に連続した語りがなされているようにみえる。これについて松島(2002)は、断酒会とは「想起」し続ける場であるとしている。本研究では言いっぱなし聞きっぱなしのルールの背後にある語りの関係を明らかにするため、某県断酒会の会員 9 名を対象に計 8 回の参加観察を行った。その結果、言いっぱなし聞きっぱなしによる語りには想起誘因が存在することがうかがわれ、語りを想起誘因の存在する位置によって、(1) 前者の語りにある場合と (2) 共有の情報・話題の中にある場合の 2 つに分類することができた。また想起されたことは主に感情で、実際に語られたことは経験にもとづく具体的な出来事であると考えられた。以上から、言いっぱなし聞きっぱなしによる語りは、想起されたことを具体的な事柄に置き換えて語りとして表出するという語り構造をもつことが示唆された。 松島恵介. (2002) . 記憶の持続 自己の持続. 東京:金子書房.

小学校教師の問題状況の詳解と対応方略

徳舛 克幸 (筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

教師としての量的・質的経験の差異は、問題状況への対応方略にどのような違いをもたらしているだろうか。そして、実践の経験の差異は、実践における問題状況を詳解するのにどのような違いをもたらすだろうか。

これらについて検討するため、実践上の問題に小学校教師がどう対応するか、あるいはどのように対応してきたかを捉え、量的・質的経験の違いを明らかにすることを目的とした。同時に、実践の問題に際した場合、その状況をどのように説明し問題を構造化するかを詳らかにすることを目的とした。調査は実践上実際に起こりうる架空の、曖昧な問題状況を設定し、実際の仕事場に即して具体的に自由記述で回答してもらった。並行して、どのようにそれらの問題を定式化したかをインタビュー調査によって尋ね、回答を得た。つまり協力者と調査者の対話により協働で回答を作り上げていく質問紙ーインタビューー体の調査方法が取られた。

協力はなぜうまくいかないのか

朴 東燮

(釜山大学 大学院 教育学科) Szatrowski Polly (Minnesota University)

金 琦

(筑波大学 大学院)

本稿は問題解決場面でどのようにしたら子供たちが協力をし、それが後の個人のパフォーマンスにつながるのか問う代わりになにが子どもたちの間の協力を成立させ、なにが協力を成り立たせないのかを問うことを研究の目的にする。その問いを状況の定義や状況の定義のゆれと概念に基づいて行う。状況の定義とは、学習や問題解決などの場面「参加者の能動的な場面解釈の過程とその産物」(Park & Moro, 2006)を意味する。状況の定義は、その場の参加者による積極的な状況の意味付けであり、ときには逸脱した状況の定義によって、その場が混乱させられることになる。状況の定義という概念は心理学の実験などの場面で研究者が被験者になにかの行為を求めるときにそれがあらかじめ設定された基準は予測とおりにいくという従来の心理学の暗黙の前提に徹底的な疑問を投げかける。状況は研究者によってあらかじめ設定されているものでなければ、研究者が被験者に一方に与えることができるものではない。その代わり状況はあくまで行為者の能動的な解釈や意味づけの産物である。そしてけっして固定されたものではなくいつもゆれの可能性に開かれているものである。

本稿はこのような状況の定義や状況の定義のゆれの観点に基づいて実際の子どもたち同士で行われた共同問題解決活動のプロセスを分析する。このような観点に立つことにより協力がいかに成立するのかあるいはなぜうまくいかないのかを明らかにすることができると思われる。

引用文献

Park, D. S., & Moro, Y. (2006). Dynamics of situation definition. *Mind, Culture, and Activity*, 13(2), 101-129.

Understanding School Curricula in terms of Narrative Approach

Soyoung Park, Pusan National University, South Korea

This study will analyze what is narrative approach and what implications it has on school curricula. For this purpose, three research questions were asked: First, what is narrative approach? I will contrast narrative approach and paradigm approach. Second, what are the characteristics of narrative approach on curricula? I will investigate the special meanings of narrative approach on curricula. Third, what are the implications of narrative approach on school curricula. Several suggestions will be derived to understand and develop school curricula.

The method of this study will be to review and analyze the related literatures. The main resourses will be Bruner's books, Clandinin and Connelly's books, and articles that are related to narrative approach.

The results of this research are expected to contribute to the future school curricula because narrative approach will come to occupy the important position in 21C multicultural society.

日本質的心理学会第5回大会実行委員会

委員長 茂呂 雄二 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

石隈 利紀 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

濱口 佳和 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

好井 裕明 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

櫻井 利江 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

平山 満義 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

香川 秀太 (筑波大学大学院人間学群非常勤講師)

臼井 東 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

徳舛 克幸 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

野村 侑加 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

守下奈美子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

岩木 穣 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

太田 礼穂 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

灰田 和正 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

協 賛 (五十音順)

(株)学文社 (株)北大路書房 (株)弘文堂

(㈱東信堂 ㈱ナカニシヤ出版 日本事務光機㈱

(㈱ニホン・ミック 関放送大学教育振興会 ㈱北樹出版

日本質的心理学会第5回発表論文集

2008年11月29日発行

発行者 日本質的心理学会第5回大会実行委員会

委員長 茂呂 雄二

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学大学院人間総合科学研究科

茂呂雄二研究室気付

E-mail: quality-psy@human.tsukuba.ac.jp